
変な星でツッコミ生活！？

神離人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変な星でツツコミ生活！？

【Nコード】

N3210K

【作者名】

神離人

【あらすじ】

特星という変な星に住む高校生で主人公の雷之 悟。その主人公とその他の仲間や敵が繰り広げる変わった生活に悟はどのような行動に出るか？もし、この小説を読む人が居るのならば、誰がどのような発言をするのか予想していただきたい！

内容について大まかに言っちゃうと、ちょっと現実的だけどほとんどファンタジックな世界で、主人公がどうか自覚している人達や、主人公とか言ってるけど大丈夫？という人が、意味なく起こる問題

を適当に片付けるお話です。私のストーリーセンスの低さを許せる自身のある人も、許せないけど見てやろうって人も、見てくれてありがとうございます！

『変な星でツツコミ生活！？第二期編』を凄く優先的に更新してありますので、こちらの更新は結構な確立でされないと思いますが、ご了承ください。更新する可能性も一応ありますので。

○話 最初の話って世界観やキャラの紹介が多いのは事実

@悟視点@

あー、どうもこんにちは。

俺の名前は雷之^{らいの} 悟^{ちゆう}。いろいろ省略して紹介すると、高校二年生でツツコミ役をしている主人公だ。周りにまともな人が集まらないのが特徴で、特星の瞑宰京という町の寮に住んでいる。その他のことについては後に説明する。

「さて、朝食でも作るか」

基本的に一人暮らしだから食事はそれなりに出来るつもりだ。

「……………朝だけどオムライスで良いか」

卵の賞味期限が非常に迫っているので、卵を五個も使用する豪華なオムライスだ！

「よし、完成！」

なかなか完成度の高いオムライスだな。

えー、それで特星というのは地球の近くにある星で、地球よりもか

なり大きな星である。陸地と海の割合が半分ずつで、太陽の影響などは何らかの方法で地球と同じになっている。

この星は何人かによって作られたらしい。個人などで作る雑誌が同人誌だから、何人かで作られたこの星は同人星だな、ある意味。

ちなみにお金の単位はセルで、一セルの価値は一円と同じである。普通に円のままが良いと思うんだけどなあ。

で、今から話す部分はファンタジックな部分だ。だから日常ほのぼの系の話が目的の方は今すぐ地球に戻ることをお勧めする。

特星内に入れば、基本的に一人一つずつ不思議な能力が使えるようになるんだ。まあ、一人でいくつかの能力を使う奴も居るが。この能力の通称は特殊能力と呼ばれている。

その能力は大きく三つに分かれていて、質系と非質系と補助系の三つだったと思う。非質系は強いが、使える人数が少ない能力らしい。俺は魔法弾を作り出す能力で、質系だったような気がする。

あと、この星では人が基本的に怪我はしないし年を取らない。という出来ない仕組みになっている。どういう原理かはわからんが、この仕組みのおかげで特星での武器の持ち歩きや決闘などは正式に許可されている。ダメージはあるが、怪我はしないので気絶させたら勝ちというのが基本ルールである。

ちなみに俺の得意武器は銃系で、光線や炎の玉なども能力で撃つことが出来るぞ！

特星には都市などがある現代エリアと、モンスターなどがたまに居る特星エリアに分かれている。とはいっても、人口の九割以上が現

代エリアに住んでいるが。

特星エリアには人工物が少なく、人が居ることはあまり多くない。そのため特星で事件を起こそうとする凄く強い小学生などの基地とでもあるのだ。

とにかく特星はどんな人でも安心して暮らせるかもしれない星なのだ。

「ふう、ごちそうさまっつと」

ちなみに俺の通っている高校は校長がかなりの権限を握っている。数週間くらい前から校長の気まぐれで高校がずつと休みだ。校長の気まぐれで年中完全休暇ということも少なくない。

ちなみに特星内では年をとらないので、学年が上がる事がほとんどない。ただし、飛び級とかは小学生で時々あるらしい。

あと、特星内では実力があれば子供でもなれる職業がある。その職業は仕事がないのと同じようなものがほとんどだ。

例えば勇者や魔王や聖王の職業だが、これは称号みたいなものだ。この称号的職業を利用した会社とかもある。特星で有名なのは勇者社という会社で、特星中のほとんどの店が勇者社と経営関係を結んでいるらしい。難しい話は苦手なんだけどなあ。でも、この三つの職業は一人しかねないんだ。

神様の職業には何人かが転職できて、この職業になった人は何かの特殊能力を追加で覚えることが出来るらしい。

あと、高性能翻訳飴という飴を食べているので、誰と話す場合でも

自分の使い慣れた言葉に翻訳されて聞こえる。特星に入る際に食べないといけない。

だが、食べてない人とも普通に会話できるらしく、翻訳飴以外の効果で翻訳されているという噂もある。

その他にも変わった設定はあるんだが、全部説明するとキリがないんだよなあ。

「おはよう」

「あー、魅異か」

隣の部屋から部屋をすり抜けてきたのは神離^{しんり} 魅異^{みい}。俺の部屋の隣に住んでる奴で高校での席も隣だ。

一応勇者の職業をやっていて、勇者社の社長でもある。

身体能力と頭脳の両方がとてつもなく凄い。人に見えるがどうなのだろう？

「ふふふ、私は正真正銘の人間だよ」

思考を読むんじゃない。

えー、魅異の特徴は全力で本気を出さないことだな。遊び気分で別世界を作り出したりとかそういう規模の人だから。得意武器は特に決まっていなと思うが、気分的に槍という事になっているそうだな。魅異の場合は武器がない方が強いと思うけどな。

「説明文が長いと思うよ」

「お前の設定は説明だと表現しにくいからしょうがないだろ」

とりあえず、以下省略。

「で、何のようだ？」

「暇つぶしになる話を持ってきたんだけど、説明で忙しいなら今度にしようか？」

「別に忙しくはないが。というか、メタな発言をするな」

説明が長いのは魅異のせいだ。

「最近この近くの山で宝の地図が見つかって、その山に宝探しに向かう人が増えてるらしいよ。宝を持ってる人から勝負して奪うのも正式に問題ないね」

近くの山で宝探しねえ。

まあ、見つからない可能性のほうが高いだろうな。

「何処の山だ？」

「現代エリアの滑り山だね」

聞いたことない山だが、滑り台でも山についてるのか？

「行きたいなら案内しようか？」

「そうか？なら、頼む」

「雪が積もる滑りの山」

「おー、見事な雪景色だな。春なのに」

「この山は人工的に雪が作られてるから、夏以外に来たら、大抵雪が積もってるんだよ」

滑り山は家から少し遠かったが、魅異の瞬間移動的な技ですぐに付いた。

「技ではないけどね」

「で、場所は？」

「細かいことは秘密だけど、此处より高い場所にあるよ」

上に行く乗り物的なものはないし、歩いて探すしかないようだ。

「じゃ、頑張つてね」

言われなくても頑張るけどな。

「あー、道に迷ったな」

雪だらけの山だから迷いやすいのか？

「こういう時は耳を澄まして、川の方角を探るんだよな」

そして川を見つけたら、川に沿って歩けば山を出られるらしい。

「一回山を降りて、地図でも買いに行くか」

運が良ければ無料で配布している可能性がある。

というか、地図もなしに宝探しなんて無理だろ！

「あれ、お前は悟じゃないか！」

「お、その声は烈か？」

急に現れたこの男は烈^{れつ}。

最初から特星に住んでた奴で、クラスは違うが俺の同級生だ。

体力と元氣くらいしか取り柄がないので、撃ち飛ばしても問題のない人間だ。

特殊能力は水の上を歩ける能力だが、どう見ても雪の上に立っている。俺なんか、足が凍りつきそうなんだぞ！

「おい、どうして雪の上を歩けるんだ！」

「ふっふっふ、騙されたな、悟。雪の上に居るように見えるが、実は俺は岩の上に立っているんだ！」

あ、よく見たら確かに岩の上だ。

岩が雪に埋もれてたから、全然判らなかった。

「気づかなかっただろ！やーい、バーカ！」

「バカはお前だろ、バーカ！」

というか、烈の言い方が子供みたいで気持ち悪い！

「よし、こうなったら、先に宝を見つけた方がバカじゃないってことでどうだ？」

なるほど、俺がバカじゃないと証明され、更にはお宝までもが手に入れられるな。

「よし、その勝負を受けてやる！」

「お前が負けたら主人公の座をもらうからな！」

「なんでそうなる！」

あー、全然見つからないなあ。

というか、結局は山を下りれなかったし。

「あれ、悟だ」

「お、ジャルス」

えー、こいつはジャルス。

最初から特星に住んでた奴で、クラスは違うが俺の同級生の一人だ。

烈とは違い、常識的でたいした問題がない奴だ。

特殊能力は他の特殊能力をランダムに使うことが出来る能力だ。

ちなみにポケモツツコミもこいつの役割ではない。

「ジャルスもお宝目当てか!？」

「いや、僕は烈と名産品巡りに来たんだけど、烈がお宝の話を知ったら、目の色変えて勝手に何処かに行っちゃったんだよ」

まあ、烈だから仕方ない。

「さっき川の方で見かけたけど、絶対にもう居ないな」

「烈だから仕方ないけどねー。一応探してくるよ」

それにしても、この山は一般人用なのに必要以上に寒いな。

「誰かが悪戯で寒くしてるとかは考えられるな」

町とかならそういう奴は撃退されるが、山の中だと人が少ないからなあ。

「というか、宝を探しに来てる人が居ない気がする」

実際にお宝目当てなのは烈だけだったし。

「まさか、魅異に騙されたか？」

いや、魅異のことだからボスにお宝を渡してあるとかだろう。

俺の思考は常に魅異の上をいくかもしれない！

「おや、こんな寒い時に人が来るとは珍しい」

お、こんな寒いときに珍しく人が居るぞ。

女性の人で二十歳近くだと思う。

「お宝目が目的のようですね」

「そのとおり！…って、お前が持つてるのは！」

なんと、相手は宝箱を持っていた。

「これは大した物ではありません。では、失礼します」

大した物ではないと言ってるが、噂のお宝に違いない！

「ちょっと待った！それがこの山のお宝なら、勝負して奪い取ることが出来るはずだ！」

これは魅異から聞いたことだけだな。

「確かにこの宝箱はこの山で拾った物です。ただし、これは仕掛けられた宝箱ですから開けても得はありませんよ。まあ、私は中身を見てませんけどね」

「中を見てないなら、どうして仕掛けられた宝箱だと分かるんだ？」

ふっ、俺を騙して宝箱を奪えるわけがない。

「さて、私は寒いので帰りますね」

あー、確かに俺も寒くなってきたから帰ろうかな。

「って、その前に勝負だ！」

「寒いなら帰れば良いのに。まあ、相手くらいなら構いませんけどね」

おー、やっとやる気になってくれたみたいだ。

「水圧圧縮砲！」

俺は自分の能力で作った魔法弾を使用するから、実際に弾数は無限に撃てるぞ。

水圧圧縮砲は水を圧縮させて撃つ技で、岩とかを砕く威力を持つんだ。

どんどん撃っていくが、攻撃は全て避けられてしまう。

うーん、俺は射的大会とかで優勝できる腕前なんだけどなあ。

「水圧分裂砲！」

これは水圧圧縮砲の弾を小さくして、連射性を重視した技だ。引き金を引きっぱなしで自動で連射してくれる。

「って、居ないし！」

いつの間にか相手が視界内から居なくなっていた。

「後ろです」

後ろから声が聞こえたので後ろを撃つ。

だが、相手はまたも見当たらなかった。

「それ！」

あいてはしゃがみ込んでいたらしく、腹部を攻撃してくる。

あー、撃つ速さが遅いから弾が当たらないのか？

「いえ、撃つ速さと反射力は凄いです」

「…ちょっと待て」

思考を読まれたのか？

「まあ、その通りです。状況把握の速さは遅いんですね」

「うるさい。というか、思考を読まれたら弾が当たらないのは当然か」

思考読むのはルール違反でことで良いか？

「それだと私の方が不利になります」

お、喋らなくていいから楽だな。

「殴って良いでしょうか？」

頭が悪くなったらどうする！

というか、お前は何が目的なんだ！

「私は社長からの命令で来ただけです」

社長って？

「私だよ」

って、魅異のことかよ！

「あ、社長。私はもう帰りますよ？」

「自由だ」

魅異が現れたからか、魅異の部下らしき人は帰っていった。

「悟の聞いたとおり、彼女は私の秘書の篠頼 几骨だよ」

魅異の秘書ってことは大変だろうな。

「まあ、私の仕事はほとんど几骨に任せてるからね」

別に任せなくても、分身でもして自分で出来るだろ。

あー、こいつはチートだから分身や分裂をして、特星中を同時に見渡したりとかやってるぞ。そんなことしなくても、特星中の状況を全て把握できるくせに。

「それだと、私が何でも出来るから、秘書の仕事が無くなるよ」。

あと、私には思考で喋らず普通に喋ったら？」

「ああ、そうする」

魅異は能力とかは関係なしで、相手の思考とかを読めるぞ。

これからは魅異がどういう行動をとっても、全然自然な光景だと思ってくれ。

「つと、宝箱を忘れてた」

几骨さんは持つていかなかったから、俺のものってことで問題ないな。

中身のものに期待しながら、俺は宝箱をゆっくり開けていく。

だが、中には何も入っていなかった。

「はいっ!？」

いやいや、オチがないからってこれは酷くないか？

「いや、几骨さんに盗まれたに違いない!」

「まあ、実際は元々空だったんだけどね」

はっ!最初から宝はなかったってオチか!

「おっ、見事に大当たりだよ」

「くそー、騙されるとは!」

第一、宝探しに来てる人なんて居ないし!

「宝地図が示す宝は空箱で、宝を探しに来た人が増えてるというのは、烈とジャルスの事だったとすれば、私の言った事に嘘はまったくないよ」

うわっ、詐欺に近い言い訳だ！

というか、主人公として言いたくはないが死ね。

「別に復活できるけどね」

何を言ったら魅異に勝てるのかが分からない。

「あ、そうそう。お宝発見したからこれをあげるね」

魅異に渡されたのはツッコミ用と書かれたハ工叩きだった。

というか、魅異の喋り方がさっき普通っぽくなったな。

「まあ、この喋り方は遊びみたいなものだからね。じゃ、私かこの辺で帰るよ」

…俺も此処に用はないから帰るか。

「んー、よく寝た」

ハ工叩きを手に入れてから数週間が過ぎた。

見かけは普段通りの朝だが、今日はいつもと違う朝だった。

「お、手紙だ」

誰だか知らないが、携帯電話のメールで知らせて欲しいものだ。

ちなみに特星の携帯電話は地球のものとは違い、形は普通の携帯電話だが、中には機械などは入っていない。だが、何故か携帯としての機能は使えるのだ。

まあ、特星の物は勇者社製が多いので、どんな事があるうかが気になるだけ無駄である。

で、手紙の内容だが、どうやら高校が休みという名の封印を解くそうだ。

「…どうせすぐに休みになるんだろうなあ」

高校が休みでなくなる原因はいくつか考えられる。

まず、校長の気まぐれだが、可能性が一番大きいな。校長が気まぐれで休み終了とか思いつき、それを実行してしまうパターンだ。

次に行事が開かれる場合だが、今日は特になにもないはず。

次に何か問題が発生した場合だが、俺が巻き込まれる可能性があるのかで考えないでおくか。

「あとは誰かが転校や飛び級してくるとかだが、この可能性はあまりないだろう。それに校長が飛び級を許す相手が常識人である可能性はかなり低い」

可愛い常識人の女の子とかだったらいいけど、そんな可能性は極限

に近い確立でありえないだろう。更にそんな子と仲良くなれるなんて、フラグ的なものでもない限りは不可能だ。

「というわけで、何の期待も出来ないことが証明された」

恐らく校長の気まぐれだろう。

気づいたら時間が結構経っているようなので、さっさと高校に向かうでしょう。

〈暝宰通常高校〉

俺の通っている高校に着いたわけだが、残念ながら途中で転校生らしき子とは会わなかった。

「というか、今頃だけど通常高校ってなんだろう？」

普通に暝宰高校で問題ないよなあ。

「あ、悟」

「おー、ジャルスじゃないか」

ジャルスと会うのは数週間前の宝探しで会って以来だな。

というか、宝探し以降は学生の誰とも会った覚えがない。

「今日は転校生が来るらしいね」

「え、そうなのか？」

俺の予想は大きく外れてしまったようだ。

「うん。少し前の日に校長と会って、その時に今日のことも聞いたんだよ」

ということは、転校生の事は急に決まったのではなく、少し前の日から決まっていたという事か。

校長の事だから、転校が決まった次の日に転校生を呼びそうだけだな。

「ところで烈は？」

「さあ？多分、手紙には気づかずにねてるんじゃないの？じゃ、僕は先に行くから」

そういつてジャルスは先に教室に行く。

同じ寮に住んでるのなら、来るときに起こしてやれよ。

…あ、俺もか。

というか、同じ寮に住んでる学生に、数週間の間も会わなかった俺は凄くないか？

「はははははははは！」

「あ、烈」

聞き苦しい声で笑いながら、烈が凄まじい速さで教室に走っていった。

で、烈が教室に入ったとたん、烈の笑い声が聞こえなくなった。

「気になるな」

覗き魔ではないが、烈の居る教室を覗いてみる。そこで俺が見たのは静かに椅子に座っている烈と、異常者を見るような目で、烈を見る教室中の生徒全員であった。

結論、静かな烈は非常に怪しい。

ちなみに俺はクラスが違うので元のクラスに戻る。

「お、ようやく来たね」

あー、魅異は俺と同じクラスだったな。

現在のところは大した問題を起こしてないが、絶対に何かを企んでいるはずだ。

「いやいや、私は他人の問題を見る派だよ」

「数週間前に宝探しをやらされたが？」

「あれはゲームでいうイベント進行フラグの回収だよ。あのイベントのお陰で転校生が今日来るんだからね」

此処で分かりやすいように説明しておこう。

特星にはゲーム要素も含まれており、とあるイベントを進行させることで別のイベントが都合よく発生するのだ。

ただし、イベント要素は誰にでもあるわけではなく、主人公である俺を中心に発生するようだ。

「イベント要素が都合よく発生すると、誰かが仕組んでそうで面白いよね」

「この星の異常さについて、星の製作者に講義してやりたい」

「その製作者が来たみたいだよ」

お、もうこんな時間か。

「はい、ただいま到着しましたよ。遅れましたが、私に時間制限はないので問題はありませぬ」

この人は杉野 ^{すぎの} 正安 ^{まさやす} 校長。特星中のほとんどの学校の校長をしていて、さらに特星を作った人達の代表でもある。年はなんと三十歳である。

この人以外の職員はその辺から適当に選ばれているらしい。

性格は結構良い人だが、適当に物事を進める事がある。ちなみにこの人が原因で、学校のある日より休みの方が多いという状況になっている。ほとんどの生徒と友達関係を結んでいる。

特殊能力は波動を操る能力で、遠くにワープとかもできるらしい。

特星中の学校での校長をやっているのは能力のお陰だろう。

ちなみに収入は多いのにやけに貧乏で、校長室に寝泊りしている。

「今日は転校生が来るから登校するように言ったのですが、このクラスではなかったみたいなんですよ」

おや、この展開はもしかして！

「というわけで、転校生の子を見たい人以外は帰っちゃってください」

「校長、一つだけ言いたい事があるんだが」

ちゃんと手を上げて発言しておく。

ちなみに俺も校長と友好関係を結んでいるので、普段どおりの喋り方で問題はない。

「はい、なんですか悟君？」

「このクラスは俺と魅異以外に登校してないぞ」

隣の烈とジャルスのクラスは半分くらいの人に来てたのに、俺たちのクラスは俺と魅異しか来ていないのだ。

「あれ、本当ですね」

え、気づいてなかったのか！？

「そつえば、今日は新しいゲームの販売日だからね」

「ああ、そのゲームなら私も波動人間を使って買いに向かわせてますよ」

このクラスはそんなにゲーム好きが多いのか？

ちなみに俺は中学の頃にかんりのゲームをやったなあ。

あ、波動人間というのは校長が作り出した人型の波動で、戦闘やお使いなどをやるらしい。

「別に買わなくても、私の会社から取り寄せてあげるのにね」

「本当ですか！？なら、今度から無料で譲ってください！」

「いいよ」

校長は嬉しそうに飛び跳ねて教室を出ていった。

「さて、どうする？」

「来たからには転校生を見ていくべきだろ」

隣はまだ授業中のようなだ。

「授業が続いているという事は、隣のクラスに転校生が居るといことだね」

「あ、そうか！」

そういえば、隣のクラス以外からは生徒が帰っていくな。

「待てよ、烈がさっき異常だったのは転校生が来ると知ってたからか！」

「しかも、自分のクラスに来ることまで予想できてたみたいだね」

くっ、バカなくせにそこまで読んでいたとは！

「ちよつと道をあけてくれえ！」

噂をした結果なのか、烈が叫びながら誰かを引き連れて走っていた。

その後を同じ教室から出てきた生徒たちが追う。

「な、なんなんだ？」

「あ、悟や魅異も追いかけるの？」

此处でジャルスが教室から出てくる。

「何かあったの？」

「転校生の子と烈が知り合いだったみたいだよ。それでクラス中が関係を問い詰めようという結論になっちゃってね」

おー、烈が転校生と知り合いなのか。

「逃げられたみたいだね」

魅異が窓の外を指差して言う。

外を見ると、辺りを見回す生徒たちの大群が見えた。

「なんか人数が増えてるね」

「恐らく、噂が広がって参加者が増えたんだろ」

はあ、せっかく転校生を見に来たのに居ないのか。

「あ、ジャルスは転校生を見たよな？どんな感じだったんだ？」

「普通に可愛い女の子だったよ。元勇者とか言ってたから、魅異のほう詳しいんじゃないかな」

魅異の場合は関係者じゃない相手の事も詳しいけどな。

「それはウィルだね。今は体育館のステージ裏に烈と隠れてるよ」

そこに隠れるくらいなら校外に逃げればいいと思うけどな。

「私は校長にゲームを届けるから帰るね」

瞬間移動で届けれるくせに。

「僕も厄介なことは避けたいから帰るよ」

ええ、俺が一人で向かうのかよ！

「一人で来てしまった」

烈たちとは関係なく嫌な予感がする。

「あれ、悟じゃない。どうしたのー？」

「あ、隠納さん」

この人は磐捌いちはきはき 隠納いんなさん。三年生で高等槍術部という部活の部長をしている。

魅異も一応この部活に入っているが、ほとんど来ていない。

この人は大胆な性格で、いつか国を乗っ取って世界征服をすると言っている。この人なら本気でやりかねないので注意が必要だ。

得意武器は槍で、特殊能力も槍魔術を使えるという変な能力である。正直な話、俺はあまり関わりたくない。

ちなみに槍術部への入部希望者は百人を越えるが、印納さんの入部試験により今年の部員は四人しか居ないらしい。

「部長じゃなくて王よ！私は王か女王に十年以内になるのよ！」

「いや、人の説明を狂わせないでください」

喋ってるだけで非常に疲れる。

「悟も私の部活に入ってよー。そして五人で戦隊作って世界制服しよう!」

「俺は世界征服なんて無理です。あー、瞑宰京からは非常に遠いですが、帝國的な場所があるのでそこを奪うのはどうですか?」

「お、良い案ね!」

帝国なら、印納さんが支配しても問題は無いだろう。

「ところで、烈と転入生を見ませんでしたか?」

「舞台裏に居るわよー」

あれ、意外に普通に教えてもらえた。

とりあえず、舞台裏までいつてみる。

「おーい、俺だぞー」

「お、悟じゃないか!」

床の板を押し上げて、烈が床の中から出てくる。

「そんな場所に隠れてたのか?」

「ああ!中は結構広いからな!」

床の修理代とかはどうするつもりなんだ?

「あの、どうかしたんですか？」

更に床の中から転校生らしき子が出てくる。

お、可愛い！

「あー、友人が心配して来てくれたんだぜ！」

いや、心配なんか少しもしていなかった。

「紹介するぜ！こいつが俺の友人の一人である悟だ！」

「よろしくな」

「はい、よろしくお願いします！あ、私はウィル スクロールと言います」

異常なところがない普通の女の子じゃないか！

「烈、どういうことだ！？お前の知り合いにまともなやつが居るなんておかしいだろ！」

「ははは！なら、この子との出会いから話してやろう！」

くっ、この烈の自信はよっぽど凄い事なんだろう。

「朝に起きるのが遅かった俺は、学校に来る途中の道にある坂をジャンプしたんだ。そしたら、別の道から走ってきたウィルとぶつかり、ジャンプしていた俺は道路に飛ばされ、車に何回か撥ねられたんだ」

最初から最後まで運命的な展開はないじゃないか。

「で、その後にウィルが心配して俺を助けてくれて、手を差し伸べてくれたんだ！その後に俺は喜んで学校まで突っ走ったんだぜ！」

「学校で同じクラスだったのは驚きましたけどね」

うーん、微妙に感動的なのだが、明らかにジャンプした烈が悪いよなあ。

というか、これは恋愛フラグなのでは！？

…ふふふ、そんなものはぶち壊せば怖くない！

「烈、いつまでも此処に居るわけにも行かないし、戻って皆に事情を説明したらどうだ？」

まあ、説明を皆が聞くかは別として。

「だが、皆が俺の話を聞くか？」

「ああ、みんな聞いてくれるさ！主人公の俺が言っただから間違いない！」

まあ、主人公も間違いはするけどな。

「あ、それなら私が事情説明しといてあげようか？」

って、印納さん！

「え、良いのか!？」

「ふふふん、事情は盗み聞きさせてもらったわ。その程度の事情説明なら私に任せて大丈夫よ！」

いや、盗み聞きしてたんだ。

「じゃ、数分くらい待っててね！」

印納さんは元気そうに外に走っていく。

「いやあ、助かりましたね」

「まっただくだ！なあ、悟！」

「えっ、あー、そうだな」

くうー、俺的に予想外の展開過ぎる！

とりあえず、ウィルという子が転校してきたのだった。

一話 主人公には何かがある

@悟視点@

「あー、非常に退屈だ」

転入生が来た日の登校日から数ヶ月、休日がずっと続いていたので暇だ。

食事はちゃんとしているが、毎日ゲームしかやることがないという状況が続いていた。

「くつ、このままだと精神的に辛いな」

現在の季節は夏な訳だが、海に行く気力などまったくくない。

だが、家にこもっているというのもある。

「あ、やられた」

恋愛シュミレーションで主人公を殺すなよ。

「あー、このバッドエンドは既に見たな」

俺はシューティングゲームは非常に得意なのだが、恋愛シュミレーションでの成績はそこまで良くない。ハッピーエンドが二回で、バッドエンドが十数回という状況だ。

暇つぶしに普通に誰かと勝負してこようかな？

特星では怪我などは滅多にないので、戦闘は許されている。

「うーん、特星エリアのモンスター倒しは服が汚れそうだしなあ」

誰かと組んで何かをやりたいな。

「お邪魔しまーす」

「あれ、印納さん？」

チャイムも鳴らさずに何のようだろう？

「あ、悟発見！」

「何か用ですか？」

暇だから今回は話に乗ろう。

「今から帝国をぶっ潰しにいくわよー！」

「はあ！？」

く船く

何で来てしまったんだろう。

「印納さん、手漕ぎボートで別大陸に行くのは無理だと思いますよ」

「キャプテンよ！キャプテンと呼んでね！」

「はあ、キャプテン」

俺と印納さんは二人用ボートで海を横断中であつた。

魅異も誘いに行ったのだが、勇者社の面白い製品開発をするからと断っていた。

魅異が参加しないということは、魅異的に面白いことが発生するということだ。

「というか、食料は？」

「特星だから無くても大丈夫よ」

確かに特星だから死なないが、腹が減る事はあるので大丈夫ではない。

「あと、トイレは？」

「何も食べないから必要なし！」

…今すぐにでも泳いで帰りたくなってきた。

「だいじょうぶだって！特星にも海賊は居るんだから、そいつら叩き落して船を奪えば良いのよ！」

海賊から船を奪うことを前提で旅する人は初めて見た！

「でも、そう簡単に海賊が現れるとは思えませんが」

「その小船は止まりなさい！私は海賊ですよっ！」

うわぁ、出ちゃったよ。

海賊船に乗っているのは長髪の男だった。

「流石よフラグ主人公！」

あ、俺の発言が原因だったのか！

「その海賊！船を私に渡して海に飛び込みなさい！拒否した場合は痛めつけてから叩き落すわ！」

うわー、印納さんが凄く楽しそうだ。

というか、どっちにしても海賊は海に落ちるのか。

「いやいや、貴方達こそ私に船を渡さないと、私の実力で沈むことになりますよっ！」

相手は海賊なのに一人のようだ。

「とりあえず、名前だけは聞いてあげるわ」

「私の名前はベータ サイドショットですよっ！」

それを聞いて印納さんは何かを考え始める。

相手の名前に聞き覚えでもあるのか？

「ねえ、下手男べたおと雑魚米ざしべいのどっちがいいと思う？。」

急に話を振られても分かるかつ！

「えー、雑魚米の方が良いと思いますが、最後は伸ばして雑魚ベー
つてのはどうですか？」

いろいろ面倒なので、適当に答えておく。

「良い案ね！なら、覚悟しなさい雑魚ベー！」

「だっ、誰がそんな名前を認めますか！こうなったら、貴方たちを
倒すしか道はなさそうですね」

他に何か思いつかないのか？

「覚悟してください！必殺、ジャンピングキックですよっ！」

回転キックで突っ込んでくるが、勝手に外れて海に突っ込む。

「さて、船をゲットよ！」

あの海賊は船を取られるために出てきたのだろう。

とりあえず、海賊船に移る。

「よいしょつと」

印納さんは簡単に乗り込んだが、俺は海賊船に乗るのに苦勞する。

「あれ、この程度も飛び乗れないの？」

「小船から海賊船までの高さはかなりあるから無理です」

この人は普通よりは身体能力が高いからなあ。

「そうはさせませんよおっ！」

急に雑魚ベーが海から飛び出て、海賊船より高い位置までジャンプする。

「こうなったら、相殺覚悟です！必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

雑魚ベーは再び回転キックでこっちへ来るが、一步横にどいて回避する。

キックの威力は高いらしく、船には大穴が空いている。

「あー、小船に戻るわ」

「え？何で？」

印納さんが船に戻るので、俺もついていく。

「いったいどうしたんですか？つて、うおっ！」

なんと、海賊船が沈んでいる！

あー、雑魚ベーのキックで穴が空いたからか。

「しょうがないなあ、次の海賊を探すわよ」

印納さんは沈む船に巻き込まれる雑魚ベーのことは気にもせず、次の目標の海賊を探している。

「印納さんに慈悲の心は無いんですか？」

「キャプテンよ！キャプテンと呼んでね！」

「…はい」

慈悲どころか同情の心も無いのだろう。

〈夢積み帝国〉

あのは高速豪華客船を見つけた印納さんは、船長に船を賭けた勝負を挑んだ拳句、勝利して船から客を叩き落とし、帝国まで乗り込んだのだった。

船長も腕に自信はあったのだろうが、高等槍術部の部員には勝てな

かったようだ。というか、客が乗ってるのに勝負を受けるなよ。

「いやあ、トイレありの船を奪えて良かったわ」

「やっぱりトイレは必要だったんじゃないですか。というか、キャプテンは他の人を落として罪悪感はないんですか？」

「あ、船に乗ってない間は名前で呼んでね！ちなみに悪いのはあの船の船長なんだから、罪悪感どころか優越感を感じてるよ」

この人の性格はどうにかならないのだろうか？

「で、帝国を乗っ取ったら此处に住む気ですか？」

「あー、今回は様子見と力試しが目的だから、此处の国を奪った後は一度帰るの」

でも、奪ってから帰るのか。

というか、これって問題にならないよな？

うん、船の件だって正式に勝負してもらったわけだし、帝国だって問題ないよな。

「というわけで、今日から私が此处を治めるから皆によろしく言っ
といてね」

「うん！皆に伝えてくる！」

…っ！

「さっきの少女に何を言った!？」

「え、私がこの国で一番偉いつて言ったの」

なんでそれを言っちゃうんだよ!

「敵の部下に反逆罪なので連れてかれるだろ!」

「おい、貴様たちが反逆者だな。今から城まで来てもらう」

ぎゃあああっ!

展開が速すぎるだろ!

「フラグ主人公の力も凄いと思えてきたわよ!」

げっ、また俺が原因だったか!

く夢積みの城く

「あら、この二人が反逆者?」

「そつでございます!」

この城の主は女王のようだ。

印納さんは例の如く何かを考えている。

「さて、まずは貴方たちの意見を聞こうかしら？」

「夢崩し印納帝国つてのはどう？」

「は？」

印納さんは城の名前を考えていたようだ。

敵は急に名前を言ったことに非常に驚いている。

「でも、迫力不足だから、現世崩壊の印納帝国でも良いわね」

崩壊させてどうする！

「まあ、名前より実際に手に入れないとね。その女王みたいな奴、私と勝負して私が勝ったらこの城と国をもらうというのでどう？」

「急に何を言うかと思えば狂ったことを言うわね」

まあ、普通に思考は狂ってそうだけだな。

「まあ、私の強さを思い知らせるためにも、その勝負は受けてやるわ！」

受けちゃ駄目だあつ！

「ただし、条件有りよ。私と貴方が勝負して、更に私の部下と貴方

の部下で勝負する。そして、貴方たち二人が勝てた場合のみ城はあげる」

俺はべつに印納さんの部下ではないんだが。

「それでいいわ！悟ー、負けたら殺すからね」

印納さんが笑顔で、殺すとか言ってるよ！

これは負けたら殺される！

「あ、悟のお相手さんも、悟に勝ったらオーバーキルよ」

「ひiiiiiiiiっ！」

おいおい、敵にまで脅しとか酷過ぎるだろ。というか、外で俺たちを見つけたときの威勢の良さは何処へいった？

ちなみに印納さんは実際はそこまで強くはない。ただ、商品が有りの場合は能力が補正されるのだ。

とりあえず、印納さんと女王さんは勝負を始める。

「と、とりあえず、女王様の命令なので適度に覚悟してもらおうか！」

適度についてどのくらいなんだよ。

「そらあああっ！」

叫びながら体当たりで突っ込んでくる相手。

能力使うとかの選択肢はないのかなあ？

「水圧圧縮砲！」

とりあえず、水の魔法弾で攻撃しておく。

「げほう！こ、この俺がやられるとは！」

ベタな台詞を言っているが、体当たり一回で使うには勿体無い言葉
だと思う。

「女王様からもらった武器でも勝てないなんて」

「武器？」

「これだ」

相手は右のポケットからナイフ的なのを取り出す。

なるほど、こいつの敗因は大体分かった。

「お前の敗因は、主人公の俺が相手であつたこと、お前が雑魚キャラであること、そして武器の装備を忘れていたことだっ！」

「なっ！現実でそんなミスをするとは驚いた！」

本当に驚きた。現実で装備を忘れるとかありえないだろ。

「悟ー、どうだった？」

「あ、印納さん。結果は見ての通りです」

印納さんの方はボロボロのようだが、結構強かったのだろうか。

「あー、楽勝だったみたいね」

「相手が町の人以下の強さでしたから。印納さんは？」

「見ての通りボロボロなのよー。でも、槍の装備さえ忘れてなければ、きつと楽勝だったはずだよ！」

なんというか、槍がないと能力も使えないのによく勝てたなあ。

つてか、同じような人がもう一人居た気がする。

「さて、帰ろうか」

「え、女王を倒したのに帰るんですか？」

印納さんのことから、帝王になって世界征服とかすると思ったんだけどな。

「まあね。今日は様子を見に來ただけだし、国も事実上は奪えたからね。それに、今日手に入れた船を売って、手作りでお菓子の城を作るの！」

現実的な意見を言うと、蟻の大群に襲われると思う。

「というか、船を売ったとしても、そこまで高くないと思うけど」

「ふふふ、実は既にこの帝国の勇者社に販売済みよ！そして、手作りお菓子の材料費には足りるくらいの資金もある！」

おー、それはなかなか手回しが早いと思うが、大きな問題点が一つ。

「印納さん、帰りの船は？」

そう、来るときは船を奪ったのだから、その船を売っては帰れないのだ！

「ふ、私はそこまでちゃんと考えてあるの！」

おお、流石は印納さん。俺の心配の一つ先まで読みきっているな。

「こっちに帰りの船が用意してあるわ」

恐らく、豪華客船を高値で売って、高い船を激安で購入したのだろう。

く船く

「悟ー、私は疲れたから後は任せるよ」

で、印納さんが用意していた船とは、豪華客船を奪う前に乗ってい

た手漕ぎボートだった。

現在時刻は夜九時なのだが、印納さんは既に寝てしまった。

「はあ、この人は本当に子供っぽいな」

脅し方とか実力は大人以上なのに、なにかが子供っぽい感じである。

「子供みたいなのは良い事だよ」

「げ、魅異！」

居なくていい時に現れる奴だなあ。

「いや、それ以前に居て欲しい時とかないよね」

「あー、確かに」

魅異が来れば状況は混乱か悪化だからな。

というか、暇ならボートを漕ぐのを手伝え！

「あ、印納さんは家に送ったからね」

「え？」

気づけば寝ていた筈の印納さんが消えていた。

「じゃ、私も帰るから」

「つて、俺も送れよ！」

「いやいや、悟はおまけで行っただけだからね」

魅異は楽しそうに消えていった。

というか、普段から楽しそうな笑みを浮かべてるけどな。

「く、こうなったら、絶対にこの船で帰ってやる！」

そう誓ったのだったが、不運にも大嵐に遭遇してしまい、泳いで帰ることとなったのであった。

「退屈だ」

帝国から何とか帰って数ヶ月が経った。

あいかわらず、暇な毎日を送る主人公の俺だが、疲れるよりはマシなので我慢する。

「はあ、外でも出かけるか」

自然とため息が出るということは、この退屈さに精神が侵蝕されているのだろつ。

「瞑宰公園」

此処は瞑宰京にある広お〜い公園である。

特別な日でもないのに公園に学生が多いのは、絶対に校長が原因である。

「というか、皆暇なんだな」

まったく、他にやる事はないのかと言いたい。まあ、俺もその中の一人なわけだが。

「寝るか」

眠いので、ベンチで昼寝することに決定。

変な夢見て夢オチにでもなればいいさ！

「ふふふ、わが名は変態の神である悟だ」

「うおおっ！」

…ゆゆ、夢かあ。

「く、変態の神になる夢とか、夢じゃなかったら自分に失望するところだった!」

さっき俺と同じ姿の奴が、俺に変なことを囁く夢を見た。

「ってか、ここはどこだ?」

空が真っ黒だが、周りの物はハッキリ見えるので夜ではないようだ。

「公園だよなあ」

微妙に景色が違うが、ここは公園であっているようだ。

「変態の神だ」

うおおおっ! また、変な声が聞こえたあっ!

まさか、ベタに自分の心の声とかじゃないよな!? 幽霊とかそんな感じの奴の呪いか何かであってくれ!

「よし、落ち着いた」

とりあえず、手がかりを探しに行くとするか。

「よし、到着だ」

どうやら俺の住んでた場所と同じような構造らしい。ただ、人がま
ったく居ないが。

現在俺が居る場所は俺の部屋のような別の部屋だ。

「神離！神離！神離魅異！」

うわっ、また変な声が聞こえてきたよ！

ん、でも、魅異が犯人の可能性は十分にありえるな。

「確かに可能だけど、残念ながら違うんだよね」

少々予想は出来ていたが、やっぱり現れたか。

「とりあえず、この場所は何処だ？」

「此処は悟の夢の世界だね」

人の夢に勝手に現れるんじゃない。

「夢といっても、作り出された夢の世界に閉じ込められてるだけだ
よ」

「迷惑な話だな」

閉じ込めるということは、誰かの能力の仕業か？

「さあ、その答えは教えないけど、原因ならさっきから居るよ」

「なに、何処だ!？」

「あー、納得」

さつきから思考に直接喋りかけてくるこの声だな。

俺と同じ声で喋るから、自分の心の声かと思ってしまった。

「魅異ー！俺と付き合ってくれ！」

「さつきから聞こえるこれは何だ？」

「その名前は悟と同じだよ。ただし、悟との関係性についての説明は言わないけどね」

って、それだと俺と同一人物の可能性が！

「もう、同じってことで良いじゃないか」

「良いわけあるか！」

「あ、俺とは考えるだけで会話できるから、出来る限り思考で答え
てくれ」

変態の神とか言ってたのもお前だな。

「ああ。お前の心の声だと思わせようとしたんだが、失敗なんて面白くないなあ」

ふう、主人公にそんなものが聞くはずないだろうが！

「とりあえず、そいつのことはポケ役って呼んでやってね」

「なら、俺はこいつをツツコミ役と呼べばいいんだな？」

「そっだよ」

「ちょっと待て！やっぱり俺のポケ役的な部分がこいつなのか！？」

もし、それが真実だとしたら、こいつを除去してもらわなくては！

「まあ、今のところはそういうことにしておいてね」

冗談抜きで自分に自信がなくなった。

「さて、ポケ役は早く悟を夢から戻さないと除去するよ」

「いやいや、夢から戻しても除去するべきだ！」

「魅異に除去されるなら本望だけだな」

なら、さっさと消えてくれ！

「第一、ポケ役とかの存在がなくても、俺だけで問題はないだろ。って、あれ？」

いつの間にか周りの景色が元に戻っている。

「夢オチか？」

おーい、ポケ役は居るかー？

「……………」

返事はないのだが、妙に気配を感じる。

「お、魅異だ」

「え、何処だ！？」

うわ、見事に初歩的な罠に掛かった。

「なっ！騙したな！」

というか、魅異の言葉だけで騙されるお前が悪い。

「いやいや、魅異の素晴らしさは最高だ」

言い切れるポケ役が凄いと思うが、明らかに人選を間違えているだろ。

「ふん、俺以外の奴に魅異の良さは分からないさ」

お前以外全員かどうかは分かんが、少なくとも俺は分かんないな。

というか、そろそろ元の場所に帰れ。

「はいはい」

…元の場所って、以前ポケ役は何処に住んでたのだろうか？

「まあ、気にするほどの事でもないな」

って、気づかない間に夕方になってるし！

「腹も減ったし、そろそろ帰るか」

暇つぶしにもなったし、一応だけどポケ役にも感謝しておこう。

「ありがとうなー」

良い雰囲気の中の自分の姿を想像しながら、俺は家に向かうのだった。

おお、感謝の言葉を呟くように口にするだけで、現在の自分が良い奴みたいに見えるきた！

「退屈」

ポケ役の登場から数カ月が経った。

数ヶ月ごとに退屈だと言っているような気がする。

「えっと、今は冬か」

今はまだそこまで寒くないが、そのうち非常に寒くなるのだろう。

というか、季節を忘れるとはなんてことだ。

「今日は何をするかな」

ちなみに昨日は、冬なのに大型台風がこの付近に来てたので、遊び心で出歩いて帰れなくなった。

だが、今日の天気は穏やかだから、そんな危険性などないはずである。というか、昨日の台風が今日の俺に関係するなんてありえない。

「その分、楽しめる要素も少なそうだが」

まあ、安全重視が一番だろう。

「よし、まずは魅異に会いに行くか」

「お、良い選択だな！」

何かが聞こえたが、気にしないでおう。

く勇者社く

「はい」

魅異に暇だと話すと、一セルを渡された。

「そのお駄賃でお菓子でも買ってきてなよ」

「よっしゃあ、早速菓子を買いにいくぜ！…って、一セルで買えるかあっ！」

頑張ってノリツッコミを試してみた。

「いや、本当に勇者社の一階で今日だけ一セルだよ」

「え、そうなのか？なら、一セルだけで買いに行ってくる！…だから俺の用事はお菓子じゃないって！」

ノリツッコミ二回目。

「百セルで百個のお菓子が買えるけど」

「ちょっと本当に買ってくる！」

食料になりそうなお菓子で生活費を節約するか。

「売り切れだった」

「悟が来る前に売り切れたからね」

なら、たった一セルのお駄賃なんかを渡すなよ。

「その一セルを財布に入れたくせに」

俺は一セルでも大事にする男なんだ。

「お菓子程度でそんなに落ち込むとはね」

「原因のお前が言っな」

店まで叫んで走ったことは、今思い出しても恥ずかしいんだぞー！

「社長、報告があります」

おや、さっきの行動を後悔していたら、几骨さんが部屋に入ってきた。

「後悔するくらいなら、最初から走り回らないでください」

思考を読まれました。

「報告つてのは羽双が来たんだね」

「はい。私はこの後に他の会社への用事があるので、部屋へ招くのも撃墜するのも社長にお任せしますね」

それだけ言っと、几骨さんは部屋を出て行った。

さて、客が来るみたいだから俺も帰るか。

「あ、悟も羽双に会っていった方がいいよ。これからは会う機会とかも結構あるだろうからね。」

「そうなのか？ところで、その羽双って人はどんな人だ？」

「おー、やっぱり覚えてないね。羽双は私の一番弟子で、地球にある神離道場に通ってた内の一人だよ。」

ここで神離道場について説明しておこう。神離道場とは、地球にある子供専用の遊び場みたいな所である。世間では道場として扱われてたが、模擬銃とかでの射撃練習とかを俺はしていた。

ちなみに魅異の弟子は地球に何万も居るのだが、道場に入れてた人は百人にも満たなかったと思う。

「道場かどうかは微妙だがな」

「まあね。」

まあ、俺はゲスト参加みたいなものだったのかな？

「で、現在の羽双ってどんな人なんだ？」

「和服を着た男子高校生なんだけど、その辺の人よりは少し強いかな。」

へー、結構お洒落な趣味があるんだな。

「あ、ついでに私達と同年だよ」

「まあ、道場に来てた人の中の一人なら、大学生以下ではあるだろうなあ」

保育園児や赤ちゃんも居たからなあ。

「会うなら早く行ったほうが良いんじゃないか？」

「あー、大丈夫。もう来たからね」

「え？」

魅異が言い終わると同時に、入り口の前に和服の男が現れる。

その男の身長は俺より少し高いくらいなのだが、雰囲気は大人びている感じで大学生に見えた。

「おっと、すみません。魅異さん一人かと思っただんですが、先客の方が居たようですね」

「あ、どうも」

丁寧な言葉遣いなので丁寧に返すが、いつの間に現れたんだ？

「その人がさっき話してた羽双だよ」

「ああ、僕の話をしてたんですか。なら、名前は知ってるでしょうが、僕は神離^{しんり}羽双^{はそう}。それでも魅異さんの弟子ですが、よろしくお願いします」

「俺は雷之 悟だ。魅異の幼馴染だけどよろしくな」

いやー、同い年とは思えない丁寧さだな。

「ちなみに僕の特殊能力は時間を操る能力です。悟さんは？」

「時間！？…俺の特殊能力は魔法弾を作れることだ」

なるほど、急に現れたのは能力のおかげか。

「それで何か用？」

「いえ、今日は暇つぶしです。どうせ暇だったんでしょ？」

「忙しくはないね」

俺は主人公だから忙しいけどな。

「そつだ、二人とも勝負でもしていったら？」

「勝負ですか？」

んー、特星だから怪我はしないだろうが、実力はその辺の一般人よりちょっと強い程度らしいし、数分くらいで倒せそうだな。

「まあ、羽双が良いなら俺はいいぞ」

「僕も暇ですので構いませんよ」

「決定だね」

時間を操るということは普通よりも速く、攻撃が当たにくいということ。魔法弾を避けさせた直後に攻めるのが有効的だ！

「それっ」

「バキッ」

「へ？」

背後から適当な掛け声と痛そうな効果音が！

「あいたたた、腰が痛い！主人公なのに凄く腰が痛いって！」

「碎いてはいないので安心してください。特星ですし、数分で治ると思いますよ」

いや、それよりも何で特星内で骨が折れる！？隕石の直撃でもこんなことはないはずなのに！

「お、治った」

「では、僕は昼食を食べに行きますので」

それだけ言つと羽双は消えていった。恐らく時間を止めて移動したのだろう。

「魅異ー、アイツは何者なんだ？お前以外であんな攻撃力の奴は初めてだぞ」

「特星の不老不死効果にも限度があるからね。想定以上のダメージが起これば、普通に相手に怪我をさせられるんだよ」

想定以上のダメージとの区分はどのくらいなんだか。

「それは言えないけど、羽双は星を割るならできるよ」

「強っ！星を割るって、危険人物決定じゃないか！」

「いや、羽双は人間だからね。そんな酸欠になる自殺行為はしないよ」

あー、確かに酸素は大事だよな。

「まあ、息を止めてられる時間は一般人よりは少し長いけどね」

「お前の少しは参考にならん。そういえば、羽双は一般人より少し強い程度って言ってたのに、明らかに反則的な強さだったな」

しかも、かなり手加減してたように思えたが。

「ところで昼食の時間なのに帰らないの？」

「あー、そろそろ帰るか。今日は疲れたから外食でもするかなあ」

しかし、昨日の台風の影響でほとんどの店が閉まっていたので、結局は自分で作って食事をすることにした。く、本当になんで冬に台風なんか起こったんだ！？

二話 よい変態と変わった神

@ 悟視点 @

「あー、今回も外れたか」

俺が現在見ているのは新聞のある部分。そこにはある名前が書かれていた。

「く、恐らく今年も魅異が勇者か」

そう、俺が見ているのは勇者合格発表。この星では年に一回だけこれが行なわれ、合格した者が勇者となれるのだ。その決定方法は簡単で、特星本部で勇者の職業を希望して、能力測定を受けるだけである。その中で勇者に適正な能力な人が選ばれるのである。

ちなみに魔王や聖王や神様も同じ方法で決定されるぞ。

「そついえば、隣のクラスのウィルも勇者になったことがあるんだっけ」

本当なら勇者姿のウィルも少し見てみたいなあ。

「…身体検査」

いや、別に何となく言ってみただけだぞ？何も考えずに無心で言ったんだ！

「主人公が怪しい考えなどするはずがないだろー。特にこの俺に限

ってそれはない」

さて、暇だからゲームでもするか。

「今日はストーリーを読みつつ、選択肢を選ぶゲームだ」

俺はよくゲームをするんだが、こういうゲームでバッドエンドにいかなかったことはほとんどないんだよねあ。

「よし、クリアするぞ！」

「こんにちはさまー、悟は居る？」

おや、こんなときに印納さんが来たみたいだ。

「居ますけど、こんにちはさま？」

「新挨拶よ。夜以外なら使えるわ」

変な宗教でも作るつもりだろうか？

「というか、どうして印納さんはここに？お菓子の城で花見でもしてると思っただんですが」

「お菓子の城は戦争で崩壊したわ」

「戦争！？」

この人は既に特星侵略を開始しているのか！…お菓子の城で。

「あ、相手は？」

「アリ共よ」

「え、アリ？」

予想外の相手だったが、何があつたのかは大体予想できた。

「あー、アリにお菓子の城を襲われたんですね」

「そうなのよ。しかも、屋根のアイスが崩れたせいで溺れたわ。肌がツルツルになったし、ベタベタ感も悪くはなかったけどね」

おお、今度アイス風呂でも作ってみようかな？

「で、その後は火山に行つたわ」

「何で？」

マグマ水泳は一般人には中止されてるが、印納さんならやりそうだな。

「探偵と専門家に城跡を調べさせたら、火山のマグマ近くに生息するアリが私の城を襲ったことと、そのアリの住居がその火山だと分かったからよ」

なるほど、仕返しに行ったのか。

「で、どうやって火山のアリを駆除したんですか？」

「シンプルに火山を崩したわ」

まあ、本気の印納さんならやりそうなことだ。普段はそんなに強くないけど。

「話を戻しますけど、何で此处に来たんですか？」

「ちょっとした依頼があつてねえ、十万払うから受けてくれない？」

別に依頼とか受け付けてないんだが、十万セルもくれるなら受けるべきか？

「内容によりますけど」

「秘宝といわれる、朝日の宝石が欲しいの」

秘宝集めを十万セルで頼むか普通？

「何で秘宝なんかを？」

「さっき言った火山で夕日の宝石っていう秘宝を見つけたんだけど、朝日の宝石とペアだと凄い値段で売れるのよ！」

ああ、ペアじゃないと価値のないものってあるよなあ。

「でも、秘宝なんてそんなに見つかるとは思いませんけど」

「特星には秘宝なんてよくあるものだし、主人公補正で何とかなるわよ」

まあ、主人公の俺なら何とかなるかな。

「じゃ、私はゲームして待ってるから」

「データは上書きしないでくださいよ」

「私は人のデータに上書きするほど酷くはないわよ」

…恐らく無事ではすまないだろうなあ。

〈瞑宰公園〉

「さーて、休もう！」

その辺を歩いて探したが、どこにも落ちてなかった。もちろん、宝箱なんてのは一切なかった。

「おや、貴方は例の人じゃありませんか！名前は悟さんですねえ」

「ん？お前は雑魚ベーじゃないか」

これから休もうと思ったら、雑魚ベーが急に現れた。海賊が陸に居ていいのか？

「まだそう呼びますか。まあ、それもいいでしょう」

「ってか、何で俺の名前を知ってるんだ？お前との戦闘中は俺の名前は出てないはずだぞ」

「ふふふふ、私が本気を出せばそんなものは簡単に分かりますよ
おっ！まあ、簡単に分かるのは少女のみですがねえ」

とりあえず、こいつの関係者だと思われたくないし、さっさとこの場を離れるか。

「おおっと、逃がしませんよおっ！この前の決着が全然ついてませんからねえ。もし、この勝負で貴方が勝てたなら、貴方を私のライバルに任命してあげましょう！」

しかし、逃げられなかったのパターンか！

「ここなら水に落ちることはありません！必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

「またそれが！」

回転しながらのつま先キックを回避する。

「ドボン！」

「水に落ちたか」

雑魚ベーはそのまま噴水に突っ込んでいった。水に落ちないとか言うから落ちるんだぞー！

「ふっふっふ、二度も私を同じ策で倒そうなど不可能ですよっ！」

水浸しになりながら雑魚ベーが噴水から出てくる。

「さっきの仕返しですよっ！そりゃっ！」

「おあっ！水を飛ばすな！」

雑魚ベーは予想外にも噴水の水を飛ばしてきた！おかげで俺の服も少し濡れてしまった。

好きの多い技だろうと思ってたから避けなかった。

「ふはははは！私と同じ目にあわせてやりましたよおっ！」

「く、水をかけてくるとは！って、どこいく!？」

雑魚ベーは俺がよそ見をしているうちに噴水の裏へ逃げていった。この噴水は大きいため、裏に行かれたら相手に技を当てるのは難しい。しかも、相手の位置がまったく分からない。

近づいたら奇襲を掛けられるだろうから、雑魚ベーが戻ってくるのを待つか。

「おい、無駄な抵抗はやめて俺にやられろ」

返事がない。公園の別の出入り口から外に出て、俺の後ろの出入り口から入って奇襲もありえるし、背後にも注意をするか。

…後ろにも居なさそうだが、噴水の裏から来る気配もないな。

「俺が行かないと話が進まないのか」

仕方がない、素早く突撃して即座に攻撃するか。

「よし、空気圧圧縮砲！…あれ？」

一気に噴水の裏まで走りぬけ、魔法弾を撃とうとするが誰も居ない。

「あー、公園の外から回り込んで、奇襲する作戦の方だったか？」

「ここですよおっ！」

「うわっ！」

「ドッボン！」

急に噴水から出てきた雑魚ベーに、噴水の中に引きずりこまれる。

「ふふふん、これで濡れ具合は同じですねえ！」

く、わざわざ噴水の中で待ち伏せとは！

「でも、これでやっと魔法弾が当てれる！」

「させません！必殺、ジャンピングウェーブ！」

「うわ、水が飛ぶ！」

雑魚ベーがその場で飛び始めたせいで、水が飛び散り、水面が揺れ

て立ちにくくなる！

「つてか、水位が腰の少し下くらいまであるのに、なんで水面より上まで飛べるんだ！？」

「見ましたか！これこそが相手と自分に位置が近く、両方が水の中に居る時に使える必殺技ですよぉ！」

「いや、水で見えないし！」

しかも、波で少し押されるから狙いにくい！

「つてか、いい加減にしろ！」

「ひえっ！」

雑魚ベーが着地した時に足を引っ掛ける。飛び跳ねてた時に起こった波で、そのまま倒れた雑魚ベーは流されていく。

左に流れたつてことは一周して右から来るだろ。

「止まりませーん！」

やはり右から来た！ここで狙いを定める！

「つて、少し速すぎ！ぐあっ！」

狙いを定めていたら、流れてきた雑魚ベーがそのまま俺に直撃した！

「うわ！流されるー！」

どういうわけか、水の流れがどんどん速くなっていく。

「どうなってるんだ！水の流れが速くなってるぞ！」

「ああー、流れるプールを参考にした流れる噴水ですねえ。今は調整の為に作動させてるんでしょうねえ」

流れる噴水って、泳ぐ施設でもないのに水が流れる意味はあるのか？

「い、いつまで続くか分かるか？」

「そうですねえ。お昼から二時間作動で、さっき作動したばかりなので残り二時間ですね」

「そんなに待てるか！」

水位が膝近くまであるのに加え、上手く水にのってるので足が底につかない！

「はあ、… 凄く疲れた」

「うう、噴水に住む巨大な魚に頭の方から噛まれましたよう！あれは確実に私を食べる気でしたねえ！」

「巨大な魚ー？そんなのが流れる噴水に居るわけないだろ」

そういつて噴水の方を見ると、巨大な魚が泳いでいた。

「…魚型のボート？」

「あ！あの魚に噛まれたんですよっ！」

鰻のようなうねうねした体の魚で、噴水の流れる水の部分のほぼ全域に達する大きさである。噴水を一周して、自分の尻尾を噛めそうなくらいの大きさである。

「ってか、水に入る前に気づけよ」

「下見て歩いたら、前の壁にぶつかるでしょうが！」

そんなことより、あの魚を捕獲すれば、今月の食費が無しで済むんじゃないか！？

「あの魚め、私が食べてやりますよおっ！」

「なっ！それは駄目だ！」

「へ、どうしてですか？」

俺が食べるんだから、雑魚ベーの分はない。

だが、雑魚ベーが納得できる理由で誤魔化さなければ！

「食物連鎖表では、雑魚ベーよりあの魚の方が上だ！むやみに勝負を挑めば食われるぞ！」

「な、なるほど！そっぴえばそっぴでしたねえ！」

知ったようなことを言っぴ、自分が嫌にならないか？

「相手を騙すようなお前こそどっかと思っぴけどなあ」

いやいや、人は間違ひを経験して成長するんだぞ。

「そっぴいう言葉を悪用するとはねえ。俺の中で、ツツコミ役への好感度が下がったぞー」

お前になら嫌われてもいいけど。

「酷いな。本当にそれで主人公か？」

…頼むから俺を悪人みたいに言っぴのはやめてくれ。

「俺の趣味に文句を言っぴ権利は、ツツコミ役にはないっ！」

うっ、ボケ役が言葉で俺を攻撃するー！

「うーん、確かに一度食べられましたし、その魚への復讐は諦めましょっか」

「それがいい」

後は雑魚べーが居なくなっぴた後、あの魚を捕獲すればよし！

「でも、朝日の宝石はどうするかな」

あおの巨大魚がその宝石を飲み込んでいて、料理の時に気づくという展開だと楽なんだけどなあ。

「ん、朝日の宝石を捜してるんですか？」

「持ってるのか？」

こういうことを言うやつは、宝石のある洞窟かなんかを知ってる可能性がある！

「私は持ってないんですが、持ってる人なら知ってますよおっ！」

「それは誰だ！」

「特星で神様の職業をやっている女の子が居るんですが、その子の家の机の引き出しにあるはずです」

何でそこまで具体的なかは知らないが、そこまで分かるなら家の場所も分かるんじゃないか？

「悪いが、その女の子に会わせてくれ！」

「ええ！私も一度は会いたいと思ってたところなんですよおっ！」

あー、知り合いじゃないのか。

「非常に可愛い子なので、仲良くなりたいですねえ。でも、行き方がわかりません」

「…場所を教えてください。わかる場所まで俺が案内するから」

「うーん、それが異空間なんですよねえ」

あー、いきなりだが道がわからなくなった。

「異空間ってどこさ？」

「場所は勇者社の近くの別空間です」

「…頭が痛くなってきた」

一応、勇者社の近くまで来た。

「この辺りですねえ」

「道だな」

雑魚ベーが言うには、道路の位置の別次元に家があるらしい。異世界と異次元ってどう違うのかな？

「ですが、別次元に向かう方法がないのですよぉー」

「うむう、そういう話に詳しいやつを一応知ってるんだけどなあ」

「そうなんですか！なら、その人の本拠地を教えてくださいよぉっ

「！」

場所はすぐ近くの建物の社長室だが、関わらないほうが身のためだ。

「なあ」

ん、どうしたボケ役？

「俺の居る場所も異次元なんだけど」

そうだったのか？

「ああ。そっちで勇者社が建ってる場所の近くの道路だが、こっちは家が建ってるみたいだぞ」

そうか、よくやった！今すぐその家に突入して、朝日の宝石をとってきてくれ！

「断る」

え、何でだ？

「今日は出かける予定じゃないからだ。場所を特別に地図で調べたんだから、俺に感謝して自分で向かえ」

方法は？

「そっちの勇者社から、こっちの勇者社へ来れるかもしれない。まあ、魅異に尋ねてみることだな」

そうか、ありがとう！

「ふふん、感謝が足りないなあ」

… やっぱり破滅しろ。

「よし、案内する」

「では、お願いします。それにしても、何で異次元に詳しい人と知り合いなんですか？」

「俺が主人公だからだ」

「おお！主人公って凄いですねえ！」

ふふん、尊敬が足りないなあ。

「破滅しろ」

え、何で！？

く 勇者社 く

俺達は魅異に事情を話し、異次元への行きかたを尋ねた。

「普通は誰かに送ってもらわないと難しいから、今回は私が送って

あげるよ」

おお、簡単に解決した！

「異次元の場所にある勇者社でいいね？」

「ああ」

「はい、到着」

移動したかわからないくらい早いし！

「早いですねえ。とにかく向かいましょう！」

「ああ」

俺達は勇者社を出て、すぐ近くの家の前まで来た。

「うわー、本当に勇者社のお隣さんじゃないか」

「元の瞑宰京とは町の構造が違いますねえ」

確かに様々な家や道が全然違う場所にあるが、勇者社は元の場所と変わらない位置にあるようだ。

「ところでこの家に住んでるって少女は誰なんだ？」

俺の好みだったらたまに遊びに来よう。

「アミユリー レイカレーンさんという人で、磁力を操る能力の他に、複数の能力が使える凄い女子小学生なんですよおっ！」

「え、女子小学生なのか？」

残念ながら恋愛対象外だ。

「期待して損した」

「いえいえ、そんなことはありませんよおっ！明るい性格に何事も前向きな心、そしてちよつとした知識の貧しさは、普通の女子小学生以上に放っておけない魅力があります！まさに私と共に過ごす小学生に相応しいですねえ！」

こ、こいつを連れていって大丈夫か？

「変な展開になりかけたら、魅異がなんとかしてくれるだろ」

あー、確かに。

「さて、それじゃあ忍び込むか！」

「え、どうしてですか？普通に玄関から入ればいいと思いますけどねえ」

ふふふん、雑魚ベーは深読みということを知らないな！

「アミユリーは一人でここに住んでるんだろ？」

「ええ。この別次元自体が特別な状態でないと来れませんし、基本的には帰る手段が無いに等しいですから」

「お、何故だか詳しいな！」

まあ、この次元に来る為にいろいろ調べたからだろう。結果的に方法は知れなかったようだが。

「で、相手が小学生でも、女子の家に男二人が急に訪ねてきたら怪しむだろ！下手したら話すら聞いてもらえないかもしれない！だが、忍び込んでから話を聞くのであれば、相手が納得するまでドアを掴んで家を出ないという荒技が出来る！」

「おお！実に怪しまれそうな技ですねえ！」

「そう褒めるな。普通の主人公ならこのくらいの発想は序の口だろうからな」

しかし、この作戦にはちょっとした問題がある。

「何処から進入するかが一番の問題なんだよなあ」

「もっと根本的な問題がありますよおっ！」

根本的な問題って所持金とか？

「あー、十セルしかない」

「いや、お金じゃなくて服装ですよっ！もうすぐ春なのにコートなんか着てたら怪しいでしょうが！」

あー、服装か。作戦への不満じゃなくてよかった。

「半袖のコートも持ってるから、こっちの方がいいか？」

「おお、いいセンスじゃありませんか。今度、私の分も買つといてくれませんかねえ？」

「家に何着か新品があるから、帰ったら安値で売ってやるよ」

冬の間は安かったから、それを狙って大量購入したんだ。

「進入経路は窓だ。窓なら見つかったても覗きとしてなら誤魔化せる」

「はあ、別に私は構いませんがねえ」

早速雑魚ベーに中を覗かせる。

「こちらは悟。どうだ、ターゲットはいたか？」

「こちらは雑魚ベーですが、ターゲットは他の部屋にいるようです！」

おお！通信ごっこ風に会話してみたが、意外にも楽しいものだ。進入とかの時ってこういう話し方をしたくないか？

「鍵の解除は出来そうか？」

「鍵は既に解除された形跡があります！こちらはいつでも進入が可能な状態ですよっ！」

窓の鍵が開いていたようだ。

「なら、先に侵入作戦を実行しろ。後からこちらも進入する」

「了解しましたよっ！」

雑魚ベーが窓から入り、その後に俺達も後に続く。

「二人とも入れますかねえ？」

「よいしょっと、入れたぞ」

「私も進入完了だってば」

うん、俺達以外に誰にも見つかった様子はないな。

「さて、朝日の宝石の確認だけするか」

持ってたたら泥棒になるから、机にあるかの確認だけしよう。別に泥棒も特星では問題にはならないが、神の権力で嫌がらせを受けるかもしれない。

「…あれ？」

引き出しを開けて中を探すが、それらしきものは見当たらない。

「おお、知らないふりをして盗む作戦ですか？」

「いや、本当に無いんだ！まさか他の人に譲った後か！？」

「もしかして、このことだっけ？」

そういつて隊員二号が取り出したのは宝石だった。

「って、勝手に持ち出したら駄目だろ隊員二号！俺達は盗みに来たんじゃないんだから！」

「まあまあ、アミューリーさんだって盗むつもりはなかったんですから」

まあ、仕方がないから許してやるか。

「って、何でアミューリーがいるんだ！？」

「あ、今更気づいたみたいだっけば」

「本当に今更ですねえ」

いつの間に現れてたんだ！？

そしてこの変わった口調は俺を混乱させるための罠？どうやら語尾に『だってば』と『だっけ？』が付くようだが。

「探してるのはこれだっけ？」

アミューリーが取り出したのは綺麗な宝石。うん、あれで合ってるはずだ。

「頼む、それを譲ってくれ！当然ながらタダとは言わない。雑魚ベ
ーを人材として譲るという条件でどうだ？今なら半袖コートもオマ
ケでプレゼント！」

「え！勝手に私を人に譲らないでくださいよおっ！」

「アミユリーと暮らすチャンスだぞ」

「是非私を雇ってくださいーい！」

俺も雑魚ベーも得する方法はこれ以外にないんじゃないか？

「この宝石が欲しいのなら住居を探して欲しいんだってば」

「住居？この家があるじゃないか」

「そうじゃなくて、普通の場所にある住居だってば」

ああ、元の次元の住居のことか。

「う、元の次元の家ですか」

「どうした雑魚ベー？」

雑魚ベーが困ったような顔をしている。

「私は今のところは特星に家がないんですよえ」

なるほど、アミユリーを預かれないな。

「変わった場所に家を建てようとは思ってるんですが、場所と家の形式が決まってるじゃないですよ」

「待てよ！アミユリーは神様の職業だし、結構お金持ちなんじゃないか？なら、食事代はいらなにのに加えて、家賃的な意味で俺にお小遣いをくれるかもしれない！」

「よし！それなら俺の部屋に来るといい！」

「ええ！」

雑魚ベーが少しショックを受けたようだ。

「本当にいいのだっけ？」

「ああ。でも、寮だけでもいいか？」

「大丈夫だつてばー！」

よし、交渉成立。

「ちょ、ちよつと待ってください！男性の部屋に少女が住むなんて反対ですよっ！」

「ほおー、人材としてアミユリーの家に行こうとしたのは誰だったかな？」

「うぐうつ！そ、それはですねえ」

雑魚ベーは必死に言葉を考えているようだが、反撃の言葉が出ないようだ。

「今から寮に戻るけど、引越しの準備があるなら手伝おうか？まあ、俺の部屋はそんなに広くないが」

「この家は別荘として放っておくから大丈夫だってば」

「あ、それなら食料は持って帰ろう！特星だから腐らないだろうが、俺の家の食料は一人分しかないからな！」

「わかったんだってば」

よし、これで我が家の食料が少し増えるぞ！

「到着！」

「おー、一人用の部屋にしては広いんだってば」

確かに風呂場などを含めて五部屋くらいはあるからな。

「予想以上に綺麗な部屋ですねえ。ゲームがついた状態で放置してありますよおっ！」

あ、そういえば印納さんが居ないじゃないか！

「って、あぁっ！ゲームがフリーズしてるし！」

セーブ中の画面でフリーズしてるってことは、セーブデータが消える可能性が！

「ねえねえ、領収書があつたんだってば」

「領収書ですか？私にも見せてくださいよぉっ！」

領収書よりも印納さんがいないことのほうが大変なんだが。

「く、せつかくの臨時収入かと思ったのに」

「へえ、悟さんって宝石とか買ってるんですねえ」

「…宝石？」

「ほら、この領収書を見てくださいよぉっ！」

いや、なんとなくオチが分かったからあまり見たくないんだが、見ないことにはオチにならないので一応見ておく。

そこには朝日の宝石の購入金額が記されていた。やっぱり俺の名前で購入されてるし！

「しかも二十万セルとか！俺に頼んだ金額の二倍じゃないか！」

いや、領収書に俺の名があるってことは、印納さんは実質タダで秘宝を入手してるってことか。

「…こうなったら印納さんに奢らせるしかない！」

「おお、今日はご馳走ですねえ！」

「いっぱい食べるんだってば！」

意外にも印納さんは普通に奢ってくれた。どうやら宝石が市場価格の数倍の値段で売れたらしい。そして領収書の二十万セルのお金も倍にして返してくれたのだった。

三話 氷使いの少女

@ 悟視点 @

アミユリーが家に住んでから数カ月が経ったある日のこと。

「怪しいと思いませんかねえ？」

朝食の最中に雑魚ベーがいきなり変なことを言いだす。

どうして雑魚ベーがいるかというと、アミユリーと俺だけで住ますわけにはいかないとかいう理由で雑魚ベーも一緒に暮らすことになったしまったのだ。

高校の寮なのによいのか？…それをいうとアミユリーも駄目になってしまふな。

ちなみに食事係とか作ろうと思ったんだが、貴族や神様に出来ると思えないので俺が食事を毎日作ることになったのだ。

「思わないな」

「答える前に何が怪しいかを聞くべきだつてば」

アミユリーが正論を言っているが、雑魚ベーの言うことは大体正しくない気がする。

どうでもいいことだが、アミユリーは神様なのに非常に筆記が苦手なようだ。読むのは漢字でも大丈夫なのに、書くのは平仮名すら駄目なのだ。

ちなみに小学五年生らしい。雑魚ベー曰く、今の時代では珍しい純粹な小学五年生とのこと。

…語尾とかにつっこんだら駄目なんだろうなあ。

「主人公が私でないことがですよっ！私には十分に主人公の要素はあるはずです！」

確かに貴族らしいし、女子との恋愛もありそうだが甘いな。

「俺の予想では年齢が問題だと思うなあ。この話では学園生活が主人公の基本だろ？その中でも恋愛話の作りやすいのは高校生か中学生！この理論によって雑魚ベーは主人公になれてないんだ！」

雑魚ベーはこれでも二十歳らしい。大学生ではないらしいのだが、小学生好きじゃなければ主人公になれる可能性はあると思うぞ。

「私はどうだっけ？」

「アホな女の子の心情って判りにくいんだぞー」

あ、このアホは悪口で言ってるんじゃないぞ。特徴を褒める言葉として言ってるつもりだ。

だがアミューリーの勉強能力は本当に酷い。普段はそれほどでもないのだが、筆記能力が小学生とはとても思えないくらい酷いのだ。

「悟にアホって言われたんだってばー」

「悟さんは駄目ですねえ。女子小学生の心はデリケートなんですよ

おっ！」

そういう雑魚ベアの心は物凄くシンプルなんだろうな。文句を言うアミユリーを見て満面の笑みを浮かべてるぞ。

「悪かったつて。それよりコートの注文に行くから留守を頼んでも良いか？」

「あ、買い物だっけ？私も行きたいんだつてば！」

「アミユリーさんが行くななら私も行きたいですよおっ！」

別に良いけど店で暴れないか心配だな……。暴れたところで問題ないから良いか。

「そついえば二人は着替えとかは持ってきてたっけ？」

「あまりないですよねえ。女子小学生用の服は大量にあったんですが、船と共に水の底に沈みましたし」

あー、その悲しみはわかるなあ。俺も大量のコートを注文したんだが、そのコートに乗せたヘリが墜落して全部パーになったことがあるなあ。

ちなみに俺は無地のコートが大好きだ！特に愛用してるのが濃い緑色のコートで、夏は半袖コートとかをオーダー注文してるぞ！

「ふんっ、私の少女用の服は二万着以上ですよおっ！スカートやズボンを合わせると計十万着くらいのそ損失ですよおっ！」

「俺のコートだって通常のと半袖を合わせたらそのくらいは失ったぞ！」

…まあ、遠い場所にある勇者社の売れ残りを無料で貰う予定だったんだけどな。

「ご馳走様だつてば」

っと、喋ってる間にアミューリーが食べ終わったようだ。俺達も急いで食べるか。

ということとで服屋に到着。勇者社内の服屋なので変な服から伝説級のものまで多くある。

「わー、凄い品揃えだつてば」

「和服とかって買う人いるんですかねえ？」

和服は結構高めだから飾るだけって人なら買うんじゃないか？

「売られているのは買う人がいるからですよ。…勇者社の場合は買う人がいなくても売るでしょうが」

「あ、羽双！」

いつの間にか居たのは和風マニアこと羽双だった。ちなみに雑魚ベ

ーとアミューリーも住み込みしてるうちに羽双と知り合いになったらしい。

このように特星ではほんの数ヶ月経つだけで、様々な人たちがいつの間にか知り合いになったりするのだ。変わった者同士だからだろうけど。

「大勢で買い物ですか？」

「そうなんですよおっ！悟さんの家には服があまりありませんからねえ」

おい、元は一人暮らしなんだから仕方ないだろ。

「そうですか。…ところでこの辺で子供を見かけませんでしたか？」

「子供？特に見てないが、待ち合わせでもしてるのか？」

羽双の性格からして、誰かを待ったりはしなさそうなんだが。

「雨双さんという方で僕の妹です」

「妹なんているんだっけ？」

「ええ。女子小学生なんです」

「おお！では私が羽双さんのために連れてきてあげますよおっ！」

女子小学生と聞いた途端に張り切って雨双を探し始める雑魚べー。片っ端から子供に名前を聞く様子は不審者そのものだな。

「僕はそろそろ帰りますので、見つかったら奢った和菓子返すように言っておいてください」

「え、ちょっと待て！」

静止の言葉を聞かずに居なくなる羽双。和菓子返させるためだけに妹を探してるのか？

「奥義、アイススイート！」

「ぎゃふ！」

そのとき急に凍った雑魚ベーが俺の近くに飛んできた。一体なんだ！？

雑魚ベーが飛んできたほうを見ると、一人の小学生位の女の子が立っていた。状況的にあの子が雨双だな！

「まったく、最近の誘拐犯は堂々としているな」

喋り方は全然違うが確かに羽双の妹だ！なんか冷静な雰囲気がつぽいし！

「ん？その男も誘拐犯か？」

はっ！アミユリーを連れてるから雑魚ベーの仲間だと思われる！此処は何とかして誤解を解かないと雑魚ベーみたいになる！

「俺は雷之 悟！その倒れてる雑魚ベーとは単なる知り合いなん

だ！」

「私はアミューリー レイカレンだってば。雑魚ベーと一緒に悟の家に住んでるんだってば」

でた！ごく自然に話をややこしくするこの展開！

「そして私が本名を忘れましたが雑魚ベーです！全世界の純粋な女子小学生の味方ですよっ！」

あ、凍ってた雑魚ベーが復活してる。

「なるほど。とりあえずアミューリーはその男達から離れたほうが良いぞ。物凄く怪しいから」

俺は主人公だから怪しくない！怪しいのは雑魚ベーだけだ！

「仮装、一つ言っておく！」

「仮装じゃない！私は神離しんり 雨双うそうだ！」

あれ、雨双ってあんまり冷静じゃないかもしれない。

というか一字字違うだけじゃないか。雑魚ベーなんか本名があるのかどうかも判らないくらい、名前を間違えられてるんだぞ。

「じゃあ雨双、俺は主人公だ！凄いでー」

「…とりあえず私を誘拐しようとしたことを悔やむんだな！アイスソード！」

氷の剣を飛ばしてくる雨双。氷を操る能力のようだ。

「うお、危ないな」

いつだったかに手に入れた八工叩きで氷の剣を叩き落としていく。
雑魚ベーは避けれずに攻撃を受けてるが。

「八工叩き？私をバカにしているのか？」

「八工叩きにすら勝てない氷のくせに何を言う！」

まあ、氷が弱いわけじゃなく八工叩きが強いんだろうが。

「勘違いかなんかで大変なことになってるんだってばー」

ベンチに座りながら戦いを見ているアミューリー。そもそもの原因が
一番安全とは。

「なら叩き落とせない技で決めるまで」

「はい、そこまで」

攻撃しようとした雨双の額を、急に現れた魅異が竹槍の尖ってない
ほうで軽く突く。

「いたっ！」

不意のことに雨双はそのまま尻餅をつく。

「おや、魅異さんじゃないですか」

「いたた…。え、魅異さん？」

雑魚ベーの言葉に反応して雨双が魅異を見上げる。

「どうして魅異がここにいるんだっけ？」

ベンチで休んでいたアミユリーもやってくる。手にはまだ開けていないジュースが握られている。

「休んでたんだから俺にくれ！」

そういつてアミユリーのジュースを取り上げる。

「あー！返せだってば！私のだってば！」

「服を買ってやるんだからジュースくらい良いだろうー！」

「あれ、アミユリーは誘拐されてたんじゃ？」

ここですよやく雨双が勘違いに気づいたようだ。そもそも雰囲気とかで誘拐犯じゃないってわかるだろ。コート着る人に悪い人は少ないんだよ！

「ところで魅異さんと雨双さんの関係を知りたいですねえ」

「私は魅異さんの弟子なんだ。…あと、二人とも疑ってすまなかった」

「いえいえ構いませんよおっ！」

俺も心が広いから許してやろう！

あ、ジュース全部飲んじゃったな。

「あー！全部飲んだんだったば！」

「可哀想にね。はい、これ」

魅異がアミューリーにジュースを渡す。なんか俺が悪者みたいじゃないか！

「ありがとうだつてば！」

「ふふん、このジュース代は高いよ」

魅異がこつちを見ながら言う。金を取るつもりか！？

「金はないぞ！」

「私がお金に興味あると思う？ちよつとした用事を頼みたいんだよ」

ちよつとした用事？ま、その程度なら事件とかに巻き込まれることはなさそうだな。

「最近特星エリアで起こってる事件を解決して欲しいんだけど」

「おお、いきなり巻き込まれたよ」

「あ、それってあれですかねえ？特星エリアにお菓子だらけの場所が現れる事件！たしか新聞で見ましたよぉっ！」

それって印納さんが作ったお菓子の国が何かじゃないのか？前に城とか作ってたし。

「ちなみに犯人は女子小学生だよ。場所は特星エリアを適当に前進してれば着くから四人で頑張ってたね」

拒否しても何らかの形で巻き込まれるだろうし、今日の昼食費がお菓子でチャラにできるかも！

「四人でつてことだし、私も行くぞ」

そういつて立ち上がる雨双。というか、さっきまでずっと倒れてたのか？

「雨双は巻き添えだから嫌なら来なくても良いぞ」

「魅異さんが四人でといってたし、アミューをお前達に任せると危ないからな。…お菓子食べたいし」

雑魚ベーはともかく、俺は非常に安全な男だぞ！

「とにかく向かうぞ」

こうして俺たち四人は特星エリアへ向かった。

「特星エリア」

というわけでやって来ました特星エリア！

「さあ、お菓子はどこだ！？一ヶ月分は貰いたい！」

「悟さん張り切ってますねえ」

それは当然だ。食費が三人分わけだし。

それにしても全員がほぼ装備なしだが大丈夫だろうか？特星エリアに居る奴は変なのが多いらしいが。女子小学生とか。

「皆、さっきから襲ってきてるモンスターには関心がないんだっけ？」

アミュリーの質問でわかるように、現在進行形でモンスターが俺達を襲っているのだ。もっとも足止めにすらなっておらず、歩きながら倒せるので楽だ。

「違うぞアミュリー。会話しながら倒せるようなモンスターを気にしてると、主人公としての程度が低くなる。だから俺はあえて会話にその話題を出さないんだ」

「私は関心がないだけだぞ」

む、もしかして主人公であることを気にしてるのは俺だけか？

「あら、ならば関心を示せる相手が必要ね!」

どこからか聞こえてくる声。…この声は聴き覚えがあるぞ。

「それなら私が相手よ!」

要注意人物である印納さんが空から降ってきて登場する。

「印納さん、俺達はわけありで急いでるんですけど」

「ふふん。お菓子だらけのエリアのことね?悪いけどそこへ行きたければ、お菓子系賢者の私を倒さなければいけないわ!」

別に印納さんはそこまでお菓子と関わりのある人でもないけどな。

「でも四対一は卑怯よ。だから二人が私と戦い、もう二人が先に進むってのはどう?」

「二対一は卑怯じゃないんだっけ?」

「私は優しいからそのくらいのハンデはあげるわよー」

それなら四対一でも良いと思うけどなあ。恐らく二対一で勝てる自信があるんだろうな!。

「誰が行く?俺はパスしたいんだが」

「あ、悟は強制参加ね」

「嘘!？」

印納さんが相手とか本気で嫌なんだが。ふざけてるけど強い技とか使ってくるし。

「雨双さんかアミユリーさんとのペアが良いので今回は出ませんよ
おっ!」

自分勝手だと言いたいが、いつも盾になってくれてるんだからたまには許してやるか。

「私もまだジュース飲み終わってないんだってば」

そのジュース何本目だ？

「なら私しかないな」

「ってことで俺と雨双のペアでいきますよ?」

「誰と組もうが問題ないわ!この東洋で幻の印納槍で吹き飛ばすまでよ!」

そういつて印納さんが取り出したのは竹箒だった。そもそも槍じゃないし、そんなものが東洋で幻なわけあるかつ!

「なら俺も我が家に伝わる水鉄砲と八工叩きでいくぜ!」

「何で張り合う!?! 私達は急いでるんじゃないっけ?」

甘いな雨双。焦るだけじゃあミスが多くなる。だから余裕のある行

動をすることが大事なんだ！

「さあ、くらえ！水圧圧縮砲！」

岩でも碎ける水圧圧縮砲を何発か撃つ。だが印納さんは笑顔でスキップして全て避ける。

「これが青春よー！」

「嫌な青春だ。アイスニードル！」

雨双も氷の棘を飛ばすが全て避けられる。

「こつちのターンよ！槍魔術、スーパーエナジー！」

持つてる竹箒を天に掲げる印納さん。思わず身構える雨双と俺。

印納さんの竹箒が輝く。印納さんは輝いている竹箒をこちらへ向けてくる。

「ほら、綺麗よ！」

「…それで？」

技を使ってくると思っていた俺はつい聞き返す。まさかこれだけってことはないはずだ。

「これでこそ東洋の幻に相応しいわ！」

「…空気圧圧縮砲！」

竹箒に見とれている印納さんに魔法弾を撃つ。

「きゃあぁっ！」

油断していた印納さんはそれを喰らって吹っ飛ぶ。

「悟、あの人はなんなんだ？」

「俺が知るか！」

変な人であることは確かだが、それ以外は何にもわからん。

「うう、二人とも強くなったわね」

いつの間にか印納さんが立ち直ってるし。

「私は初対面だが」

そういえば雨双は印納さんと会うのは初めてなのか。

「それもそうね。…さて今回は私の負けにしておくわ！戦利品としてこれ託すわよ！」

印納さんが俺に渡したのはゲームのカセット的なものだった。

「ゲームですか？」

「さあねえ？そんなの教えないわよー。あ、お菓子だらけの場所は向こうよ」

それだけ教えると何処かへ走り去る印納さん。何しに来たかはわからないがゲームのカセットらしきものはもらうことにした。

「お菓子の隠された森」

印納さんに教えられた森の中を歩いている俺と雨双。雑魚ベーやアミューリーとは合流できていないが、地面にクリームなどが多くなってきた。

「雑魚ベーとアミューリーはどこなんだ？」

「二人とも迷ってるんじゃないか？その場合、私は雑魚ベーだけ見つからないでほしいな」

本人が聞いたら落ち込みそうなことを平然と言う雨双。…いや、あいつならなに言われても喜ぶか。

「あ、二人を発見なんだってば！」

噂をすればアミューリーを発見。あれ、でも雑魚ベーの姿が見当たらないぞ。

「大変なんだってば！雑魚ベーとはぐれたんだってば！」

おお、雨双の願いが叶ってしまった！これは雑魚ベーを放置しなけ

ればならない予感だ。

「どうする雨双？」

「え、捜せば良いんじゃないか？」

おや、これは予想外の反応だ。

「ほら、あれだ。私達の盾に適役だからな。それとも悟が代役か？」

「俺には荷が重い！だから早く雑魚ベーを捜そう！俺はあっちを捜すから！」

雨双やアミユリーとは別行動で捜すことにする。

もし今の状態で敵に出会ったら盾にされる！その前に雑魚ベーを見つけないければ！

「こつちか？…あ」

いつの間にか森を抜けてしまったようだ。目の前には大きなお菓子のお城が見える。

そしてお城を見上げる一人の少女が立っている。雨双やアミユリーと同じくらいだろうか。

「……………ここですか」

あの子、ふらふらしてるけど大丈夫か。

「……………あ！」

あ、こっちに気づいた。

「……………あなたはもしかして雷之 悟さんですか？」

「なっ！俺の名前を知ってるなんて、俺のファンか！？」

主人公暦数ヶ月、ついに人気者になってしまったか俺！

「……………この季節にコートを着ている人は珍しいですから」

あ、違ったか。

半袖コートは注文中だから仕方ないだろ。

「……………ところであなたはこれのお菓子のお城が目的ですか？」

「ああ。事件解決ついでにこの城を全部もらうつもりだ」

虫とかかも寄り付かない城のようだし、よく見ると下の部分が大きな皿になってるから全部食べそうだ。

「……………そうですね。でも私もこれのお菓子を全部貰うつもりです」

…なるほどな。言いたいことは完全にわかった！

「それならどちらのものが決着つけないとな！」

「……………別に私が全部食べたいわけではありませんが、皆へのお土産

のためにすべて頂きます！戦場の結界。そして自縛爆霊の召喚」

相手の辺りに多くの幽霊が召喚されてこっちに飛んでくる。

「幽霊！？」

「……………私の名前は毬いが 記紀弥ききや。とある島の寺の主をしている幽霊です。特殊能力は有利不利を操る能力ですが、結界や術なども扱えます」

幽霊自体は怖くはないが攻撃とかが通じるか心配だ。

「水圧圧縮砲！」

こちらへ飛んでくる幽霊を避けつつ攻撃する。

「……………防御の結界」

普通に結界で防がれる。技名言うより結界使う方が早いぞ！

「とりあえず距離を！いたっ！」

後ろに下がろうとしたら見えない何かにぶつかった！

「……………お城に被害が出ないように私達の辺りには結界があります」

一番最初に使ってた戦場の結界とかいうあの技か！

「あれ、体が？」

急に体が動かなくなつたぞ！

「バアアン！」

そして背中では何か爆発して、その勢いで結界に突っ込む。

「……………自縛爆霊は触れた者の動きを封じ、爆発します」

いてて、ならさっきのは背中にその霊がくつついたのか。

記紀弥は場所を変更しながら霊を呼び出してくる。

「だがそんなの避けるまで！って、凄くいっぱい飛んできた！悪霊退散！」

避けられそうにないのでとりあえず逃げる。でもこの結界内だけで何処まで逃げ切れるか。

「こうなつたら全力撃退だ！」

俺の持つ最強の武器、エクサスターガンで倒すしかないな。この銃は充電式で、充電最大の時に撃てる必殺技は特星内でも相手を消滅させる程の威力があるんだ。効かない相手もいるわけだが。人相手に使うと危険だが、幽霊相手だから使っても大丈夫だろ。

「悪いな。エクサバースト！」

いざという時の為に先に謝って必殺技を撃つ。小屋くらいなら飲み込めそうな大きさの光線が記紀弥へむかう。

「……これは！」

巨大な光線は結界と記紀弥を飲み込むかのように、森の木を消滅させながら突き進んでいった。

「どうだ？倒せたか？」

「……………今のは危なかったです」

記紀弥は無事だったようだが本物の幽霊っぽく浮いていた。

「無事か。でも妙に違和感があるな」

「……………さっきまでは仮の姿。今の私こそが真の姿である記紀弥第二形態！……冗談です」

おお、なんだか話が合いそうなやつに思えてきた！

記紀弥第二形態か。だがこの俺は主人公！第二形態程度に敗れる俺じゃないっ！

「こ、これが真の記紀弥！だがお菓子と食事代とお土産を待つ者のためにも俺は負けれない！」

「……………なるほど。ならばその意気込み、お菓子の城とともに断ち切ってあげましょう」

雰囲気は良いのだが、お菓子の城を断ち切られると凄く困るんだが。

「……………と言いたいところですが、そろそろ帰りの船が出る時間なの

で行かなければなりません。私はある島の寺に住んでいます、よければ今度遊びに来てください」

記紀弥はそれだけ言うと第一形態に戻り、その辺のお菓子を集めて去っていった。遊びに誘うのならちゃんとこの島とか言ってくれないとわからんぞ。

「敵も無事に倒せたし、ついにラスボスか!」

「あ、悟発見だつてば!」

敵陣に乗り込もうとしたとき、後ろからアミユリーの声が聞こえる。

「お、みんな無事だったか」

声のほうを見ると三人ともそろっていた。道に迷った雑魚ベーも見つかったようだ。

「悟、これは誰の仕業だ?」

雨双は歩いてきた道を指差してたずねる。そこにはエクサバーストの攻撃で出来た直線の道があった。

「それは俺がエクサバーストを撃った時にできた道だ! 敵に襲われてたからな」

「へー、これは悟の仕業なのか」

「凄いだろ!」

エクサバーストを撃ったから充電が空になったが、数ヶ月くらいで満タンになるはずだ。

「悟ー、その攻撃に雨双が当たりかけたんだってば。しかも本当に直前で避けたんだってば」

「え？」

そういえば俺が戦闘中もみんなは森にいたわけで、普通にあたる可能性があつということか。…は、さっきから雨双に睨まれてる！？

「いや、あの、悪かった！俺が悪かったから許してくれ！」

「特星で人が消滅するような攻撃だったんだ。それなりの覚悟は良いか？」

な、何でそんなこと知ってるんだ！？雑魚ベーやアミューリーでさえ知らないはずなのに！

「どこでそんな情報を仕入れた！？」

「いやあ、私が喰らって消滅しちゃいましてねえ」

雑魚ベーは喰らったのか。でも復活してるから別にいいや。

「待て雨双！今はボス戦前だから体力の温存を優先させるべきだと思っぞ！」

「なら、さっきの私みたいに避ければいい！奥義、アイススイート！」

雨双の右手から二階建ての家なら飲み込めそうな、巨大な冷凍光線が撃たれる。エクサバーストより大きいって！

「私がお店で喰らったのより大きいですねえ」

「こんなの避けれるかあ！うわああっ！」

アイススイートで吹っ飛ばされて、後ろのお菓子のお城が凍りつくところが見える。そして俺の意識はそこで途絶えたのだった。

「…あれ？寒っ！」

辺りがとても暗い。後ろを見ると表面が完全に凍ったお菓子のお城があった。

「雨双にやられんだっけ。…誰も居ない」

ということはこのお菓子のお城は俺のもの！？

「よっしゃ！表面は凍って食べれないが、側面と裏面と屋根と内側は食えるぞー！」

これだけあれば数ヶ月はお菓子だけで生活できる！そうすれば数カ月分の食費をコートとゲームに使えるぞー！

「誰か助けてー！」

おや、お城の中から声が聞こえたぞ？

「中に誰かいるのかー？」

「あーはい、居ます！閉じ込められたみたいなので助けてくださいー！」

呼びかけると返事が返ってくる。お城の中に居るってことはボス予定の子か？

「このお城は何だ？」

「このお城ですか？私の能力で作ったお菓子のお城なんです」
どうやらお菓子のお城の製作者らしい。

「横の壁とかを食べて出てきたらどうだ？」

別に助け出しても良いが、お菓子の城なら食べたり壊したりで出れるだろ。

「それがこのお城って美味しくないんです。私の能力だとお菓子の質はこのくらいが限度なので」

美味しくないのか？凍っていない部分の壁のクリームを食べてみよう。

「んー、確かに美味しくないな」

クリームの感触であるが味は水道水みたいだ。

「もしも助け出せたらこのお城を持っていってもいいので助けてくださいー！」

…今回こんな目にあつた原因の二割くらいは中に居るこいつだし、こんなお菓子の城は正直いらないから助けないでおこう。

というか正面のドア以外に出口がないし、欠陥住宅だろこれ。

「忙しいから他に頼んでくれ。俺は忙しいから」

「私は女子小学生ですよ？子供を助けるのが大人の役目じゃないんですか？」

「特星においては子供の役目だぞそれ。もしくは小学生の味方の役目だ。じゃあ頑張れー」

見えないだろうが手を振ってその場を後にする。明日あたりにでも凍らした張本人に助けさせよう。恐らく今日は俺の部屋に居るだろうし。

部屋に帰ると予想通り三人は俺の部屋で夕食を食べていた。そして雑魚べーとアミューリーの要望により、雨双も俺の部屋に住むことになってしまった。

四話 海岸の砂浜対戦

@悟視点@

やけに熱い太陽の光が嫌な夏の時期。そんな日に俺達は海水浴に来ている。本当は俺は家に居るつもりだったのだが、雨双が力キ氷を作ってくれるというのでつい一緒に来てしまったのだ。

もつとも、その力キ氷は泳ぎ終わった後に食べるらしいが。

「終わるまで待てるかつ！」

力キ氷のためだけに来た俺は何の準備もない。要するに泳げないということだ！

それにそのまま泳いだら他の女子小学生にバカにされたし、仕返しに攻撃したら相手のほうが強くて返り討ちにあうという悲惨な状態だったのだ！

それで共用の休憩所である小屋を見つけたので隠れているところだ。俺以外は泳いでいるようなので他には誰も居ないが。

「さすがは危険度の高い場所だ」

この海は特星エリアにあるのだが、女子小学生が多くて非常に危険な場所らしい。現に俺と雑魚ベー以外は女子小学生だけだったし、全員がそれなりに強いのだろう。

「ん。おい、アミユリー！」

窓の外を見るとアミユリーが居たので窓を開けて呼びかける。

「あ、悟だつてば。今までどこにいたんだっけ？」

そのまま小屋の中に入ってくる。

「外の様子はどうか？別に勝負を挑まれても余裕で勝てるが、攻撃して来た女子は俺をもう狙ってないのか？」

「うん。どの子かは覚えてないけど、ほとんど全員が雑魚ベーと勝負して遊んでるんだつてば」

雑魚ベーなら海に沈んでも大丈夫だし、俺の出る幕じゃないな！

「いやあ、本気でいけば大丈夫なんだけどなあ！…あれ？」

窓の外で黒い何かが落ちたのが見えた。小さくて何かよく判らないが。

「どうしたんだっけ？」

黒い何かは次々と落ちてくる。…雨か？

そう考えているうちにも次々と黒い雨が降り出す。アミユリーもそれに気づいたようだ。

「うわあ、黒い雨だつてば！」

家の中にも入ってきそうなので窓と扉を閉める。

そうこうしているうちに雨は強くなり、遠くが見えないほどになった。

「なんなんだこの雨？」

「原油とかコーヒーかもしれないんだってば」

原油？もし原油とかコーヒーが振ってるのなら、原価は無料だからそれなりに儲けられるんじゃないか！？

「よしアミューリー！外に降ってるものを汲みにいくぞ！」

「あ、降り終わったんだってば」

「何！？」

窓が真っ黒で外は見えないが、確かに雨の音が聞こえない。

「ばきききっ！」

「今度はなんだ！？」

小屋の屋根や壁などがどこかへと飛んでいく。危つく後ろの壁が当たるところだった。

「…黒い雨には驚かされたが、何の問題もなさそうだな」

外は俺達が泳いでた時とほとんど変わらなかった。

「でも誰も居ないんだってば」

「え？あ…」

そつえば誰も居ない。よく考えたら黒い雨が降ってきた時点で、誰かが雨宿りのためにここに来るはずなのだ。この周辺で一番近い建物はここくらいだし。

「まさか小屋の屋根や壁と一緒に飛ばされたか？」

「それと黒い雨の降った跡がないんだってば」

アミユリーの言うとおり、黒い雨の降った後がまったくない。吹き飛ばされた小屋の壁や屋根はもちろんだが、辺りを見回しても黒い雨の雫すらないのだ。

「仮説決定。まず何らかのことが原因で黒い雨が降ったんだ。そして何者かが黒い雨と雨粒がついたものをどこかへ移動させた。こんなところだろ」

我ながら誰でも予測できそうな仮説だ。だけど大体はこんなんだろ。

「私も大体そうだと思うんだってば。犯人の目的もわかったんだっけ？」

「ああ！恐らく敵は原油かコーヒーかは判らんが、それを売って大儲けする気だ！俺が先に考えたのに卑怯な！」

まあ、特星ではその程度は問題じゃないがな。取られたならば取り返すまでだ！

「あの、悟。それなら黒い雨は誰が降らせたんだったけ？」

「ははは、そんなこともわからないのか？自然現象に決まってるだろ！」

原油やコーヒーを降らせる雲とかがあるんだろうが、それも恐らく真つ先に吸い込まれただろうなあ。生産するものを奪って、更に降った原油まで奪うなんて強欲なやつだ！雲も原油も全部取り返してやる！

「あー、もう！誰だか知らないけど、せつかく降ってた醤油やソースらしき液体を雲ごと盗むなんて！一体どこの誰の仕業よ！？」

どこからか叫ぶ声が聞こえたので見てみると、年上であろう女性が一人で何か叫んでいた。…怪しい！どう見ても犯人だろ！

「おい、その人」

通りすがりの人を演じて普通に話しかける。

「あれ、こんなところに女の子と男性？…なるほどわかったわ！」

急に女性は何かが閃いたようだ。

「とりあえず名乗っておくわ。私はキール。世界一まじめな幽霊で、特殊能力は補助系のようなことをサボる能力。サボりと暇つぶしが趣味よ！」

説明に矛盾点があるんだが、高確率でまじめというのが嘘なんだろうなあ。というか、また幽霊か。

「俺は雷之 悟。 質系の魔法弾を操る能力を持つ主人公だ！」

「私は神様が職業のアミューリー レイカレンだってば。 質系の磁力を操る能力とかが使えるんだってば。 よろしくね」

たとえ相手が原油やコーヒーを盗むようなやつでも自己紹介はする。主人公らしい礼儀正しさだ。

「単刀直入に用件を言うわ。 ここに降ってた醤油かソース的な物を盗んだのはあんた達ね!？」

醤油？ソース？そんなものは降ってなかったと思うが。

「俺達がそんなの知るか！」

「ふん、私の目は誤魔化されないわよ！こんな場所で少女と二人で居る男なんて、泥棒か変態か家族が主人公くらいしかないわ！」

家族だったら見逃すのか？それ以前に主人公だと言ったばかりだぞ！

「俺は主人公だ！」

「夏にコート着てる不審者が主人公なんて思わないわ」

半袖コートですら駄目なのか…。

「なんにしても醤油やソースなんて見てないな。 それより原油かコーヒー的なものを盗んだのはお前だろ？」

「そんなの知らないわよ。とにかく喋る気がないなら実力行使よ！」

「望むところだ！アミューリーは危険だから下がってる！」

「…思い込みって怖いんだってば！。それじゃあ遠くからみさせてもらうんだってば」

なるほど。相手は原油かコーヒー的なあの雨を、醤油やソース的なものと思いついてるのか。でも俺が勘違いしてる可能性もあるんじゃない？…ないない。

「主人公は大体正しい！もし主人公が正しくないのであれば、正しいように修正するまで！その方法は勝つこと！よって水圧圧縮砲！」

まずは様子見で一発攻撃する。

今回も水鉄砲が装備だが、そもそも銃なしでも弾は撃てるし問題ない。

「きゃ！」

しかし予想外にも水圧圧縮砲はキールに直撃する。そしてキールはそのまま少し後方に吹っ飛んだ。

「これが主人公の力だ！」

よく考えたら俺は主人公だし、楽勝なのは当然じゃないか。

「あまいわね！背後注意よ！」

「へ？あ！」

後ろを見ようとするが体が動かない！…まさか！

「ドカアアン！」

俺の背中では何かが発火する。

「く、自縛爆霊か！」

「そのとおり！私は自縛爆霊の扱いが上手いのよ！手裏剣レインボ
ー！」

キールの周りに手裏剣が現れ、こちらに飛んでくる。

「そんなものは全部撃ち落とすまでだ！水圧分裂砲！」

野球ボール程度の水の弾で手裏剣を撃っていく。しかし手裏剣は水の弾をすり抜けて俺に当たる。

「ドガガアアン！」

そして爆発。手裏剣の自縛爆霊！？

「いや、手裏剣は生物じゃないはずだ！」

「叫ばなくても知ってるわよ！そう、今のは手裏剣じゃないわ。ヒ
トデの自縛爆霊よ」

へー、ヒトデも幽霊になれるのか。

「さあ！貴方程度が私に敵うはずがないわ！降参しなさい！」

さて、どうする？記紀弥の時とは違って攻撃は当たる。エクサバーストで消滅させるのが手っ取り早いが、黒幕と戦う時に使えないのは厳しい。でも遠距離だと圧倒的に不利だし、近距離だと俺の攻撃手段がない。

「あ、その前に変身しないと」

なに、第二形態があるのか！？

「完了！」

「早いな！」

しかも変身とか言ってもほとんど変わってない！ちよつと浮いてるだけじゃないか！

「ふふふ、ちよつと浮いてるだけと思つたら大間違いよ！この状態の私には大抵の攻撃が当たらないのよ！」

「本格的な幽霊つて訳か」

そつといえば記紀弥にエクサバーストを撃つた時も当たらなかったな。
…倒す手段無いんじゃない？

「弱点を言え！主人公の最強の武器は情報なんだぞー！」

「私の知ったことじゃないわ！自縛爆霊ストライク！」

自縛爆霊がまっすぐ飛んでくるので回避する。飛んできた自縛爆霊はすぐ後ろのクラゲに触れて爆発する。

「こらー！ちゃんと敵に飛びなさいよ！技を叫んだ私が恥ずかしいじゃない！」

確かに叫んだ技を避けられると恥ずかしいよなあ。

…さてどうする？自縛爆霊は生物に触れると爆発するらしい。それで現在キールの周りに自縛爆霊がスタンバイしている。

うん、手段は一つしかないな！

「ちょっと待ってろ！」

「ついに醤油かソース的なものを渡す気になったようね！」

キールに少し待ってもらって穴を掘る。

「お、あつた！」

「あつたのね？なら早く渡しなさい！」

「はいパス！」

砂の中から取り出したのはいくつかの貝だ。それをキールの近くに投げつける。

「おっと、落とすところだったわ！」

げ、変身前に戻ってキールが貝を取りやがった！

自縛爆霊に生きた貝をぶつけて爆発させようと思ったんだが、キールにキヤツチされたんじゃ意味ないじゃないか！

く、これまでか？

「醤油かソース的なものはこの中ね！…ん？…ん？…全然開かないじゃないの！」

チャンスだ！この隙に逃げよう！勝てないわけじゃなく、爆発に巻き込まれない為に逃げるんだぞ！

「じゃ、頑張れよー！」

「頑張ってるわよ！んん〜！…全然駄目だわ」

無駄に努力してる幽霊を放っておいて、アミユリーの元へ向かう。

「はぁ、疲れたわ。交代よ」

「ドガアアアン！」

大きな爆発音に振り向くと、海のほうに吹き飛ぶキールと自縛爆霊が見えた。

「終わったぞー」

「見事に敵は吹き飛んだんだった。あれも作戦だったけ？」

「え？…そんなの当然だろ！俺は主人公だぞ！いやあ、手加減したんだけどなあ」

自縛爆霊で敵を吹き飛ばしたんだし、一応は作戦通りだな！

「おい、ツツコミ役」

うお、なんだ！？

…ああ、ボケ役か。いきなりなんのようだ？

「なんだ？不満げだな。嫌なことでもあったのか？俺に相談しろよー」

気遣う気持ちがあるのなら用件を言って早く帰ってくれ。

「気遣わないけど用件は言うぜ。お前のゲーム的な力セットが狙われてるらしいぞ」

「…これか」

「あれ？どうしたんだっけ？」

「ボケ役がなんか言ってるんだ」

俺の周辺状況については俺の知り合いには大体話してある。もちろんボケ役の存在についても例外ではない。

「ありがとう！」

…でもこのカセットは俺のじゃないぞ。その貰い物を一体誰が狙うんだ？

「本来の持ち主だよ。不法侵入者した奴から魅異の上級生が奪ったらしい」

その上級生ってのは印納さんのことだな。何であの人は厄介ごとに参加したがるんだ？

「お前も同類だろ？で、不法侵入者も強行手段で取り返そうとしてるんだ。特星のルールのには何の問題もないわけだな」

だからカセットを持つてる俺が襲われるのか。今すぐにでも海に捨てたら大丈夫かな？…よし、ちよつと捨ててくる。

「待て待て待て！当然ながらそれはただのカセットじゃない！」

そうか？なら詳細の説明を頼む。それと売値とかも。

「いいか？それを判りやすく例えるなら発電機だ。それこそ全世界に電気を供給できるくらいの威力がある。電気的なエネルギーがそれに密集してるんだ」

確かに全世界の電気なら凄い価値だろうなあ。でも特星には必要ないだろ？魅異や校長関係のおかげで生活できているような気がするし。

「その通り。でも地球での需要は凄いと思うぞ？…とにかく取られないほうが良いぞー」

ちよつと待て！もう少し詳細を聞かせろ！

…聞こえなくなつたか？

「悪い。待たせたな」

「十秒くらいしか待つてないんだつてば。それよりもあれを見るんだつてば」

アミユリーが指差す先は海だった。何も無いように見えたが、よく見ると白い渦のようなものが見えた。

「あれ、なんか見覚えあるな。」

海の上に渦巻く小さな渦と似たようなものを見たことがある気がする。逆ソフトクリーム？

「でもここから見てあれだけ小さく見えるつてことは、距離的にはかなり遠いんじゃないか？」

ここで自慢なのが、俺の視力と動体視力はかなりのものだ。故郷の射撃大会はほぼ優勝だったし、テレビ番組の無理難題をクリアして賞品をもらつて生活したりもしたほどだ。

そんな俺が目凝らさないと見えないのだから、船でも使わないと日が暮れてしまうだろう。

「大丈夫だつてば。口と鼻を塞いでた方が良くもだつてば」

「窒息死させる気か！？つて、うおおっ！？」

何の前触れもなしに体が吹っ飛ぶ。…というよりは白い渦に向かって凄い速さで直進している！

水が口や鼻に！死ぬ！

「到着だつてば！」

…水に突っ込む景色が見えてたはずなのに海岸にいた。この二秒くらいの間に何が起こったんだ！？

「状況説明を頼む」

「私の磁力で渦に突っ込んだんだつてば。磁力の乗り物と違って、いきなり高速で動くこともできるんだつてば」

それって体が無事で済まない気がする。水の抵抗とかもあるだろうし。

「ほほほ、元気そうだねえ。何か用かい？アミューリーと誰かさん？」

明るめに笑いながらやってきたのはお婆さんの人だった。

「姫卸ひめうし？どうしてこんなところに居るんだっけ？」

姫卸という名前らしい。…元王妃卸くらいが限界じゃないか？見かけの年齢的に。

「そこ。失礼なことを考えるんじゃない」

「俺は失礼だとは思わない！だから俺的には失礼なことを考えていることにはならないぞ！」

立場的にも姫より元王妃のほうで政治に口出しできそうな雰囲気だし、むしろ褒めてると言うべきだな。

「それよりアミユリー。今度から着替える時は上だけ脱いで、腕で胸を隠すようなポーズを混ぜると良い。私的には多少照れた顔でやることをお勧めするよ」

「…ちょっと待て。なんで姫卸婆さんがアミユリーの着替え方を指摘してるんだ？」

「そりゃあ決まってるじゃあないか。私が見たいからだ！」

く、もしかして雑魚ベーと同じような趣味の奴か！？雑魚ベーでももう少し恥らって言ってるが、普通に断言してるからな。しかも着替え方まで指摘してるし。

「ちなみに覗いてはいるが、アミユリーは特星で過ごした期間を含めれば、二十歳超えてるから問題ないよ。ずっと小学生ではあるがねえ」

年齢とかそういう問題よりも覗くことの方が問題だろ。

それ以前に特星で過ごした期間も年齢に加えていいのか？

「アミユリー、姫卸婆さんとの関係は？」

「姫卸は私と同じく神様の職業なんだってば。自称が少女の神様だっけ？」

少女の神様は少女になるべきなんじゃないか？少女の神様と聞いて会いに来た奴はがっかりしそうだ。

「自称じゃないよ。同じ意思の人たちにはそう呼ばれてるからねえ」

「同じ意思ってその辺の少女好き達か？例えば雑魚ベーとか」

俺の知り合いの中で少女好きといえば雑魚ベーだな。

「雑魚ベーの知り合いかい。確かに私と雑魚ベーは同志だが、その辺の奴らと一緒にするんじゃないよ」

「違うのか？」

「その辺の奴らは体目的だろう？私達は少女同士がほのぼの過ごす物語が目的なんだよ。もちろん雑魚ベーだって少女達に手は出さないよ。仮に誰かが特星内の少女を襲おうとしても、絶対にどうやっても無理だろうがねえ」

雑魚ベーって普段からアミユリーや雨双に抱きかかっているんだが。実は今日も二人が水着に着替えた直後に抱きついてたし。

「姫卸曰く、スキンシップは大丈夫らしいんだってば」

「その通り。そういうわけでアミユリー、説明で疲れたから膝枕してくれないかい？」

普通はお婆さんとかが子供を膝枕するものじゃないか？

「膝枕はなしだ！それよりこんなところに隠れてるなんて怪しいなあ！女子小学生の誘拐ついでに原油かコーヒー的なものを盗んだのは婆さんだろ！？」

「悟！姫卸は雑魚ベー以上に性質は悪いけど、誘拐なんてしない人だつてば！…多分」

「…少し違うわねえ。確かに私は墨汁的なものを浴びた人たちを誘拐した。でも女子小学生が多いのはあくまで偶然よ。勝手に人を変人扱いするんじゃないよ。ふおほほほ」

なるほどな。変人ではあるが、誘拐は趣味とは関係なく誘拐を行つたというわけか。あと笑い方がバージョニアップしたと！？

「さあて。それじゃあ本題に入らせてもらうよ？悪いことは言わない、そのカセットを渡しなさいな」

「原油かコーヒー的なものを奪つたのに、更にこのカセットを狙うなんて欲深いな。悪いが両方とも俺には必要なんだ。カセットも原油かコーヒー的なものも譲れないな」

そう。誘拐された雨双や雑魚ベーが戻ったときに、美味しい飯を食わせてやらなければならぬ。五十セルくらい高級な食材を使うとかな。

「うふおほほほ！こちらと同じさ。あ、私の特殊能力は波動を操る能力と、空気を操る能力と、水を操る能力、それと制御と暴走を操る能力よ。覚えておきなさいな」

四つも能力を操るのか！？しかも制御と暴走を操る能力は非質系じゃないか！…勝てるわけがない！

「申し訳ありません、お婆さま！いや、お姉さま！誘拐した人は連れてって良いので、どうかカセットと原油かコーヒー的なものは勘弁してください！」

とりあえず変人だし、おだてれば見逃すだろう。誘拐された二人は自力で何とか逃げるはずだし。

「悟、主人公の威厳はどうしたんだっけ？」

「はっ！しまった！…違うぞアミユリー。今のは相手の力量を見るための作戦だ。俺が雨双や雑魚ベーを見捨てるわけじゃないか」

アミユリーが疑いの視線を向けてくるが、俺は二人が逃げ出せると信じてああ言ったのだ。別に見捨てるなんてそんなつもりはないと思う。いや、ない！

「ふん、信頼は強いようだねえ」

「まったくその通り！さすがは姫卸婆さん、俺の良いところをわかってるじゃないか！」

今日知り合ったばかりだが、俺の良さがわかる人のようだ。

「主人公だろう？それなら私がカセットを持って戦い、それを壊さないで私に勝てるかい？」

「当然だ！俺は正真正銘の主人公だからな」

「見てみたいなあ。私は今日までそんな主人公らしい戦い方は見たことないものー。そんな主人公らしい戦い方を経験できたら嬉しいねえ」

今まさにその戦いを見せる時じゃないか？まあ、俺のような主人公がいないと経験できないからな。主人公らしい主人公である俺がやるべきだろ！

「姫卸、そんなおだて方でカセットを渡す人なんていないんだってば」

「おや、残念ねえ。とりあえず変人のようだし、この程度で適当におだてれば渡すと思ったんだけど」

なんだと！俺と同じくおだてる作戦とは！だが変人ではない俺におだて作戦など通用しない！

「覚悟しろ！水圧圧縮砲！」

「なるほどね。魔法弾を操る能力かねえ」

あ、しまった！特殊能力を言うのを忘れてた！

姫卸婆さんは水圧圧縮砲を正面から殴って打ち破る。

「紹介を忘れてたがその通りだ！あと強いな！？」

「私の能力を使うまでもないかねえ。私は直接戦うタイプなのよ。」

おかげで体の動きは抜群だよ。ほほほ」

直接戦うくらいなら能力を少し分けてほしい。俺は能力を使う派なんだぞ。

あと笑い方が戻ってる！

「私も援護するんだってば。それっ」

アミユリーの掛け声と共に海岸の砂や水が姫卸にくつついていく。最終的には家くらいの泥の山が出来ていた。これだけでも重さでかなりのダメージだろう。

「もう一撃だってば」

更に海の大量の水が、巨大レーザーの如く泥山を飲み込んでいく。その勢いと速さは津波以上だ。泥山のあった場所には何も残っていなかった。

「磁力凄いな！どうやったんだ？」

「姫卸と海水と泥山とに強力な磁石の性質を与えて全部くつつけたんだってば。その後更に大量の海水に磁石の性質を与えれば津波風の巨大ビームの完成だってば」

そつえば俺が白い渦に突っ込むときも、何かに引き寄せられる感じだったな。

「それにしてもやりすぎじゃないか？これで無事なら凄いなと思うぞ」

「ほほほ。なら私は凄いいんだろうね」

海の中から姫卸婆さんが出てくる。

あの攻撃を受けたのにあまり疲れてなさそうだぞ！

「…カセットがそんなに欲しいならくれてやるよ。ただ面倒に巻き込まれるだろうがねえ」

よし！今度これを地球まで売りに行くぞ！

「それより皆を解放してほしいんだってば」

「あ、そうだそうだ！早く皆を返せ！」

これで俺が皆を助けたわけだし、今まで以上に主人公としての株が上がりそうだな。

「そりやできないよ。墨汁のようなものが付着してるからねえ」

え、原油か醤油のようなものだろ？

「あの液体は変な材質みたいでねえ。付着すると体温を奪う効果があるのよ。だからその効果を私の能力で制御してるんだよ。ほほほ」

ということとは、原油か醤油的なものが取れるまでみんなを解放できないのか！？

「いつ頃みんなから液体は取れるんだっけ？」

「魔法や能力で出来てるみたいだし、あの墨汁のようなものを作った奴を倒せば良いと思うわ。保証はしないがねえ」

く、これじゃあ主人公としての評価を取り戻せないじゃないか！

「敵の本拠地はわからんのか？」

「私は女の子達の泳ぎを見ていたからわからないねえ。ほら、こんな風に」

姫卸婆さんが手を振ると、空中に俺達の泳いでいた海岸の様子が映し出される。波動を操る能力の応用だろうか？

「覗いてたのかよ！」

「少女の神様なんだから、少女を見守るのは当然だろう？ 私なりの仕事なんだから仕方ないよねえ。ほほほほ」

主人公の神様つてのはないのかな？…あつたら俺がなってるよなあ。

「まあ焦らないことだね。そのカセットを取られなければ多分大丈夫さ」

「このカセット？ 充電器みたいなものだって聞いたが」

ボケ役が地球で売れるかもといったこのカセットだが、今回の事件と何か関係があるのか？

「ほほほ。まあ電気の代用にもなるね。それは何とかエネルギーを溜め込めるものさ。上手く使えばその辺の星に少女天国とか魔法

の国とか作れる代物だよ」

特星以外に少女天国的な場所を作れる装置ねえ。なんだか凄いやうな凄くないような微妙な例えだな。

「とにかくそれを持ってれば敵から姿を現すつてことさ。いつになるかはわからないがねえ」

「その前にカセットを壊せば良いんじゃないか？」

カセットさえ壊してしまえば敵は陰謀を断念するしかないだろうし、危険な暴走に巻き込まれる心配もなくなるだろ。

「良い方法かもしれないけどやるなら家でやってね。私はもうすぐ寝ないといけないからねえ。ほほほ」

まだ夕方なのに寝るのか？物凄く早寝だな！

「姫卸は寝てる間でも能力を使えるんだっけ？」

「制御状態を一定にしておけば体温は下がらないし、波動の空間に皆入ってるから大丈夫さ」

波動の空間ってどんなのだ？波動の衣で体温を維持するとか？

「二人も敵が来るまでゆつくり過ごすことだね」

敵が居ないんじゃないでしょうか。姫卸婆さんのいうようにしばらくはのんびりと過ごすか。

こつして雑魚ペーと兩双の居ない生活を、少しの間だろうが始める
ことになってしまったのだった。

五話 寒い日のお寺

@悟視点@

夏が終わろうというこの季節。本来なら暑さが多少残るくらいの季節だが、現在の特星はそれを思わせないほどに寒かった。

雨双と雑魚ベーが姫卸婆さんに保護されてから結構過ぎたが、想像以上に手がかりが多くあった。

まず特星の各地で黒い液体が降るといふ現象が発生したことだ。どうやら液体を降らす発生源は小さいらしいのだが、この町は特星の中心部なので被害が大きいらしい。

そして黒い液体が付着した場所の温度が下がるため、各地の温度が下がっていき、特星全体の温度が上がらなくなっているのだ。

…ちなみに特星の温度管理は特殊能力で行っているらしいが、その中のメイン能力者が液体を浴び、温度を吸収されたのが温度低下の原因という説もある。説によればその能力者は温度を奪われてようやく他の人と同じ温度になったとか、それでも体温四十度はあるとか。変な都市伝説だ。

「それは都市伝説ではなく実話ですよ。…ところでどうして社長室にいるのですか？」

で、俺は現在几骨さんのところに情報収集にきている。魅異に敵の場所を聞きにきたんだけどなあ。

「と、こういうことだ」

几骨さんは能力で相手の思考を読めるので、俺は文章を考えるだけで会話が出来る。楽だけど、几骨さんの話を俺が無視しているように見えるのが欠点だ。

「そうですか。社長はその敵のところに遊びに出かけていますよ。その敵の方をからかうのは非常に楽しいらしいです」

俺もその敵に勝つたら是非からかってやろう。そして主人公の偉大さを広める！

「からかうのはほどほどにしないと雑魚ベーさんと同列と見られますよ？」

同列で見られる？ ってことはこの液体を降らせた犯人は小学生なのか？

「小学生の低学年と社長は言っていましたね。アルテという名らしいです」

小学生か。強力な特殊能力を使うんだろうな。

「…ところでどうして社長席に座ってるんだ？」

「社長代理ですから」

忙しいんだなあ。頑張れよ！。

結局入手した情報は相手が小学生ということだけだった。敵がこの町に戻るのを待つしかないか。

「あー、寒い。こういう日はどこかの宝箱にタイヤキでも入ってないか？」

ゲームとかにある宝箱の中身ってカビとか生えないのか？水中ステーションにある金属系アイテムとかも普通は錆びてるよなあ。

「タイヤキじゃなくても良いから甘いものが食べたいなー。ん？」

足に何かがあたる。足元を見ると何と宝箱があつた！

「なんてわざとらしいタイミングだ。これは中にお菓子とか入ってるのじゃないか？」

辺りを見回す。ここは公園内のベンチ近くで近くに人は居ない。そして少し離れたところにタイヤキ屋がある。…中身はタイヤキの可能性が大きい！

「どうだ！？」

中身は予想通りのタイヤキ！しかもたくさん！

「これはもらうしかない！」

持ち主に見つかれば戦闘になるだろう。だが特星なのに荷物を置いておく方が悪い！

「おお上手い！一つ二百セルくらいの価値はあるぞ！」

普通のタイヤキの二倍は上手い！普段から安いものを買う俺ならまず食べれない味だ。

「全部食べるのも悪いな」

俺はもう半分以上食べたし、残った分はお土産に全部貰うか。

「…その貴様、何をしてる？」

「へ？うわっ！」

後ろから聞こえた声に振り返ると、刃物の先が目の前にあった。どうやら刀の刃のようだ。ちょっと下を見ると女子小学生くらいの子が殺意的なオーラを放出していた。

「あまり動くと斬るぞ」

「特星だから斬れはしないが、痛いから勘弁してほしいなあ。ってか俺が何かしたか！？殺意や刀を向けられるようなことをした覚えはない！」

主人公が宝箱の中身を貰うのは悪いことじゃないよな？

「私のタイヤキは？まさか食べた？」

…食べたって言ったら斬られるよなあ。こうなったらさっきの出来事を正直に話すしかないか。

「さっきお腹を空かせた人がここを通りかかり、タイヤキをたくさん食べてたぞ！全部食べると悪いとか言ってたし、物凄く善人な人だぞ！うん！」

「その手に大量に持つてるタイヤキは？」

「これは俺のだぞー。いやもう間違いなく本当に」

宝箱から取り出した時点で俺のものだ。これぞ主人公の特権だな。

「く、怪しいのに証拠がないな。一つ千セルの値段のタイヤキだったのに……」

「一つ千セル！？確かに凄く美味かったが、最高でも一つ五百くらいが妥当だろ！？こんなことならもっと味わって食べればよかった！」

そんなに高かったなんて予想外だ。少し悪いことをしたかな？

「ほー、食べたんだ？」

「ああ！……でもお土産にまだいくつか持つてるから大丈夫だ。後で味わって食べるさ」

「その後があればな！」

「いてえっ！」

少女は持つてる刀で顔を突いてくる！刀は斬るために使え！

それにしてもどうして俺が食べたとわかったんだ！？

「ばれたら仕方ない！特星のルール上返り討ちにも出来るが、あえて逃げる！」

第一、タイヤキ持った状態で戦ったら潰れるだろっ！

俺は少女とは逆の方向に逃げる。戦う相手に背中を見せるなどよく言うが、今日の俺のコートは防弾と防刀の効果がついてるから大丈夫だ！

「この私から逃げられるとでも？」

「前だと！？」

少女とは逆の方向へ逃げたつもりだったのに、いつの間にか少女の居るほうに向かって走っている俺。一体どうなってるんだ！

「ブレーキ！ブレーキ！」

「手遅れだっ！巻き戻し斬り！」

少女はそのまま刀で思いっきり俺を斬り飛ばす。その威力は凄まじく、コートとタイヤキを少し切られてしまった。俺はまるでホームランを打たれたかのように吹っ飛んでいる。

「だがこれで逃げられる！」

そう思った瞬間、吹っ飛ぶ向きが急に真逆になる。

「来たな。落下斬り！」

飛んでくる俺を少女は斬りあげる。だが俺はなぜか地面に叩きつけられる。

「名乗り遅れたが、私は千宮^{せんくう}神酒^{みき}。ある寺に住む記紀弥様という幽霊に仕えている。本来の特殊能力は動きを操る非質系の能力だが、私は動きを変化させることしかできない。」

「そういう能力なのか。俺はてつきり呪われたのかと思ったよ」

ただでさえボケ役が取り付いてるんだから、これ以上呪われたら手に負えなくなる。

「その手もあったか。今度記紀弥様をお願いしてお前を呪ってやるう」

「タイヤキ一つやるから勘弁してくれ」

「それは元々私のだ！」

そう言いつつも渡したタイヤキを食べる神酒。これで呪われる心配はないな。

ところで記紀弥って前に会った幽霊じゃないか。こんなに強い部下が居るなんて凄いんだな。…それに勝った俺はもつと凄いつてことじゃないか？俺凄いな！

「それより残りのタイヤキをおとなしく渡し、食べた分のタイヤキ

の代金を返せ！私が記紀弥様に怒られるんだぞ！」

「俺だってタイヤキ一つに千セルも払ったとか言ったら怒られるよ！自分自身に！」

「安心しろ。千セルというのは嘘を暴くための嘘だ」

やっぱりそうだと思ったんだよ。タイヤキ一つで千セルもするわけないさ。

「本当は一つ二百セルだ」

「納得できるけど高い！…あれだ、宝箱売れば良いだろ」

「最近買った保温機能付きの宝箱だ。売るわけにはいかないな」

く、どうしても俺のタイヤキと金を奪うつもりか。

「なら勝負するしかないな。ちょっとタイヤキを宝箱に入れてくるから待っててくれ」

タイヤキは冷めないように、保温機能付きの宝箱に入れておく。

さて、主人公の実力を見せてやるか。

「戦う前に一つ聞きたい。操ると変化させるの違いってなんだ？」

俺にはこの二つの違いがよくわからん。もしかして普通に操るのと同じことができるのに、弱そうに見せかけて油断させようとしている可能性もある。…どっちにしても本気じゃないと勝てないのかも

しれないが。

「判りやすく言うと操れる時間の違いだ。そうだな、飛んでくる看板を停止させて跳ね返すことを例に説明するよ」

看板といえば台風のとときとか飛んできそうなイメージがあるよな。

「本来は止めてから跳ね返すまでを一つの動作で出来る。だが私は止める動作と逆の向きに飛ばす動作を別々にする必要があるんだ」

「神酒の方が凄くないってことだな」

「何かバカにしたような言い方だな。とにかく！タイヤキを奪った恨みは大きいぞ！たあぁっ！」

神酒が普通に斬りかかってくる。俺は横に飛んで避けようとするが、一瞬体が動かなくなっただため神酒の攻撃が掠り当たりする。

「あー、そうか。技名を言わなくても能力って使えるのか。水圧圧縮砲！」

距離をとってから魔法弾で攻撃する。今日の武器も水鉄砲だ。

ちなみに技名を言わなくても技を使えるのは俺もなのだが、俺の場合は技名を言ってからじゃないと魔法弾を作るのが遅れるんだ。条件反射みたいなものかな。

それと技名言わないと主人公っぽくないからな。

「反射！そして巻き戻し斬り！」

神酒は俺の水圧圧縮砲をはね返し、そして斬り上げようと攻撃してくる。

俺ははね返った水圧圧縮砲は避けられたが、斬り上げは直撃して軽く上に吹っ飛ぶ。

なるほど。巻き戻しは相手を飛ばすのが目的だから峰打ちなのか。しかも能力で正確な方向に吹き飛ばしてる！

「落下斬り！」

「二度も喰らうか！踏み跳び悟キック！」

神酒が追撃するが足を曲げて避ける。そしてそのまま踏みつけるかのように神酒の後頭部を蹴り、主人公らしく華麗にジャンプして着地する。

「ふん。俺はお前がどれだけ強いかは知らない」

「とう！」

「いてえ！待て待て！まだ台詞の続きがある！さっきの台詞だけで終わったら俺がアホみたいに聞こえる！」

人が喋ってるときは相手の目を見て黙って聞きなさいと言われなかったのか！ゲームでさえボスの台詞や過去話を聞き終えてから戦闘が始まるっていうのに！

「そんなものを聞く気はない！」

「ぎゃあっ！俺を何回斬る気だ！空気圧圧縮砲！」

「反射！」

「ぐは！」

神酒の連続攻撃に加え、近距離で使ったのにはね返された自分の技を喰らう。もう気分的に落ち込みそうだ！

「あ、あんまりだ。というか記紀弥は倒せたのに何でその部下に負けるんだ？」

「普通に考えたら接近が得意か遠距離が得意かによるな。…そうか思い出したぞ。いつだったかに記紀弥様はお菓子的事件の解決に向かった」

「水圧圧縮砲！」

「な？ぐう！」

話が始まったので攻撃してやる。さっきの仕返しだ、このバーカ。

攻撃を受けて倒れてる神酒に追加攻撃する。

「水圧圧縮砲！」

「停止！」

俺の攻撃は一瞬止められ、そのまま下に落下する。

「直進！」

水圧圧縮砲の水が地面に落ちる前に消える。次の瞬間、遠くで何かの悲鳴が聞こえる。

「な、なんだ？…タイヤキ屋が！」

後ろを振り返ると、さっきまであったはずのタイヤキ屋がばらばらになっていた。いいタイヤキ屋だったのに。

「一体何をした！」

「貴様の攻撃を凄い速さで直進させたのさ」

目の良い俺が認識できないとは何て速さだ！

「いや待て。神酒が動きを操れるのは一瞬のはずだ。何でタイヤキ屋まであの速さで飛ばせるんだ？」

「一瞬で十分だ。銃の弾だって同じだろう？撃つ瞬間に速度が高まり、撃った後も速度はあまり変わらずに敵に直進する。慣性の法則というやつだな」

小学生の割にはなかなか賢いじゃないか。

「それにしてもタフだな。そっちがよければ寺の手伝いに欲しいくらいだ」

「人手不足か？」

「ああ。一人問題ある幽霊が居てね。そいつが寺の雑用係を何人が連れてサボりにいくんだ。まあ能力が様々なことをサボれる能力だから仕方ないことかもしれないが」

様々なことをサボれる能力か。…いいなあ。

「ふーん。寺のほう手伝おうか？」

「え、いいのか？」

そりゃあこのまま斬られ続けるよりは何倍もマシだ。

「どうせタイヤキ代は返せないからな。それに記紀弥に誘われてたから、いつかは行くつもりだったし」

「そうか、それは助かる」

「その代わりというのもなんだけど、この勝負は俺の勝ちにしてくれないか？」

このまま勝負が続いてれば俺が勝っていたかもしれないからな。それに手伝いが物凄く大変な可能性もあるからこのくらいは認められるべきだ。

「…まあいいだろう。じゃあ送るぞ」

「え？」

「直進」

能力で送るのだと気づいた時には既に空高くにいた。

「く、高山病になりそうだな」

そう発言したつもりだったが音速より速いのか、自分の声が聞こえなかった。

横を見ると神酒も同じ速さで飛んでいる。

そして次の瞬間には俺達の飛んでいく動きの向きが斜め下になっていた。

く毬の島く

地面にぶつかる直前に動きが一瞬停止し、普通に地面に着地できた。

「着いたぞ」

「怖すぎるぞ！本気で地面に突っ込むかと思った！」

しかしあれだけ直前で止められるということは、普段からあの方法で移動しているのか？でも記紀弥は船とか言ってたけどなあ。

「本来なら地面をすり抜けるんだが、悟は幽霊じゃないんだろう？」

「人としても主人公としてもまだ先は長いぞ！」

別に幽霊の能力を習得してもいいが、有効活用できる自身はまったくない。それどころかやってもいない覗き疑惑をかけられそうな気がする。

「記紀弥様から言っていたんだが、夏にコートを着ているのか？」

「ああ。それは当然だ」

「何でだ？暑いだろ？」

俺は年がら年中コートを着ている。だがそれは俺の家の風習がコートを着ることだったのが原因であり、俺自身のせいではない。

噂では赤ん坊の頃から着せられていたとかいう話もある。それが原因なのか、今では長い間コートを着ないと体調不良に陥ることもたまにあるほどだ。

…まあコートを着る理由の半分は俺の趣味でもあるわけだが。

「暑いけど慣れてるなあ。理由は俺に似合うからだ。俺の武器は銃系統だしな」

「ああ、確かに似合ってると思うよ。主に水鉄砲しか似合っていないけど」

むむ、なんだかバカにされているぞ。

「このやろー、水かけて服透けさせるぞ。そして神様に見られる」

「反射して悟の服が透けるな。見る奴が居るかは知らないが」

「この季節に水浴びしてたまるか！」

風邪とかひいたら薬代とかで所持金が減るじゃないか！

「到着。ここが記紀弥様の住んでいる毬の寺だ」

「ここが？」

神酒に連れて来られた場所はとも見ても寺ではなく、忍者屋敷のような二階建ての大きな家だ。途中にあった門には表札があつたし。

「俺は小さな一階建ての寺を予想してたんだけどなあ。最近の家は寺を内装してるのか？」

「そんなわけないだろう。この家は寺を守る為に建てられたものだ。寺を囲むように作られてるだけで、家の中に寺を内装してるわけじゃないぞ」

「あ、そうなのか？残念」

寺以外にも塔や洞窟が内装してあつたら面白いと思うな。俺は絶対に住みたくないが。

「……………ようこそ毬の寺へ。本当に来るとは思っていませんでした。神酒も気が利くようになってきましたね」

「ありがとうございます」

神酒に連れてこられた部屋には記紀弥が待っていた。

「遊びじゃなくて雑用かなにかの手伝いにきたんだけどな」

「……………あら、そうでしたか。せっかく来ていただいて申し訳ないのですが、神酒が遅いから私が終わらせてしまいました」

おお、偉そうな立場だから雑用は部下任せだと思ってたのに、ちゃんと自分もしてるのか！

「……………とりあえず神酒、頼んだタイヤキを悟さんにも分けてあげなさい」

お、ラッキー！公園で結構食べたけど更に食べて良いのか！

「それは駄目です記紀弥様！このアホはすでに私達のタイヤキの多くを盗んで食べたんですよ！」

「……………それは貴方の管理にも問題はありません。それに神酒のことだからやり返したんでしょう？」

お、この戦鬭の話題がきた！さっきの勝負は俺の勝ちにする約束だからな！俺の強さを知って記紀弥も俺の実力を思い知るだろ！

「はい。余裕でした」

「そういうことだ！…って、ちょっと待て！俺に勝ちを譲る約束はどうなった！」

「雑用は記紀弥様が終わらせたからあんな約束は無効だ！」

た、確かに雑用をやるかわりに勝ちを譲ってもらったけどさ！

「…………まあまあ。それよりタイヤキを食べましょう。神酒、タイヤキは？」

「タイヤキはこの宝箱にあります。…あれ？」

神酒が急に立ち上がって辺りを見回す。どうやらタイヤキを入れた宝箱を探しているようだ。

「おかしいな。悟、タイヤキを入れた宝箱は？」

「俺は最後に公園で見たぞ」

「しまった、忘れた！」

おいおい、宝箱が置いてあったら間違いなく開けられて中身を取られるぞ。…いや大丈夫か。普通の人なら賞味期限を気にしてまず食べないな。

「ちょっと取ってきます！」

そういつて急いで部屋を出ていく神酒。俺の分のタイヤキがなくなる前に取り返せると良いんだが。

「……………それではお菓子でも食べましょうか。それと悟さんにお話があります」

記紀弥が押入れから、神酒が公園でなくしたはずの宝箱を取り出す。

「あれ、その宝箱はなくしたやつ？」

「……………これはこの寺にいくつがある保存に優れた宝箱です。このお菓子のことは神酒にはどうかご内密にお願いします。つまみ食いするでしょうから」

普通に考えたら上司のお菓子を食べることはないと思うんだが。

「まあお土産次第だな」

押入れの中にいくつかの宝箱が見えた。ということはお菓子はいくつかあるということ。それなりのお菓子は貰わないとな。

「……………主人公様もお人が悪い。ちゃんと例の物はここに」

記紀弥が宝箱から黄金に輝くコインを取り出す。

「ほうほう。これは良いものだ。記紀弥、お主も悪よのう！ふははははは！」

「……………いえいえ主人公様ほどではありません。うふふふふつ」

まるで主人公ではないような台詞だが、別に悪いことをしているわけではないので問題ない。誰かに斬られるようなこともないだろう。

「ほう。嫌な予感がしてすぐ戻ったんだが、予感は正解のようだな」

「……………何奴っ！」

後ろを振り返るとそこにいたのは神酒だった。宝箱は持ってないが。

「もう私の顔を忘れたのか？…ああ時代劇か」

「……………その顔は、神酒！」

このタイミングで俺と記紀弥は土下座をする。斬られるのが嫌なので一応は誠意を込めてあるぞ。

「記紀弥様、頭を下げる必要はありませんよ。二人とも平等に罰を与えますから」

お、記紀弥が相手でも戦うのか。ってか俺まで斬られる！お菓子隠してたのは記紀弥なのに！

「くう、実のヒーローがこんなタイミングよく現れるはずがない！正義の味方を騙るお菓子好きの悪党だ！出合え、出合え！」

「お菓子と聞いて来てやったわ！さあ、お菓子はどこ！？」

俺の言葉で集まったのは海岸で出会った幽霊のキールだけだった。

「あ、神酒。頼まれた宝箱は倉庫に入れといたわよ。…あれ、そのコート男は悟じゃないの。お菓子くれるってのはあんたなの？」

「それどころじゃない！お菓子の恨みで斬られる！」

俺は既に公園で斬られたのにまた斬られる！

「お菓子の恨み？ああ、神酒ね。でもあれだけタイヤキ食べといて、まだ恨むほど食べたりないの？」

「あ！バカ！」

おや、キールが逆転のチャンスくれたぞ！

「…………キール、その話を詳しく」

「さっき寺の前で神酒に会って、宝箱を寺の倉庫に運んでおくようにいわれたのよ。タイヤキ一個の報酬で。そのときに宝箱のタイヤキを一つ私にくれて、残りを全部食べてたわ」

そしてキールはそのときに貰ったであろうタイヤキを取り出して食べる。全員の視線が神酒のほうを向いている。

「私は宝箱を運んで疲れたから寝てくるわ。じゃあね」

堂々とサボリ宣言をしてキールが退場する。

「すみません、記紀弥様！お菓子の甘そうな誘惑に我慢が出来ず、ついつい食べてしまいました！」

謝罪の言葉を述べつつ神酒は土下座する。完全に立場逆転だ！やっぱり主人公は勝つ！

「……………神酒、頭を下げる必要はありませんよ」

「記紀弥様…」

神酒は安心していているようだが、少し前の神酒の発言を考えれば罰は普通にありだな。

「……………徹夜でくすぐりの刑はどうでしょう？」

「良いんじゃないか？眠いけど笑って眠れないってのは結構辛いかな」

「そ、そんな姿を他の幽霊に見られるわけにはいきません！」

確かに他の幽霊の上司的な立場だから他の幽霊に任せるわけにはいかないのか。

「……………この部屋でやるから大丈夫。鍵も掛けれるし防音だから」

忍者屋敷みたいな割には高性能だな。でもこの部屋は入り口が一つみただから大丈夫か」

「それだと記紀弥様の睡眠に影響が出ます！」

「……………たまには良いじゃない。そうだ、魅異さんにくすぐり機を作ってもらいましょう！」

「そういえばこの島には勇者社があるのか。多分今から取りにいけばあると思うぞ」

魅異のことだから先読みして、すでに完成させてあるだろう。

「わかりましたよ。諦めて罰を受けます」

「ははは、残念だったな。…ところで記紀弥、この金貨みたいなのは本当はなにだ？」

「……………金箔で包んであるチョコです。美味しいですよ」

金箔だけ剥がして売ったらいくらくらいになるんだろうか？

「そういえば話とか言ってたっけ？」

「……………そうでした。神酒、少し下がっていて」

「はい」

部屋を出て行く神酒。俺にだけ話したいことなのか？

「……………最近特星内で降っている黒い液体については知っていますね？」

「ああ。熱を吸収するとか言うやつだろ。おかげで秋の季節が感じられないよな」

本来ならば外を散歩したくなるような時期なのだが、原油がコーヒー的な液体が温度を奪うせいで寒冷化現象といえるほど寒いのだ。

その寒冷化現象はなんと俺の財布にまで及んでいる。普段は節約してお金を使っているのだが、生活する人数が二人に減ったので、わざわざ高級寿司を食べたりと無駄遣いしてしまったのだ。

このお財布現象は、雑魚ベーと雨双が事件に巻き込まなければ発生しなかった。よって俺の財布の中が寒冷化状態なのは、この黒い液体が原因といえるかもしれない。いや、間違いない！

「……………その液体の発生源が瞑宰京へ向かっているらしいのです。恐らく悟さんの持っているカセットが目的でしょう」

「そうか。って、何で記紀弥がそのことを知ってるんだ？」

俺でさえこのカセットのことを知ったのは数ヶ月前だ。その時点でカセットのことを知っているのはごく僅かの人数だった。

「姫卸婆さんのことだ。海岸を調査に来た少女には教えてるんだろ。確かあの海岸は黒い液体が最初に降った場所だからな」

うわ、ボケ役！急に話しかけると驚くだろうが！

「……………あら？さっき聞こえた声は黒悟さん？何故あなたが悟さんと？」

「黒悟？ボケ役か？って、ボケ役の言葉が聞こえるのか！」

どうやら記紀弥はボケ役の言葉が聞こえるらしい。さらに記紀弥とボケ役は知り合いの可能性があるようだ。黒悟はボケ役の名前か？

「げ、気づかれただど！？さすがは毬の寺のトップ！個人的な会話

を聞かれて俺は恥ずかしいぞ！…でも魅異に聞かれるのだったら恥ずかしくないなあ」

そもそも個人的な会話なんて一切してないだろう。

「……………この場には居ないのですか。異次元的などこかですか？」

「ふはははは！よくぞ見破った！姫卸婆さんやアミユリーの住んだ場所さ。住所は当然違うがな」

そういえばアミユリーは異次元の場所に住んでたし、姫卸の婆さんも波動でワープした海岸に居たな。

「で、姫卸婆さんから聞いたという俺の予想はどうだ？」

「……………正解です。海岸を監視している姫卸さんなら何か知ってると思いますして」

「姫卸の婆さんがしてるのは監視という名の覗きだけだな」

姫卸の婆さんの場所を知ってるってことは、記紀弥も覗かれたことがあるのか？

「記紀弥、ツツコミ役が覗かれたことあるかだって」

わざわざ言う必要はないだろう！俺が雑魚ベーと同じ扱いされたらどうする！

「……………悟さん。そのようなシーンを思い浮かべるのはどうかと

思います」

「思い浮かべてないって！水着姿すら今頑張ったけど思い浮かばなかった！」

思い浮かばないというより、思い浮かばせる気分じゃないというほうが正しい。メリットが感じられない。

「悟、記紀弥のコート姿はどうだ？」

おー、思い浮かんだ！うん、コートは着る人を選ばない。誰が着ても似合うものだな。

「コート姿なら思い浮かぶようだぞ」

「……私は基本的に和服ですが今度試してみます」

和風マニア二号か。ちなみに一号は羽双だ。

「さあさあ本題に戻りなさいって。魅異にはどんな服装が似合うかだっけ？どんなのも似合うよー！」

戻る気一切ないだろ！

「えー、原因が近づいてるとか言ってたっけ？」

「……ええ。到着予想時刻が大晦日。敵は新年ぎりぎりにカセットを取り返すつもりかもしれません」

「カセットの力で俺と魅異の結婚式を盗撮するつもりだな！」

一体誰が何のためにそんな無駄なことをするんだ。そもそも結婚式の予定なんてないだろ。

…でも本当に何が目的だろうか？まさか全世界のコートを買収した後に全部重ね着するつもりか！？良い奴じゃないか。

「……………ここからが大切なのでよく聞いてください。敵はカセットを狙って悟さんの元へ現れるでしょう。その前に対策会議をおこなうので、悟さんにはぜひ参加してほしいのです」

うーん、確かにカセットを持ってるから会議には出るべきだろう。でも主人公としての立場と出番が薄くなるのは困るなあ。

「俺は出たほうが良いと思うぞ？魅異から聞いた話なんだが、今回の事件で悟の隠された力が発揮されるとか言ってた」

え、そんな主人公らしい展開が俺に！？でも俺って確かに秘めた力とか持つてそんなオーラが全開だもんなあ！

「はいはい。その秘めた力と主人公オーラは皆に見せるといいねー」

「……………なるほど！正義の心に目覚めた悟さんが世界を救う為に自らを犠牲に戦うんですね！」

そう、記紀弥の言うように敵は世界のコートと人類を脅かす大悪党！しかし正義感の強さゆえに俺は自らを犠牲に自爆特攻をしかける！そして敵の捨て台詞と共に爆発に巻き込まれて散るのだった！

「見事にツッコミ役が死ぬじゃないか」

そこは数カ月後に戻ってきて涙の再開とかそんな展開で大丈夫！

「ふふん！この主人公の有志を見たいなら仕方ない！対策会議に参加決定だあ！」

「……涙無しでは見られない感動的な展開がありそうですね！あ、涙が出てきました」

「……なんだか頭痛がしてきた。悪いが先に帰らせてもらっぜ」

その後、俺と記紀弥で二日くらい徹夜で感動的なストーリーについて語り合った。そして寮に帰ってアミューリーに説教され、お土産を全部食べられたのだった。

更に数日後、何日か連続でくすぐりの刑を受けた神酒が立ち直れないため、手伝いに来てほしいと記紀弥から要請があったのだった。

六話 アルティメット少女と黒色の主人公

@ 悟視点 @

寒さが身に染みる冬の季節。特星は冷凍庫のような物凄く寒い冬を迎えていた。

そんな日なのに外へ出かける者などほとんど居ないだろう。居るとすればこの俺のように主人公オーラとコートで寒さを守る者だけなのだ！

ちなみにアミユリーには子供用のコートを着せてある。

「よし！準備は良いかアミユリー！」

「完全なんだってば！」

こんな日に何で外出するかというと、対策会議が今日なのだ。

日本ではクリスマスモード全開であるこの日こそが対策会議の日なのだ！本当は家でアミユリーとゲームでもしていたいが、皆の命には代えられない！

「じゃあいくぞ！」

そういつて勢いよくドアを開けようとする。

「…あれ？開かない？」

しかしドアは押しても全然開かなかった。ちなみに内側に開くドアではないので引いても無駄だ。

「ふん、主人公の道を遮れるわけがない！アミューリー隊員、やれ」

「了解。強制的に内側に開くんだってば」

アミューリーが磁力を操り、扉が内側に開く。

「悟隊長、目の前が壁だってば」

アミューリーが指差す先に見えるのは一見白い壁に見える。だが冬であることを考えるとその正体はすぐわかった。

「あ、アミューリー！それに触るな！」

恐らく雪が物凄く積もって壁のようになっていているのだろう。そしてあれに触れると家の中に雪が流れ込むことは目に見えている。

「でも、このままじゃ出られないんだってば」

「…よし！今日は諦めてゲームでもしよう！」

この雪じゃあ会議どころか会議場所にだっていけない。そもそも場所は聞いてないし。

「そうはさせないよ。ほほほ」

諦めようと思ったら、姫卸の婆さんがいきなり押入れから出てくる。迎えに来てくれたのは良いのだが、出入り口を作るならもっと別の

場所にして欲しかったな。雰囲気的に。

「姫卸も作戦に参加するんだっけ？」

「そりゃあ当然。この寒さが続くと、夏に海水浴する少女が減るからねえ。ほほほほ」

事件の犯人を倒す前に姫卸の婆さんを倒すべきじゃないだろうか？勝てるかどうかは別として。

「さあこつちだ」

姫卸の婆さんが中に入っていくので俺達も後を追う。

「……………来たようですね」

「そうですか」

会議場所に居たのは記紀弥と羽双だった。この二人は和服同盟か！

ちなみにこのメンバーの中で和服が羽双と記紀弥と姫卸の三人。コートが俺とアミユリーの二人だ。今回だけは和服派のほうが多いようだ。

「ほほほほ。全員そろったから会議を始めようか」

「質問だつてば。こんな人数で足りるんだっけ？」

アミユリーが手を上げて質問する。だがそこまで心配しているようでもなさそうだ。

ちなみに人数は俺達を含めても五人。主人公の俺に百人分の戦闘力があるとしても、敵は国にダメージを与えるクラスの敵だ。十分とはいえないような気がする。

「大丈夫大丈夫！六人とはいえ、この面子ならまず全滅はないよ！ほほほほ」

「あれま。何で俺までカウントされてんだか」

どうやらポケ役の台詞は姫卸と記紀弥には聞こえるようだ。

「それでどういう作戦ですか？なんなら今すぐにでも僕が敵を撃墜しましょうか？」

「…………私としては正々堂々と正面から立ち向かうのが良いかと思っています」

「ほほほほ。少女権の優先により正面突破に決定だよ」

なんだかこの中で俺と羽双だけ不利な気がする。

「まあ僕は報酬がもらえればそれで良いですけどね」

「何か貰うのか？」

「和服を数着と和菓子を少々いただく予定です」

さすが和風好き！貰う物が和風チックじゃないか！

「なら液体を降らす乗り物を破壊する班と、犯人を倒す班に分かれるのはどうだっけ？」

「少女権により決定よ。悟はカセットを持ってるから犯人を倒す班だけだねえ。ほほほ。ちなみに私は送り向かいと会議の進行役だけの非戦闘員だよ」

姫卸の婆さんはどう考えてもその辺の戦闘員よりは戦力になるだろ。

「……私は犯人退治班にしますね！感動的な場面を見逃すわけにはいきません！」

「私も皆を取り返すために犯人と戦うんだってば！」

「では乗り物の破壊は僕一人でおこないます」

ということと俺は意見を出す暇もなくメンバーが決定してしまった！まあどんなポジションであっても勝つのが真の主人公というものだ！この状況で勝ち抜いてやるうじゃないか！

猛烈な寒さと大吹雪によりありがたみのない大晦日がやってきた。俺達五人のいる場所は特星エリアの平原である。…雪のせいではと

んど雪原であるが。

こんな吹雪の日に敵は本当に来るのだろうか？

「それにしてもなんでわざわざ特星エリアまで来たんだ？現代エリアでも十分だろうが」

「…………敵の飛行物が凄く大きいらしいですよ。私達の住んでる島より大きいとか」

記紀弥たちの住んでいる毬の島はそれほど大きくはない。それでも勇者社や寺や屋敷が余裕で建つ程度の大きさはある。

なるほど。そんなサイズの飛行物が落ちたのであれば瞑宰京へのダメージはなかなかだろう。

「しかしそんな大きさであるのに目撃例は少ないそうです。島より大きいという情報も姫卸さんの波動で感知できたものですからね。僕たちに見えないように、ステレス機能でもつけてるでしょうね」

そのくらいの大きさだったら俺が見てるはずだからな。

「ん。あれじゃないか？」

空を見上げていると黒い点々が見えたのでそのほうを指差す。全員がそのほうを見る。

「どれどれ。…なるほど。確かにそのようだねえ。よくこの距離なのに裸眼で見えるねえ。ほほほ」

「見えないんだってばー」

姫卸の婆さんは波動で見えたようだが、それ以外の人物はまだ見えないらしい。この吹雪の中じゃ視界が悪いから仕方ないが。

しかし見えるのは降っている液体だけだ。あれを降らせている乗り物的なものは見えない。やはりステルスの機能を使ってるんだな！

「こつちの方向ですね？ちょっと待っててください」

そういつて羽双は消える。恐らく時間を操って移動したのだろう。

「ゴオオン」

液体の降っていた方向から音が聞こえたので見てみる。すると、さっきまで見えなかったものがみえる。あれは乗り物じゃなくて要塞！？

「……………何か見えます。けどあれは何でしょう？」

「遠すぎて判りにくいんだってば。でも恐らく羽双が乗り物を壊したんだってば」

二人はようやく要塞が見えた程度で、要塞がどうなっているかわからないらしい。

でも俺には要塞の形がどんどん崩れていくのがわかる。強烈な一撃を喰らったのだろう。

「終わりました。それではやるべきことはやったので帰ります」

「ほほほ。お疲れ。土産は勇者社のほうに頼んであるよ」

姫卸の婆さんの波動で羽双は先に退場する。その十数秒後に要塞は墜落した。

「羽双は最後まで居ないのか？」

「そりや要塞を落とす係だからねえ。さて、要塞の場所まで送ってあげるよ」

姫卸の婆さんの作った波動に入り、敵の要塞へと向かうのだった。

「壊滅した微科学な要塞」

波動を通って要塞まで来た俺達。姫卸婆さんは勝負が終わったら迎えに来るということではここにいない。

要塞なので科学チックなものを予想していたのだが、機械と西洋の城をくつつけたような要塞だ。大体がファンタジックで微妙に科学風といった雰囲気がある。

「……………これでは自爆して海に墜落するシーンが見れません。少し残念です」

「ふふ、それは残念だねえ。でも要塞を落とされた私は凄く残念」

瓦礫の中から一人の少女が現れる。普段見る小学生よりも幼いようにだし、小学生の中学年くらいか？

「でも君達はカセットを持ってる。これは不幸中の幸いだろうね」

カセットの売値が数億だとしても、あの要塞を作るにはそれ以上にコストが掛かるよな。どう考えてもそんだと思うんだが。

「お前がアルテか？」

「アルテじゃないっ！その名前は記憶喪失の間使ってただけ！私の本当の名前はアルティメットだよ！」

記憶喪失だったとかそんなこと急に言われても知らない。まあ俺達も相手の都合を考えずに勝手な自己紹介してるけどな。

「長いからアルテでよくないか？」

「……………音楽の符号に似たような名前があつた気がします」

「確かフォルテだってば。フォルティッシッシシモとかあるって噂だってば」

アルテの名前もそんな感じにすれば呼びやすいんじゃないか？

「普通に呼びにくくないか？」

多少は呼びにくくても喜んで使いそうな名前だろ？音楽関係で覚えやすそうだし！

「俺は主人公の悟だ！それよりアルティッシシシシモ！お前が数ヶ月間撒いていた液体をさっさと消してもらおうか！」

「普通に言いにくそうだね！？だから私の本名はアルティメットだつて！…なんで皆は本名で呼ばないのかなあ」

本名で呼ばれないのは名前が長くて覚えにくいからだと思うぞ。名前のセンスはそこそ良いと思うんだけどなあ。

「まあいいや。渡す気はないようだから、私は君達の星のルールに乗っ取るよ。そう、気絶させて奪うまで！パーテパニングの大雪！」

これまでの大吹雪が収まり、雪だるまサイズの雪玉が降り注ぐ。

「いたっ！固められてるぞ、この雪玉！」

「……………しかも凄い量です！」

「私に任せるんだってば！」

アミューリーがそう言うと同時に俺の体が浮き上がり、空中に固定される。その下にアミューリーと記紀弥が逃げ込む。

いたたっ！どういつつもりだ！？

「悟と空中の座標に違う種類の強力な磁石属性を与えたんだってば。だから悟が空中にくっついてるんだってば」

「……………すみません悟さん。攻撃の手段が思いつくまで耐えてください」

確かに俺は二人より大人だし主人公だけど！こんな扱いはあんまりだ！人を盾にするなんて酷いぞー！

「……………有利、環境の変異！」

記紀弥の使った技で雪を降らせていた雲が無くなり晴れてくる。確か記紀弥の能力は有利不利を操るとか言ってたな。

温度が少々上昇したため、敵の雪玉は地面に落ちる前に割れてしまふ。

さて、そろそろ敵にダメージを与えないとな。

「そうだ。アミユリー、アルテに向かって俺を飛ばしてくれ」

「わかったんだってば！それっ！」

磁力の速さが加わった俺のキックで仕留める！

「おっと。危ないね」

しかしアルテは空を飛んで回避する。

「飛べるのか！どあっ！」

吹っ飛んだままだった俺は瓦礫の山となった要塞に突っ込む。

「…いてて。ブレーキとかで止めてほしかったな」

「ふふふ。三人がかりでこの程度なんて大したことないね。それとも私が強すぎるかな？」

「いやいや、残りの二人はともかく俺は全然本気じゃないぞ。二人も大した技は使ってなかったけど。」

「さっきも言ったが俺は主人公だ！そして主人公の力は盾となる仲間がいて初めて発揮されるもの！そう、主人公は仲間と協力することで真の力を発揮するんだ！」

それなのにこの程度の戦闘で勝手に実力を決めるなんて愚かだ。

…でもあの二人を盾にすると後で仕返しされそうだしなあ。

「それは協力じゃないと思うけど…。まあ仮に君達が協力しようがしなかるうが私には遠く及ばない！これで終わりだ！ムクロウン吸収液！」

アルテが手を掲げると空中から黒い液体が出現し、滝のようにあたりに流れ出す。その液体で二人は遠くへ流されていく。

しかしその途中で急に出現した波動に飲み込まれていった。

「姫卸に救出されたか。うおっ！」

液体が流れてくるので瓦礫の山を登って逃げる。少し足に付着したが、特に冷たいわけではない。しかし付着部分がどんどんと寒くなっていく。

「何だこれ！？威力は大したことないのにやけに不快だぞ！」

黒い液体で温度が下がる効果？あれ聞き覚えがあるぞ。

「特星に撒いてたのってこれか？やること派手なのに効果は地味だなー」

「それは当然。温度を奪うのはあくまでオマケに過ぎないからね」
温度を奪う以外にも効果があるのか？俺はてっきりコートを流行らす為に、温度を下げてるのかと思ってたが。

というかアルテが説明モードに入っただけから攻撃が止まってる！ちょっとでも無駄話が続けて時間を稼ごう！助けとかはこないだろうけど！

「それならお前の目的は何だ？要塞一つ作るほど凄いことなのか？」

「ふふ、言われるまでもなくその通りだよ。今では時代遅れとか思われているけど、世界征服が私の目的。まずは特星を含むこの宇宙を征服し、その後に別の世界を乗っ取りにいくつもりだよ！」

いろいろと話が飛びまくっているが、とりあえず特星は最後に回すべきだろう。勇者社の社長が絶対的な確立で関わってくるぞ。

「秘書の話では、魅異は既にこいつに会ってるとか言ってたかったか？」

秘書つてのは几骨さんだな。確か魅異がアルテをからかいに向かったとかなんか。

「さあ、次こそ最後だ！ムクロンウン吸収液を喰らえ！」

「え、不意打ちか!？」

ボケ役と会話をしている隙に前方から川のように流れてくる黒い液体。

「なんのっ!」

反射的にジャンプして一瞬回避する。しかし努力は実らずそのまま黒い液体の川に落ちて流される。体中の温度が無くなっていくのがわかる。

「その黒い液体って何味だ？」

ボケ役が何かを言っているがそんなことを気にしている場合ではない。俺は今までの液体が原油かコーヒー的な何かだと思っていたが、やけに甘いのでどうやら違うようだ。

…この甘さはどこかで食べた気がする。何かのフルーツで食べたはずだ。

「どっっ!」

「痛っ!」

流されていた俺は森の木にぶつかって止まる。顔面から直撃してしまった。

「水流滑り台みたいで楽しそうだな」

木に顔をぶつけるような滑り台が楽しいわけないだろう!

ちなみにさつき痛いって言ったが、実際は寒すぎて痛くなかったぞ。雰囲気出す為にちよつと言ってみただけだ。

「これを取り返したんだから私の勝ちだね」

「あ、カセット取られたぞ」

何かもう疲れた。というか敵は何でカセット一つのためにここまでやるんだ？小学生がこんなことするなんて大人気ないとは思わないのか？

「寒くて喋れないからって思考で文句を言ってもなあ。まあこの星の場合、大人気ないのは大人だけで十分だな」

「凍えて口も利けないのかな？大丈夫。私がこの星を乗っ取ったら元に戻してあげるから安心しなよ。私の操る世界は夢と希望でいっぱいだよ」

夢と希望でいっぱいか。なら一兆セルに埋もれてみたいな。

「潰れるのが夢か？」

一兆セルくらいのお金がほしいってことだよ。コートとか半袖コートとか買いたいからな。

「へー。何色だ？さあ何色だ？」

それは当然今着てるコートと同じ色だ。…ああ！

「そっだ！黒色だ！」

「うわあっ！？」

何か大事な感覚を思い出して立ち上がる。

ちなみに普段は濃い緑のコートを着ているが、現在のコートは黒く染まっている。

「お、驚いたあ。…あれ、どうして立ってるの！？」

一兆セルか。確かに大金だけど俺の夢はこの程度じゃないんだ。この俺は主人公！主人公らしい主人公といえば戦隊が必要不可欠！ならば主人公である俺が戦隊を作るのは当然のことだ！

「そして主人公であるツツコミ役の色は黒。悟ンジャーの一人悟ンジャーブラックだ」

「俺が立ってる理由は俺が主人公で悟ンジャーブラックだからだ！」

ちなみに俺は子供の頃に悟ンジャーブラックに会ったことがある。今の俺とそっくりだったけど黒くはなかったな。

「ならツツコミ役は二代目だな」

いや、俺以外に主人公はいないからあれは偽者だ。そもそも特星が作られる前で、俺が地球に住んでた時だからなあ。

「どう見てもムクロウン吸収液で真っ黒だよね。…どんなトリックなんだろう？」

「そうそう。その黒い液体なんだけど、バナナの黒い部分の味がするぞ。凄く甘い」

ブラックバナナジュースとして家に持ち帰るのもありだな。

「主人公は正義！そして俺は主人公であり正義の味方だ！必殺、姿隠しの大砂！」

アルテに向かって砂を投げつけ、その隙に近くの木の裏に隠れる。アルテは空中に居るが、悟ンジャー状態なので普通に届く。

「あれ、逃げられたのかな？なら今のうちだね！」

アルテはカセットを分解して中に入っていた雑草らしきものを飲み込む。食べ物はちゃんと噛まないと駄目だろ。

「…うわ、不味いなあ。バナナの皮みたいな味がする」

（バナナの皮は相手を転ばせるためのものだろうが。食べてどうする）

「あ、そこに居たんだ」

アルテが木の裏にいる俺に気づく。ポケ役の声が聞こえたらしい。…さっきまで気づいてなかったポケ役に気づいたってことは、それだけパワーアップしたってことか！？

「気づかれたなら仕方ない！必殺、悟ンジャー蹴り！」

俺は頑張つて敵の位置までジャンプして、そのまま回し蹴りで攻撃する。しかしアルテはもつと上空に飛んで回避する。

「くらえー！魔学科法ホノー！」

アルテを中心にかなりの数の炎が周辺に放たれる。一部が木に降り注いで森が燃え出す。

「熱いつ！防火コートだけど熱い！」

アルテに攻撃を当てそこねた俺も被害を受ける。く、コートを火災保険に入れとくべきだった。防火コートだから保険金は貰えないかもしれないが。

「なんとか着地！ふー、危なく美味しく焼けるところだった」

「燃えかけるなんてしょうがないなあ。魔学科法ミズ！」

今度は滝だと思えるくらいミズを出すアルテ。黒い液体の時のように流されかける。

「なんの！必殺、全力水泳！」

しかし滝登りの如く泳いで流されないようにする。体に付着した黒い液体は取れないが、逆に悟ンジャーとして戦い続けられる！

「俺も少しだけ援護してやるぞ。子供が懂れる空飛ぶ風船！」

その辺りから数え切れないほどの風船が出現し続け、その風船は空に飛んでいく。そして空はあつという間にカラフルな風船で見えな

くなる。

「うわっ！何この風船！？このっ！」

空中のどこからかアルテの声が聞こえる。どうやら風船が邪魔で行動できないようだ。おかげで水流が止まった。

「その風船はなかなか割れないぞ。ツツコミ役はさっさと風船に乗れ」

ああ！ちよつと怖いけどな！

この風船には紐がついていないようなので上に乗るしかない。そして不安定な風船に乗るのは非常に怖い！

「もー、邪魔しないで！魔学科法コーセン！」

アルテがどんな技を使ったのかはよく見えなかったが、何本かのレーザーが俺の近くを通り過ぎた。そして数秒後に地上のほうから壮大な爆発音が聞こえる。

怖っ！爆発するレーザーとか本当にあったのか！

「ツツコミ役。さっきの光線で周辺の森の半分以上が壊滅してるぞ。以上、姫卸婆さんの波動テレビの映像でしたー」

半分以上が壊滅！？どれだけ威力が高いんだよ！そしてお前はここに着てるのか！？

「いないなあ。空中の風船に紛れて隠れているのかな？」

アルテがあっちこっち見回す。ありがたいことにこっちは気づいていないようだ。

「不意打ちあるのみだな。悟ンジャー蹴り！」

上空から踵落としのようにアルテを蹴り落とす。

「うああっ！そ、そんなっ！多くの星で、力を、集めたのにっ…」

肩近くを狙うつもりがうつかり頭に直撃させてしまう。そしてアルテはそのまま地面に落ちていく。まあ特星だし、相手を気絶させたようなので問題はないだろう。

そして俺もそのまま落下する。

「…着地はどうするんだよ!？」

「はあ。後先考え無しだなあ、君は」

「え？」

横を見るとアルテが目覚まして落下している。とうにか浮いた状態の下に下りてる？

「魔学科法フワフワ」

そのまま地面に衝突した俺だが、地面が軟らかくて痛くなかった。

「アルテ。お前気絶したはずじゃ？」

「言うだけ無駄かもしれないけど、私はアルティメットだよ」

言うだけ無駄だな。おれは雑魚ベーに雑魚ベーの名前を定着させたんだぞ。…あれ、本名が思い浮かばないから雑魚ベーが本名か？

「あと私は気絶なんかしてないよ。勝負を中断する為にちよつと演技をしただけ。今の私が本気を出せば君なんかじゃ勝てないよっ！」

「じゃあ悟を倒せばよかったんじゃないか？」

主人公である俺がこんなやつに負けるわけないだろ！

「うーん、見えない君の言うとおりに倒すつもりだったんだけどね。でもよく考えたら恩人に近いって事に気づいたんだ」

まあこの俺は特星中の住民の恩人になる予定だからなあ！まだ実行段階じゃないけど。

「でもツツコミ役に恩なんかあるのか？」

「カセットを持ってたよね？あの変な槍の人からカセットを取り上げてただけでも、私はかなり感謝してるよ！」

そういえばあのカセットは印納さんから譲って貰ったんだっけ。

「あれって奪われたのか？」

「そうそう。帝国を作るためにレベルアップとか言って一方的に襲われたんだよ。負けてカセット奪われるし、もう二度とあの人には

会いたくないなあ」

俺もできることなら印納さんとは会いたくないな。あの人が何かを思いつくと高確率で悪い結果になるからな。躊躇なく辺りを巻き込むし。

「あ、それより黒い液体は？」

「すでに消しておいたよ。君も自分の服装を見れば分かるよ」

そういえば落ちるのに気をとられて気づかなかったが、服が完全に乾いているな。黒い液体も跡形なく消えている。

「でも特星征服はするつもりだよ。いつ開始するかは未定だけどね」

未定ならとりあえず今回の事件はこれで解決だな。黒い液体をどうにかするのが目的だったし、カセットがないのは残念だが結果的によしとしよう。

「凄い勝負だったね。二人とも大丈夫？」

「ん？」

聞き覚えのある声に後ろを向くと魅異がいた。ついさっき現れたんだろう。

「おお！魅異！俺に会いに来たかー！」

「正解といえば正解だね。久々に特星では大きめの事件だったから

お祝いに来たんだよ。姫卸たちや雑魚べーたちとお寿司を食べに行くけど皆行く？」

「行く！」

「行く！」

俺とボケ役は即答する。寿司を食べに行くなんて事はあまりないからな。ちなみに祝いごとに食べるものって寿司か焼肉しか思いつかない。

「うーん、魅異の誘いは嬉しいけど私はやめておくね。事件の首謀者だし私がいたらきつと気まづくなるよ」

「ほほほほ。そんなことはありえないよ！」

「うわっ！」

急に現れた姫卸にアルテが驚く。波動でワープしてきたようだ。

「食事中の少女はいわば和みの存在で場に多ければ多いほど良いもの！そこに居るだけで食事場所の見栄えが上がり食も進むからねえ！それに少女の残した分の食べ物を食べるイベントだって発生しやすくなるじゃあないか！他にも服に醤油をこぼしたのを拭き、そのときにちよつと胸を触るイベント！ご飯粒を取ろうとしたら少女に倒れこむイベント！ほほほほほ！最高だねえ！」

胸触ったり抱きついたりに関しては、姫卸の婆さんなら普段でもやってそうだけだな。

「前に少女と風呂でダンス踊ったって言ってたぞ。少女抱いたまま石鹸に乗ってスケートの如く滑ったとか何とかとも言ってた」

「ということはさっき言ったイベントもやりかねんな。アルテに行かないほうが良いと教えるべきか？」

「えっと。いいのかな？」

「先の短いこの私に少女の食事光景を見せてくれないかねえ？ほほ。それだけが私の生き甲斐なんだよ」

確かに生き甲斐ではあるかもしれないが、特星にいる限り先は長いだろ！

「じゃあ行こうかな。私もお腹すいたからね」

「決定だね。じゃあ出発だよ」

その後姫卸の婆さんの波動ワープで寿司屋に行って皆で寿司を食べた。珍しくおかしなことは発生せず、俺は悟ンジャーについてずっと語っていた。記紀弥以外は聞いてなかったが。

とにかくオチ無しで平和に今回の事件は幕を閉じたのだった。寿司は魅異が奢ってくれたからな。

「遠くに居る俺は寿司を食べられなかったぞ！…誘われたのに誰も迎えに来なかった」

あ、オチ有りだった。

七話 情けない襲撃と流れ星

@雑魚ベーター視点@

ナメクジやカタツムリの擬人化少女などに出会えそうな梅雨の季節。今日は雨なのに毬の寺に遊びに来ていますよおっ！

現在私は客室でお茶を飲んでいます。

「…で、縁側の二人はどういうことだ？」

怒った顔をして私の前に立っているのは神酒さんですねえ。神酒さんの指差す先は縁側で、雨双さんとアミューさんと記紀弥さんが滑ってますねえ。廊下を凍らせて。

「スケートごっこじゃないですかねえ」

「だからなんでこの寺の縁側でやっているんだ！氷を溶かしたり掃除させたり後が面倒なんだぞ！」

そういえば片付けは大体が神酒さんだったはず。それなら神酒さんが怒るのも仕方ありませんねえ。

しかし！この遊びは記紀弥さん公認ですよおっ！寺の持ち主が良いって言うてんだから良いに決まっています！

「そういうことなら私が掃除をしましょう。少女の雑用やお世話係として働くのも私の務めですからねえ！神酒さんは遠慮無しに滑って結構ですよおっ！あ、そこのお菓子食べて良いですか？」

「それは私のお菓子だから駄目だ！…まあ片づけをやってくれるのは助かる。私のお菓子はあげないが記紀弥様のでよければ少し分けてやろう」

え、それっていろいろと問題ありませんか？上下関係のこととか。

「許可なくもらって大丈夫なんですか？」

「ああ。記紀弥様は前に私のお菓子を勝手に食べてたし、その仕返しだから大丈夫だ。あむっ」

そういつてお菓子を食べ始める神酒さん。食べ物への恨みは怖いですねえ。ちなみに私はちよつと前にすでに神酒さんのお菓子を頂きましたが、気づかれると怖いので黙っておきましょう。

あ、記紀弥さんがこっちにきました。

「……………神酒、ちよつといいですか？」

「うぐつ、ごほっ！なんでしょうか！？」

咳き込みながらも食べてるお菓子を素早く隠す神酒さん。あの速さで隠したのであれば気づかれてはいないでしょう。

「……………さつき何者かに襲撃されかけました。なので襲撃を目論んだ者を倒してきてください」

急な経緯説明と目標設定ですねえ。襲撃の割には物音とか全然しませんでした。

「襲撃！？記紀弥様は怪我とかしませんでしたか！？」

「……ええ。しかし犯人には逃げられました」

一緒にスケートをしてた二人は無事でしょうか？…元気に縁側を滑り続けてますね。奥の二人が特に動じていない事から考えると、襲撃されたのに気づいたのは記紀弥さんだけですかねえ？

「なるほど。もう少し詳しい事情を聞かせてください」

「……私達はさっき縁側でスケートで勝負をしていました。接戦で誰が勝ってもおかしくない状況だったのですが、そのとき襲撃者が覚悟と言って私の前に飛び出してきたのです」

小学生の見所ある勝負を妨害する不届き物ですか。確かにそれは許しがたいですねえ。

「……結果、私は寺の縁側スケートチャンピオンの座を同着の二人に奪われたのです！…犯人は気づいた時にはいませんでした」

涙ながらに語る記紀弥さん。可愛いですねえ。さすがは寺の縁側スケートチャンピオンだったことだけのことはあります。どんな競技かは知りませんが。

「犯人が居なかったのは記紀弥様がふっ飛ばしたからでは？…ごちそうさまでした」

記紀弥さんのお菓子をこっそり全部食べ終わった神酒さん。結局私は食べる暇がありませんでした。

「……とにかく私はチャンピオンの座を奪回しなければなりません。なので神酒が犯人を倒してください」

「有休が余ってるので今日は休みます。前に記紀弥様に食べられた分のお菓子を買わなければなりませんので」

部屋を出て行く神酒さん。お菓子のつまみ食いに気づかれる前に逃げるようです。

「……………神酒は駄目ですか。雑魚ベーさんはどうでしょうか？」

「任せてください！必ず犯人を倒しますよおっ！」

「……では代わりにお願いします。もし必要であればキールを連れて行ってください。キールだけは有休を使い切ってますから」

こうして記紀弥さんから任されたこの事件ですが、私は無事に女子小学生の敵キャラと会うことが出来るのでしょうか？

「記紀弥様も酷いなあ。有休無いことを利用するなんて」

うつ伏せのまま愚痴を言っているのはキールさん。堂々とスケートをしてない縁側でサボってます。有休無いのにサボるほうが酷いと思いますけどねえ。

「悪いけど私は忙しいの。暇つぶしと減給対策で」

「犯人倒せば臨時ボーナスなどが出るかもしれませんねえ」

「面倒で非効率ねー」

この人はお金が餌でも食いつきませんねえ。悟さんあたりなら確実にお金に食いつくの。

「… 楽な仕事しか任せなくなるかもしれないよ」

「よし、さっさと行くわよ！」

楽な仕事でも大抵はサボるのに喜ぶキールさん。… 今更ですけど一人の方が良かったような。

「行き先がわかりませんねえ」

よく考えたらノーヒントで敵の場所まで行くななんて無理ですよねえ。襲撃した敵はどこかへ逃げたらしいですし。

「それじゃあ今日はこのくらいにして寝よう」

「寺から出て十分くらいで何を言いますか。せめて島を出てから休憩にしましょう」

でも今の時間帯は偶然欠航中だったりしそうですねえ。勇者社の交

通手段は事件発生などにそういう偶然がよくありますからねえ。
…まあ故意でしょうけど。

「船着場が見えてきたわ！あ、でも船が偶然手漕ぎボートしかないわ！」

やはり偶然船は欠航中でしたか。しかしキールさんがボートを漕いでくれるとは思えませんか、どうしましうかねえ。

「ふははは！よく来たわね！いや、来ましたわね！」

いきなり空中から登場したのは、特星のトップクラスの変質者である印納さんではないですか！…しかも喋り方が変ですねえ。

「えっと。いろいろ言いたいことがあるんだけど何か用かしら？」

「バイトですの。あんた達を足止めすればお金がもらえるらしいですわ。ま、手加減するから覚悟しなさいですの！」

手加減するより言葉遣いを戻すほうがありがたいですねえ。

「どうして変な言葉遣いなんですか？それもバイトのオプションか何かですかねえ？」

「サボリ幽霊と喋り方が近いから、区別しやすいようにとサービスですわ」

サービスというより拷問に近いですねえ。普段から変質的なのにさらに磨きが掛かって背筋が凍りそうです。女子小学生がああ喋り方なら抱きしめますが。

「そつちが手加減してもこつちは全力よ！じゃ、頑張つて！」

それだけ言い残してキールさんはどこかへ消えました。く、サボり能力でこの戦闘をサボるつもりですね！

「喋り方の近い者が消えたから私の喋りも元に戻すわ！槍魔術、スペシャルスタースピーア！」

印納さんが槍を掲げると太陽があつという間に沈んで夜になってしまいました！

「ふふふ。上を見てみなさい」

「上？あ、流れ星じゃないですか！」

空を見上げると夜空にいくつかの流れ星が見えます。しかも普通より長いこと光ってますねえ！

多くの女子小学生と幸せに暮らしたい、多くの女子小学生と幸せに暮らしたい、多くの女子小学生と幸せに暮らしたいですよっ！

「この流れ星の出現によって特星の多くの人々が何かを願うわ」

…今は戦闘中でした！ということはこの技で集めた願いを何かの攻撃に！？

「次よ！槍魔術、オーバークレート！」

印納さんが槍を前に突き出すと枕が出現します。真っ白な枕ですね

え。

「そして喰らいなさい！ 槍魔術、ハイパーシュート！……うおー、てりゃー」

先ほど出現させた枕をやる気なさそうに落とす印納さん。投げるモーションですけど投げれてません！

「やる気ないですねえ」

「手加減してるのよ。…あ、これ枕じゃなくてマシユマロよ！ 美味しいー！」

「地面に落とした奴ですよねえ？ それ」

一度地面に落ちた枕サイズのマシユマロを嚙まずに飲み込む印納さん。何故喉に詰まらないのかが不思議ですねえ。

「…お腹が少し膨らんだ。妊娠ね！」

「子供が真似するといけないのでそういうことは言わないでくださいよおっ！」

もしも枕サイズのマシユマロを誰かが喉に詰まらせたなら印納さんの責任ですねえ。そもそも枕サイズのマシユマロが売ってるかどうかかわかりませんが。

「甘いものを食べ過ぎて気分が悪いわ。私の負けね」

この人って強いのか弱いのかよくわかりませんねえ。実力はあるそ

うですけど槍の関係ない技が多いですよねえ。槍魔術なのに。

「あ、終わったみたいね」

勝負が終わったからか、姿を消していたキールさんが出てきました。

「ええ。特星が半壊するような戦いだっただわ」

平然と嘘をつく印納さん。あ、変な口調はもう使わないんですねえ。

「と、特星が半壊！？…そのシーン、撮ってない？記紀弥様に見せたら有休とかもらえそうなんだけど」

おお、見事に騙されてますねえ。というか、特星の危機より有休の心配ってどれだけサボり体質なんですか！？

「あなたの上司のお菓子一年分でならいいわよ」

「記紀弥様のお菓子取ったら有休減る！神酒のはこれ以上食べると気づかれて斬られる！」

印納さんの要求を全力で拒否するキールさん。神酒さんのお菓子を数日前に食べた私はどうすれば良いのでしょうか？誰か救いの手をくださいー！

「で、印納さんの雇い主は結局誰ですか？」

「あー。送ってあげるわ。槍魔術、ゴーゴーワープ！」

印納さんの技で私達の足元に穴が！

「ひええっ！」

そして落ちます。こういう展開は慣れているのですが、つつい叫んじゃいますよねえ。

「おとと」

地面に何とか着地。落ちる距離がわからないというのも結構怖いです
ねえ。

辺りを見渡すと地平線が見えるほどの草原が広がっています。草原
だけなので、全力で転がってみたくありませんねえ。

「あら。見渡す限りの草原ねー。今日からここは私のサボリポイント
ね！」

「私が居ないと来れないじゃない」

印納さんも普通についてきてますね。手伝ってくれるのでしょうか？

「ふふふふ。よく来たね、雑魚ベーとその他オマケ一人。…それと
印納？」

「おや、アルテさんじゃありませんか」

私の目の前に現れたのはアルティメット少女ことアルテさん。少し前に黒い原油かコーヒー的な液体を降らした女子小学生で、黒い雨には私も巻き込まれましたねえ。

しかし事件解決後に行った寿司屋では話さなかったのに、よく私の名前が判りましたねえ。

「言われた時間は足止めたわ。さあアルティメットな金額のバイト料をこの手に！」

「あ、うん。道案内の分も追加で出すよ」

アルテさんが印納さんに札束をパスします。それはもうアルティメットな金額間違いなしでしょう！

「じゃ、終わったら迎えに来るわ」

そういつて印納さんは姿を消します。来る時とは違って一瞬で消えました！

「それでアルテさん！あなたの目的は何ですか！？」

「君には特星に来る前に一度計画を邪魔されたからね。そのときの仕返しにきたのさ！」

…あれ？私って何かの計画とか邪魔しましたかねえ？

「キールさんですか？」

「ぐうー」

いつの間にか寝ているキールさん。草原で寝転ぶと服が汚れますよおっ！

「え、覚えてないの？おかしいなあ。えっと、アミユリー神社に住んでないの？」

「ななっ！」

あ、ありません！この子は占い師か何かでしょうか！？

「どど、どうして私のその計画を！？まだ誰にも話してない計画のはずですよっ！」

そう！私は毬の島に神社を建てる計画を考えているのです！そしてその計画はまだアイディア段階のもの！土地が記紀弥さんのものなので一部貸してもらえないか相談するつもりでした。

「ということは私の計画を邪魔したのは未来の雑魚べー？もしくは平行世界的な何かとか？」

頭を抱えながら考え込むアルテさん。なんだか物凄く可愛いですねえ。

「まあいいや！私の計画を邪魔したんだから、過去の君の計画も邪魔してやる！」

正直協力したいのですが、私達の将来を邪魔させるわけには行きません！和解してアルテさんも誘ってしまいますよおっ！

「と、その前に。記紀弥さんを襲わせた理由だけ聞いておきますよ

おっ！」

「記紀弥？私は幽霊に恨みはないよ。それにもう一人のバイトには神社の変人を襲えと言ったはずだ」

なるほど！もう一人のバイトは頭が悪いんですね！恐らく神社と寺を勘違いしたのでしょう。そして凍った縁側でスケートをしてる記紀弥さんに襲い掛かったわけですね。ナイス推理！

…でもどうして記紀弥さんが変人に見えたのでしょうか？寺の縁側スケートチャンピオンだからですかねえ？

「とにかく！私の魔学科法の力を思い知らせてやる！魔学科法ホノー！」

空中に浮かび上がったアルテさんを中心に炎が広がるように放たれます！

「うあっ！」

範囲が広いので避けきれません！服に炎がついたので転がって消します。

「別の星のようですが怪我はありませんねえ」

ということはこの草原は特星と同じか似たような効果があるようですねえ。死ぬ心配はありません。

「それにしても凄い威力ですねえ」

「当然！魔学科法は私のみつけた凄い技だからねえ！…あれ？体が

？」

アルテさんが動きが急に止まります。…近くにはいつの間にか起きていたキールさん。全体攻撃されたからサボれないと思ったんですかねえ？

「ドカアアン！」

急にアルテさんの後ろで爆発が起こります。

「睡眠妨害とサボり妨害とは迷惑なやつね！」

どうやらキールさんが自縛爆霊で攻撃したようです。

「今のは自縛爆霊か。ちょっと面倒だねー。魔学科法デンキ」

雲すらない空から雷が出現し、次々と当たりに降り注いでいます。眩しくてアルテさんの居場所とか見失いそうですねえ。

「くらえっ！」

「ぎゃあっ！」

なんてゆっくりしてる場合じゃありません！こっちに向けて雷を飛ばしてきましたよおっ！そして見事に喰らってしまいました！全然平気ですけど！

「そうだ！アルテさんに抱きついていれば攻撃されないはずです！」

アルテさんの攻撃は広範囲攻撃！アルテさんに抱きついてる私を

攻撃すれば、アルテさん自身もダメージを受けることになります！
これを機会にアルテさんとの仲も良くなるはず！

「キールさん！ここは私が接近戦で行きます！」

「そう？なら援護は任せなさい！」

とりあえずアルテさんの真下までいって距離を確かめましょう。まあ私のジャンプ力であれば届くでしょうがねえ。

「アルテ！これを見なさい！」

キールさんは足元の草を抜いてアルテさんの気をそらしているようです。

「どうよ！これで私がサボりなんかしない善人であることがわかったでしょ！働き者よ！」

「ちよつと前にサボり妨害が迷惑とか言ってたっけ？」

「妄想じゃないの？考えすぎは体に毒よ。少し休憩すれば？ちなみに私は死ぬまでの間に二十五年分はサボったわ」

キールさんって二十五歳ですよ？死ぬまでサボってたんでしょうねえ。幽霊になった今でもサボり続けてますが。

とか考えている間にアルテさんの真下に到着しました！アルテさんの浮いてる位置は二階くらいの位置なので、ジャンピングキックなどで跳べば何とか届きそうです。

それにしても良い眺めですねえ。…んん？

「アルテさん！ブルマーをパンツ代わりに履くのはどうかと思えますよおっ！」

あくまで偶然見えたのですが、スカートの下に体操ズボン型のブルマーを履いているようです。しかも大きなサイズなので中が見えそうです！見てみませんか！

「な、なに見てる！融合魔学科法エクサバースト！」

「こ、この技は！うわああっ！」

急に放たれたエクサバーストを避けれるはずもなく直撃。私は消滅してしまいました。まあ消滅しても復活できますけどねえ。今のうちにアルテさんの背後に移動しておきましょう。

「…ちょっとやりすぎじゃない？自業自得だけど」

キールさんが味方なのに自業自得といっていますねえ。私は他の人に見られるといけないので、忠告しただけなんですけどねえ。見えませんでしたがおそらくブルマーより中は履いてません。アルテさん周辺の空気の触り心地がそんな感じでしたし。

「し、仕方ないよ！梅雨でパンツが乾かないんだから！」

「え、本当に履いてないの？」

どうやら本当に履いてなかったようですねえ。辺りの気配からそれを感じ取った私は凄いかもしれません。

「…深い詮索はしないほうが君のためだよ」

これは元の状態に戻ったら確実にもう一度消されますねえ。しばらくこのまま盗み聞きしましょう。

「まあ危険人物も倒されたし、私は寺に帰るわ」

「へえい！ワーブ屋到着よ！」

印納さんがどこからか急に登場。おそらくどこからかこの勝負を見ていたのじゃねえ。さて、そろそろ戻りましょうか。

「よつと。それじゃあ帰りましょうかね」

浮いているアルテさんの上に復活してそのままアルテさんに掴まります。

「…なんだ。無事だったんだ」

非常に残念そうにいうアルテさん。おそらく心の中では感動の涙であふれているのじゃねえ！その出来事に私は感動しそうですよおっ！

「確かに邪魔されたんだけどなあ。パラレルワールドなのかな？」

そもそもアルテさんってどんな場所から来たのでしょうか？魔学科法もみつけた技と言っていたので特殊能力ではありませんよねえ。

「集まったわね？では！槍魔術、ゴーゴーワーブ！」

印納さんのワープで帰ったきた私達。そして私とキールさんは寺に到着したのですが、大問題が発覚してしまいました！

「で？私のお菓子を食べたのは雑魚ベーと聞いたんだが？」

現在神酒さんに全力で土下座中。どうやら寺の幽霊の一人が私のお菓子を食べる現場を見ていたようです。ちなみに隣でキールさんも土下座中」

「…何で私まで？」

「キールはサボりすぎだ！お前が掃除とかの当番の日は全部私が代わりにやっているんだぞ！」

キールさんの分を全部肩代わりですか。そんなの他の幽霊に任せれば良いと思いますけどねえ。

「なんだ。昨日食べたお菓子のことじゃないのね？」

「ほー」

神酒さんから殺氣的なオーラが噴出されてます！

「キールさん！何故そんなに危険なことを自ら！？」

「大丈夫よ。そろそろ時間だから」

って、そんなこと言ってる間にも神酒さんが刀を構えてます！私まで巻き込まれるのでは！？

「覚悟っ！」

「……………神酒」

そこへ現れたのはスケートが終わった様子の記紀弥さん。

「え？」

「きゃあっ！」

しかし登場が少し遅かったためか、キールさんは神酒さんの攻撃を受けてしまいます。タイミングを誤ったようですねえ。

「ちょっと記紀弥様。喋り始めが普段より微妙に遅くなかったですか？」

「……………峰打ちのようでしたので」

神酒さんの刀の持ち方を見ると刃が逆になっています。…峰打ちを見たかったのでしょうか？

「……………神酒、私のお菓子が無くなっていたのだけど知りませんか？」

それはもしかして神酒さんが私に食べさせようとしたあのお菓子？確か神酒さんが全部食べていましたよねえ。私は食べてないから無

罪です。

「え！あの、それは…、わかりません。わ、私は盗まれたお菓子のお菓子入れには近づいてませんから」

神酒さん！盗まれたお菓子を知ってるのは記紀弥さんと犯人くらいですよ！

「……そうですか？私はてつきり、昨日神酒のお菓子を食べた犯人を私と勘違いして、その仕返しに私のお菓子を食べたのかと思ってました。じゃあ間違えてお客さんに出したということもありませんね。近づいていないのだから」

なんてピンポイントでの確な予想！まるで教科書に書いてある答えをそのまま言っているようです！というか絶対にわかって言ってますよねえ。

昨日食べたお菓子ってことはキールさんが原因ですね。そのキールさんはすでに飽きたのか、どこかへサボリに出かけたようで居ません。

「……話は変わりますが、神酒が雑魚ベーさんに勧めていたお菓子。あれって私の無くなったと似ていたような」

「その時点で見られてた！？…幻覚です記紀弥様。スケートをしていた廊下の冷気で、記紀弥様は幻覚を見ていたのです！」

神酒さんって案外記紀弥さんに対して嘘とかつきますよねえ。ありえないくらい嘘が下手ですが。お菓子食べられた仕返しとかもしているの、案外友達に近い感覚で記紀弥さんと接している気がします。

それと部屋から廊下が見えるのだから、廊下から部屋が見えるのは当然ですよねえ。

「……………はあ。まあいいでしょう。神酒は下がってください」

「あ、はい。それではお菓子を買ってきます」

逃げるように外に飛んでいく神酒さん。遠くでキールさんの悲鳴が聞こえます。記紀弥さんは神酒さんが出ていくと軽く笑います。

「……………ふふ。今日は流れ星が流れましたね。雑魚ベーさんは三回なにかを願いましたか？」

流れ星？…ああ、几骨さんの使った変な技ですね。そういえばアルテさんの場所についたあたりから、夜から昼に戻ってましたねえ。

「もちろん三回きっちり願いましたよおっ！」

「……………そうですね。どんな願い事が楽しみです」

おお！記紀弥さんが私の願い事に興味を示していますよおっ！

「私の願い事を知りたいですか？」

「……………はい。女子小学生関係ですか？」

な、なぜ私の願い事が女子小学生関係だとわかったのでしょうか？

「多くの女子小学生と一緒に過ごしたいと願いましたよおっ！」

「……そうですか。数カ月後が楽しみですな」

楽しそうに微笑む記紀弥さん。数カ月後？数カ月後にそんなイベントが発生するのでしょうかねえ？

「数カ月後に何かあるのですか？」

「……………ええ、悟ンジャーの感動的かもしれない対決があります！」

悟ンジャーといえば悟さんがブラックのあの悟ンジャー？記紀弥さんがここまで目を輝かせているのですから、かなり確定的なんですよなえ。

…でも女子小学生との関係はあるのでしょうか？

「ところで記紀弥さんに頼みたいことがあるのですが。その前に雨双さんとアミユリーさんは？」

神社の土地のことを話す前に、二人が居ないかを確認します。二人には完成してから見せるつもりなので、居たら先に帰ってもらう必要があります。

「……………二人は先に帰らせました。それで頼みは何ですか？」

二人とも居ないとは都合が良いですねえ。完成してから二人にしかし土地なんて貸してくれるのでしょうか？まあ今更な疑問なのですが。

「実は神社を作ろうと思っているんです。それで毬の島の土地を一

部貸していただけませんかねえ？」

他の場所の土地を買っても良いのですが、島にある神社の方が特殊な感じで良いですよねえ。少し高い位置だと階段が作れてさらに雰囲気が出ますし。

「……………偶然掃除のやり過ぎで神社を建てれる状態の場所があります。少し高い位置なので階段を作る必要がありますが、そこであれば条件次第で貸すことができます」

記紀弥さんの条件がどんなものかは知りませんが、記紀弥さんの頼みですから土地の貸し借り関係なしで条件クリアを頑張りますよおっ！

「で、条件とはなにですか！？」

「……………そうですね。数カ月後にちょうど完成した神社に来てください。そして完成パーティーをしてください。でも悟さんには気づかれないようお願いします」

へ？悟さんに見つかる何か問題なのでしょう？

「その前に数カ月後にきっちり完成しますかねえ？天候とかに左右されませんか？」

「……………大丈夫です。神社は何もしなくても数カ月後には完成します。そして雑魚ベーさんが来れば完成パーティーをする人数の女子小学生が集まります。ただ女子小学生以外が集まる可能性もあるのです」

んー。なんだか記紀弥さんの言ってることが全然わかりません。そして何を企んでいるのかもさっぱりわかりません。悟さんは記紀弥さんに嫌われているのでしょうかねえ？

「……………私は次回の事件はぜひ悟さんに解決してほしいのです。解決する必要すらない事件ですが、それを解決するのが主人公だと思いますか？」

まったくわかりません。しかし記紀弥さんの主人公にこだわっているのはわかりました。そして私はそれを聞いて一つ思ったことがあります。

「悟さんに事件の内容と犯人を教えれば良いんじゃないですか？」

記紀弥さんの話を聞く限り、誰がどんな事件を起こすかわかっているようです。それなら悟さんにそのことをネタバレすれば良いのではないのでしょうか？

「……………駄目ですよ。それは絶対駄目です！そんな夢のない展開は私が許しません！そういうことにならないように、主人公や悟ンジャーのあり方について今から議論しましょう！」

その後、三日くらい飲まず食わずの徹夜で議論をさせられました。記紀弥さんの言いたいことはわかりませんでした。記紀弥さんとずっと一緒に嬉しい三日間でした。

話を聞いている間に悟さんが他の二人と寺の廊下でスケートをしたのが羨ましかったですけどねえ。

八話 夢のような事件

@ 悟視点 @

ふふふふふ！ははははは！

暑さが最大級のこの季節！去年の夏は黒い液体騒動で大変だったが、今年の夏はついに日頃の行いの良さが認められたようだ！

なんと宝くじの特等と半袖コートのセットが当たったのだ！

「コートのセットは五十着！宝くじは百億セル！これはもう笑うしかない！」

しかもこの日に限って他の三人は出かけている！これはもはや独り占め決定！もともと俺が当てたんだから結局は独り占めするけどな！

「ふふふふふ！ははははは！…なんか虚しい」

俺の求めているのはもっと上なんだよなあ。三人に自慢した上で百万セルずつ三人に譲ってやるくらいがいいな！というか自慢させる！

「恐らく寺でスケートでもしてるんだろうな。ならついでに記紀弥たちにも自慢するか！」

そして暇そうならさっさとこれを百億セルにかえて、寺で百億セル取得パーティでも開くかな。一生に一度の無駄遣いくらい別にいいだろう。

「それじゃあさっさと寺に向かうか！」

というわけで毬の寺に到着したのだが、ちょっとした問題が発生してしまった。

「無人？」

幽霊だから人かはわからないのだが、寺には幽霊一人いなかった。ヒトデ型の自縛爆霊とかいたからやっぱり人か。

「一人の間違いよ！自分もカウントしないと駄目じゃない！」

急に背後から話しかけてきたのは不法侵入者の印納さん。

「印納さんも自分自分をカウントしてませんよ」

「あら、私は神より凄いのに。それでも称号は人なのね」

神様の職業の相手でも倒したのだろうか？もしくは異世界の神を本当に倒したのかもしれない。印納さんなら本気でありえるよなあ。

「まあいいわ！今回の事件を解決したければ勝負よ！槍魔術、ダークプレート！」

印納さんが槍を掲げると空から低い唸り声のような音が聞こえる。

「なんだ!？」

部屋から外に出ると、なんと空に白い空間が出現している!しかも非常に少しずつだが広がっているぞ!

「ダークプレートは宇宙の黒を白で侵食する技。私を倒すか数ヶ月経つかしないと白い空しか見えないわよ!曇りでなければ日光や月光は通すけどね」

夜寝る時に空が白いなんて最悪じゃないか。朝や昼は光を通すだけまだ良心的だが。

「何でいつも俺の行動には邪魔が入るんだ!空気圧圧縮砲!」

「私の華麗なステップで避けてやるわ!」

空気の魔法弾で攻撃。空気圧圧縮砲は弾の速さが速い方なのに、印納さんは華麗とはいえない難しい避け方で回避し続ける。

「駄目だ。全然当たらない」

「前から思ってたんだけど、悟って水と空気以外に魔法弾は作らないの?」

「作れなくはないです」

特星に来たばかりの頃は様々な魔法弾を作った気がする。大体がろくな結果にならなかったんだけどな。炎の魔法弾は人の家に引火するし、雷の魔法弾は電気を通す銃を使うと自滅する。光の魔法弾は自分の視力を下げかねない。土はかっこよくない。闇や毒は環境に

悪そうなど、様々な深い事情があって使わないのだ。

ちなみにエクサバーストは俺の能力で撃っているわけではない。あれはエクサスターガンの力だ。

「そう。ならちよつと見せてみなさい！変身！」

え、変身？印納さん変身とかできるのか？

たとえ美人でも、変人の変身シーンって見たくないんだ。だから目を瞑っておこう。

「ふははは！私の美貌に見惚れなさい！」

その台詞がなければ何人かは見惚れるだろうな。惜しい。

「変身完了！お色気シーンがないのは仕様よ！そう、私は健全！純粹！完璧！まさしくパーフェクト！」

うわー。変身終わったけど目を開けたくない！今日の印納さんはデションがなくて危険だ！正直逃げたいが、覚悟を決めるか！

「…あれ。変化ない？」

今まで以上に変な姿の印納さんを想像してたのだが、変身前と大して変わらない。まさか単なる脅しのつもりか？

「適当にやるから本気で来なさい。槍魔術、百重メテオ落とし！」

「メテオ落とし？うおっ！」

数ヶ月前のように流れ星でも流れるのかと空を見ると、ダークプレート
の効果がわかりにくいくらい、空を埋め尽くす数の星が特星に
降ってきている！しかも恐らく全てがこちらに向いている気がする！

「これって特星が持たないレベルじゃないですか？」

「住民は避難済みよ！ついでに私はいつもの数倍美しいから隕石く
らい大丈夫！」

数倍とか言ってるといつもが美しくないってことだぞ！ってかそれ
どころじゃない！どんな魔法弾ならあれをどうにかできるんだ！？
…常識的に考えて無理だよなあ。

「…やる気が見えないわね。 槍魔術、タイムアップ」

印納さんが槍を振りかざす。すると辺りの温度が急上昇し、凄風
が吹き荒れる！そして辺りが赤い！

上を見ると一つの巨大な隕石が結構間近に迫っている！

「いつの間にこんな近くに！？ってか数が減ってる？」

「タイムアップの効果で隕石がぶつかる少し前の状態にしたわ！し
かも途中で隕石同士が溶けて合体したようね！」

普通じゃありえない状況じゃないか！しかも本気でどうにもならな
い！

考える。まず力技ではどうにもならない。エクサバーストで穴を開
けてそこを通り抜けても熱でやられる。というか特星が崩壊したら

どっちみちアウトだ。

「さあ残り数十秒よ」

こうなったら戦略的撤退をするしかない！そんな感じの魔法弾だ！

「えっと。適当転送弾！」

移動用の魔法弾をなんとか作り出す。

でも自分に銃を撃つのも何か嫌だな。銃自体は水鉄砲だけど。

「逃げるつもり？でも逃げたらこれが燃えるわよ！」

印納さんが懐から取り出したのはなんと数百万セルはありそうな札束だった！どうせ燃えるんだったらその前に俺が貰って良いんじゃないか！？

「今だったら私から奪えるかもね」

「確かに札束を貰ってから逃げるのも良いかなあ」

…いや待て！俺には百億セルの宝くじが！目の前の現金を逃すのは惜しいが、宝くじも現金も燃える可能性が高い！欲張ることがオチに繋がるなんてのはよくある話だ！

「俺は金に飛びつく男じゃないんです！」

印納さんにそう言って自分に魔法弾を撃つ。自分の周囲を魔法弾の光が包み、気づいた時には道路の上に居た。

「このくらいか。自分に撃ってよかった」

さっきの適当転送弾の効果範囲を見たところ、あまり効果範囲は広くないようだ。隕石を転送させようとしていたら失敗していただろう。

「それにしてもここは特星だよな？隕石はどうなったんだ？」

時間的にはもうすぐ隕石がさっき居た場所に落ちる筈だが、ここは空が普通の状態である。ダークプレートや百重メテオ落としての効果の影響が見受けられない。

「たっだいまあ」

空を見ていると印納さんが現れる。しかしその服装はさっきまでとは違って真っ黒だ。隕石が直撃したのだろうか？

「耐久性のないレプリカねー。今度夏休みの工作で作ろうかしら？」

「なにか壊れたんですか？」

「ん？さっきまで居た特星が壊れたのよ。ま、偽の特星なんだけどね」

偽！？じゃあ俺は寝てる間に偽の特星に連れ込まれたのか！そんなものを用意できるなんて犯人は何者なんだ？まさか魅異の協力があったのか？

「じゃあここが本物の特星なんですか？」

辺りを見る限りここは俺の家の近所の公園だ。ただ人が見当たらないので偽の特星かもしれない。

「当然ここは本物の特星よ！しかも運良く隠しステージのほうよ！」

「隠しステージ？」

ただでさえ特星は広すぎて俺的には隠しステージだらけに近い状態なのに、本物の隠しステージまであるのかよ！

「ふふふ！ここは神様の職業になった少女や特殊な人が多く居る場所よ！アミユリーや姫卸もこの隠しステージに住めるのよ！」

ああ。アミユリーが住んでいた場所か。確か異次元にあるのかなんとかって話だった筈だ。そういえば姫卸婆さんが居る海岸は波動でワープしないといけなかったな。

…姫卸婆さんは少女という扱いで良いのだろうか？いや、特殊な人のほうだな。

「そして今回の事件の犯人は隠しステージに居るわ！そう、私のパ―フェクトな勘がそれを告げてるわ！」

「そんなことって。どうせ犯人わかっていたりするんじゃないですか？」

前の時もカセット奪ってたし、今回もいつの間にか犯人側と接点とか持ってそうだ。…さすがにないか。

「そこまで見抜いてくるとはさすがね！」

え、本当に犯人わかってたのか？いやいや、主人公の俺がそこに気づかないわけがないか！とつくの昔に見抜いてたに決まってるじゃないか！

「しかし見抜かれることも予想の範囲内よ！」

「予想の範囲内であることすらも俺の推理どおりですよ！」

主人公の予想と推理は常に相手の上でなければならない！

「キリがないから話を戻すわ。数ヶ月前に凄い流れ星が流れたのは知ってる？」

「それはもちろん！」

数ヶ月前、急に日が沈んで夜になった日があったはずだ。確かそのときに流れ星が長いこと流れてたな。そうそう、あの日は運良く願い事を三回言えたぞ！

「その日に三回願った願いが出来る限り叶ってしまふ。それが今回の事件。そして願いが叶う日は今日なのよ」

よっしゃ！俺は三回願い事したから願いが叶うはず！どんな願い事かは忘れたが、今日はこれからなにか良いことがあるはずだ！宝くじが当たってさらに良いことがあるなんて凄い日じゃないか！

「別に害とかなさそうだから放置で良いんじゃないですか？というか放置しましょう！」

そもそも願い事を三回言うという前提条件があるし、被害者どころか関係者すら少ないだろう。

しかもこのまま事件が解決されたら俺の願い事が叶わなくなる！

「私は当然放置するわよ。でも苦勞したくないなら犯人を捜すほうが楽よー」

「ようやく見つけましたよ！犯人！」

急に背後から聞き覚えのあるような声で叫ばれる。後ろを振り向くとそこには久々に会うウィルがいた。

俺が驚いている間に印納さんは手を振ってどこかへ消えてしまった。

「ウィル、どうしてこんなところに？」

さつき犯人って言ってたから大体予想はつくが、とりあえずセオリー通りに聞いておく。

「名前は悟さんでしたよね？実はこの事件の犯人を倒すよう、魅異さんに頼まれてここに来ました」

く、魅異のやつが頼んだのか！

ウィルは元勇者だから戦闘経験はそこそこなはず。実力は不明だが現在の勇者の魅異が反則級だから、元勇者のウィルもかなりの実力者だろう。

「何で俺が犯人なんだ？俺は犯人じゃないしまったく怪しくないだろ！」

「ヒントがコートと悟ンジャーと自意識過剰とまともな変人の四つだったんです。これらが当てはまる人は今のところあなたしかいません！」

た、確かに狙ったかのようなヒントだ。特に二番。…だが四番目はおかしい！俺はまともだが変人ではない！よって犯人は恐らく俺ではないはずだ！

だが。変人でないと示すには勝負するのが一番早いはずだ。俺の技って名前が普通だし。

「なら勝負して俺が犯人じゃないことを証明する！空気圧圧縮砲！」

まずは速度やや早めの魔法弾で様子を見る。

「わ！勇者ガード！」

しかしウィルは剣を取り出してガードする。一応岩を砕ける威力の魔法弾のはずだが、それを防いでるウィルはビクともしない。実は重いんじゃないか？剣や装備が。

「あんな普通のガードで防げるのか。なんか凄いな」

「ふふん。現役時代に魅異さんに鍛えてもらいましたからね！あ、でも技は私のオリジナルですよ！」

てことは昔から魅異とは関係が深かったのか。俺はもっと昔からだ

けどな。

「いきますよ！幅跳び剣！」

「危なっ！」

飛び掛って斬りにきたがなんとか避ける。あらかじめいきますと言ったから避けられたが、なかなか動きが素早いぞ！

「ハエ叩きアタック！」

「高速剣！」

いつだったかにハエ叩きとウィルの剣が衝突する。そしてお互いに後ろに跳んで距離をとる。

「そんな…。ハエ叩きと互角なんて」

「ただのハエ叩きじゃないぞ！多分！」

遠距離は魔法弾で近距離はハエ叩き。この俺に隙などない！

「まだまだですよ！飛ばし剣！」

「へ？いてっ！」

ウィルが剣を投げて攻撃する。予想外の攻撃方法だったので避けれる直撃。少しコートが破れてしまった。新しいコートを着ていなくてよかったー。

「そして勇者二重斬り！」

「ならびー玉弾！」

ガラスの魔法弾を作り出しウィルの手に五発ほど撃つ。

「あ！」

すると剣を落とすウィル。今がチャンス！

「最後はめでたいのを喰らえ！大花火圧縮砲！」

炎の魔法弾でウィルを吹っ飛ばす。圧縮されているので花火の音はしないし、見かけも火の玉みたいな魔法弾だ。

「うう。剣を落とされるなんて」

どうやら落ち込んでいる様子のウィル。気絶はしてないけど戦意喪失で俺の勝ちかな。

「で、さっきも言ったが犯人は俺じゃないぞ」

「そうなんですか？なら証拠にそのコートを取ってください」

「それは無理。コートを着てないと体調不良になるから」

なぜかは知らないが本気で調子が悪くなるんだよなあ。なにかの呪いにでもかかっているのか？まあコートは好きだからいいけどさ。

「…やっぱり変人ですね」

「一般人だ。主人公だけだな」

それにしてもコートに悟ンジャーに自意識過剰にまともな変人か。最初の二つは完全に俺なんだけどなあ。

実はコートに関しては雷之家の男性陣全員に疑いがあるんだ。なぜか雷之家の男性陣はコートを着用するからな。

だけど悟ンジャーに加入してる奴は居るかどうかも怪しいくらい少ない。加入といっても悟ンジャーと名乗るだけでいいんだけどさ。

「俺みたいなやつか。…ああ！」

そういえば姿を見たことはないが俺と似たような奴がいるじゃないか！しかもそいつならこの場所に居る可能性が高い！

「じゃあ私は帰りますね」

「ん、そうか？じゃあな」

ウィルが帰ってしまったので犯人の場所へ向かうことにする。どうでもいいけど今回は小学生が居ない気がするな。どうしてだろうか？

俺がやってきたのは自分の部屋の前。隠しステージの構造はほとんど本物の特星と変わりなかったが、俺の部屋の扉は実物とはかなり違っていた。

ちなみに最初は勇者社に向かったがなにもなかった。だから次に犯人の居そうなこの部屋に来たら扉が違っていたというわけだ。

扉には二つのプレートをはめ込む穴があり、足元には一つの数字が書かれたプレートが大量に落ちている。そして扉の横にチャンスは一度という張り紙がある。

「正直、一度相手の居場所を外したからなあ」

答えは大体予想がつくのだが、さっき間違えて勇者社に行ったため少し自信がない。

「これとこれっ」と

プレートの中から三と一のプレートを見つけてはめ込む。すると鍵が開いた。俺はインターホンを押して全力で扉を開け放つ。

「出てこいボケ役ー！」

「出る前に入ってきた！？」

中に居たのはボケ役だった。声が同じだから姿も同じだと思っていたが、まさしくその通りだった。しかしよく見るとボケ役のコートには帽子がついていた。

「帽子付き半袖コートか？俺も嫌いじゃないが帽子付きはあんまり着ないぞ」

「そりゃあレアだし。…それよりよく暗号が解けたな」

犯人がボケ役だとわかってたからかなり簡単だったな。というか単純すぎるぞ。

「そっといえば声の聞こえ方がいつもどおり妙なんだが。幽霊か？」

今まではその場に居ないからこんな聞こえ方だと思ってたが、今ボケ役は目の前にいるのに声の聞こえ方が変だ。

「勝手に殺すな！俺の体の性質の半分くらいが夢だからこんな声なだけだ！」

ということとは世界中の夢が消えたらこいつを倒せるのか。そっちの方が楽かな？

「残念ながら今は自給自足してるから意味ないぞ」

俺の考えたことに返答するボケ役。

って、俺の考えを読めるのか？

「今更だな。今までも思考で会話してただろ？」

「さあ？」

とりあえず適当に受け流しておく。体の性質の半分が夢で自給自足しているならば、もう半分は恐らく借りているだけはず！借りている相手を倒せばボケ役の実力は半分になる！

いや、どう考えても俺から借りてるパターンじゃないか！取り付いてるし！

「そのとおり。まあ残り半分も自給自足でどうにかなるけどな」

どうにかなるのに取り付くとは迷惑な奴だ。

「でも霊に憑かれないんだ！存分に感謝しろ！」

こいつに付かれるくらいなら霊に憑かれたほうがマシだよなあ。

「もういいや。とにかく事件を起こした犯人として倒してやろう！」

「魅異に倒すことを頼まれていないツツコミ役には、残念ながら夢も希望もない！花の多い爽やかな草原風景！」

ポケ役が叫ぶと同時に部屋がどんどん広くなり、あたりに草や花が咲き始める。

「俺の能力は非質系の夢を操る能力！夢のあることなら制限や限度ありで願いを叶えたりもできるぞ！ふわふわ空中浮遊散歩！」

俺とポケ役の体が宙に浮いてゆっくりどこかへ流される。

「動きにくいな！水圧圧縮砲！」

「のんびり世界の大冒険！」

水の魔法弾で攻撃するが、ポケ役の使った技によって魔法弾の動きが遅くなる。よくみると辺りの動きも遅くなっているようで、俺とポケ役だけが通常の速さで浮いていた。

「輝く星の落ちる世界！」

魔法弾地帯を抜けると同時に辺りの早さが元に戻る。そしてすぐに手裏剣のような星を降らせてくるポケ役。印納さんのように隕石落とすよりはマシだが地味に痛い！

「いたたっ！重ね着コートガード！」

コート一枚では痛いので予備のコートを一枚取り出し重ね着する。正直夏にやりたくなかった技だが仕方ない。ちなみに頭は八工叩きでガード中だ。

「おお、やるじゃないか」

「主人公の力を思い知ったか！」

所詮ポケ役は俺のコピーもどき。主人公の素質を持つ俺には遠く及ばない。そう、偽者は本物に敗れる定めなんだっ！

「考えは全部伝わってるぞ。…でもまあその通りかもしれないな」

「お、負けを認めるのか？」

ポケ役はまだまだ戦えそうな雰囲気だが俺の意見に同意している。無駄な争いを避けようという考えか？ま、勝負してもどうせ俺が勝つからなあ。

「まさか！ただ本編を始めるだけだ！必殺、夢ある悟ンジャーの開幕！」

ポケ役が技を叫ぶとポケ役のコートがどんどん黒く染まっていく。

「って俺も!？」

俺のコートも黒くなっていくが、俺の場合は体までが黒くなっている。まさか日光の浴びすぎで日焼けしたんじゃない？

「それはない。ところでツツコミ役。テレビでやってた悟ンジャーは知ってるよな？」

「ファッション番組だっけ？」

「戦隊ものだろ、どうみても！」

おお、俺とすることがついつい嘘をついてしまった。いやいや悟ンジャーブラックだから天然なんだ。黒って宇宙の色だし天然要素抜群じゃないか！

「実はその悟ンジャーは第二期なんだ」

「…へ？」

馬鹿な！俺の見ていた悟ンジャーには第二期なんて表示はなかったぞ!…戦隊ものだからある意味当然かもしれないが。

「お前は第二期の悟ンジャーブラックの力を使える。だが俺が使うのは初代悟ンジャーブラックの力だ！本物が偽者より強いように、初代の力に第二期の力は通じない！」

説明長いなー。もう昼食の時間だしそろそろ家でテレビでも見たい。

「まず浮遊解除！」

俺とポケ役は地上に着地。下は芝生だったが普通に痛い！

「更に！…ん？」

ポケ役の動きが急に止まる。ポケ役が見ているほうを見ると一人の小学生がかなり上空を浮いて移動している。知り合いだろうか？

「魅異ー、魅異はいるか？」

「見ての通りだよ」

ポケ役が呼びかけると急に魅異が現れる。どこにでも現れる奴だ。

「って、何で急に魅異を呼んだんだ？あの小学生の知り合いか？」

「いやいや、ちょっと確認だ。確認は大事だと思うぞ俺は」

勝負を中断して確認か。マナー的にどうかと思うけどなあ。

「それにしても魅異は今日も可愛いなあ。付き合おう！」

「あの浮いてる小学生はポケ役の予想通り。でも私が特星に入れたわけじゃないよ。入れなかったわけでもないけどね」

ポケ役の土下座告白を無視して話をする魅異。入れてもないけど入れてなくもない？ってことはなにもしてないのか。

「いいのか？下手すると俺達の結婚場所がとんでもないことになるぞ」

「あの子の技はあくまで特殊能力。だから皆で力を合わせればどうにかできるよ」

さつきから二人で話を進めていて話についていけない。とりあえずあの小学生が滅茶苦茶強いかも知れないって事はわかったぜ。

「悟はあれが誰か分からないよね？あの小学生は神離^{しんり} 御衣^{みい}。私の妹でこんな字だよ」

魅異が空中に文字を映し出す。普通に紙に書けよ。

…御衣って魅異と読み方が同じじゃないか。

「御衣の特殊能力は様々なものを無視する能力。チート能力だな」

チート能力なのか？話しかけられても無視するくらいの使い道しか思い浮かばないんだが。

「正直わかりにくいぞ」

「御衣にはほとんど何も通じず、向こうからの攻撃は大体防げない」

「わかりやすい！そしてなんてチートだ！」

ほとんどや大体という言い回しをしてるから完璧ではないだろうが、それでも防御と攻撃が凄いのは確かだろう。

というか、そういう特殊能力は主人公である俺が使えるべきじゃないか？ハンデとしてこういう能力の割り振りなのか？

「水鉄砲が似合うからだろ？…とにかく御衣が攻撃を仕掛けたときの対策を集会かなにかで考えたらどうだ？」

「駄目だよボケ役。戦力も被害も楽しさもマイナスになるからね。各自自由行動が一番だよ」

「気が合うな。俺もまったく同じ考えなんだ。まあ俺と魅異との相性の良さってやつ？ふふふふふ！ははははは！」

どういう理屈でマイナスになるのかは判らないが、俺の知り合いには団体行動をしてくれそうな奴は本当に少ないと思う。

あとボケ役が気持ち悪い。笑い方とか特に気持ち悪い。もう一回あの笑い方をしたらダサさ十倍って叫んでやろう。

「あ、ちなみにこの笑い方はツツコミ役の物真似だぜ」

「してない！そんな笑い方断じてしてない！」

俺の笑い方はもっと上品なはず！笑い声を出さずに微笑むとかそんな感じに違いない！百億セルを持つ俺なら大丈夫！

「…げ！そういえばこのクジをクジ屋に持ってかないと！」

「そのクジ、どこで買ったんだ？」

ふふふ！当たりクジの買った店を忘れるわけないだろう！えっと…、

あれ？

「そついえば買った覚えがない。何かヒントはないのか!？」

当たりクジを取り出して見てみると、神門王国の神門城というところの主催しているらしい。

「神門王国？」

「神門王国は特星のある場所とは別の世界にある場所だね。異世界の中でも比較的私たちの世界と近いから、特星にも知ってる人はいるかも。…でも当選日が約四ヶ月後くらいだよ？」

魅異の指差す場所を見ると確かに当選日が四ヶ月くらい先になっている。もし当選日より早くもっていったら面倒だな。不正をして当てたと思われるか、宝くじを買った人ではないと思われるかもしれない。

「それは流れ星で叶えた願いだったりするか？」

「え?…思い出した!そうそう、そついえば宝くじのことを願ったんだっただ！」

印納さんが流れ星のことを言っていたときは忘れてたが、宝くじいくつが大当たりで当てたといって願ったんだ!そして今日コートと百億セルが当たったんだ!

…クジの当たり報告は手紙で届いたんだが、どうして数カ月後の当たりが今日届いたんだ?勇者社からだっただし、なんでもありか?

「おかしいな。そんな非現実的な当たり方はしないはずだが。悟が

その当たりかたを夢見てたなら別だが」

「むしろ現金で欲しい！」

「…だよな」

そんな焦らした当たりかたなんて望むわけないだろ！それなら朝起きて百億あったほうがまだマシだ！

「あれ魅異は？」

「流れ星のことを思い出した辺りで神社に行ったぞ。パーティに参加してくるって」

神社？俺の今まで行った場所に神社なんてものはなかったはずだが。

「記紀弥が神社の完成を願ったんだ。…そのおかげで俺とツツコミ役の決着がつかなかったが。で、その神社に雑魚ベーたちが移る住むらしいぞ」

おお！それなら食費が一人分に戻るわけか！まあ金持ちとなった俺には食費なんて些細なことだが、金持ちになっても出来るだけ節約はしないと。

「とりあえず俺達もパーティに参加するぞ！」

「もう昨日はとくに過ぎたぞ。今日の今は一時前だ」

「三日徹夜でパーティをやればいい！」

その後、本当に三日徹夜でパーティをやったらしい。俺は二日目の時点で寝てしまい、起きたらパーティは終わっていた。しかし三日とも楽しいパーティであったことは実感するのであった。

九話 未完のストーリー

@ 悟視点 @

紅葉の中にたまに枯葉が見つかるこの季節。自然だらけの毬の島にある神社の外では凍えるような戦いが行われていた。ちなみにアミユリー神社って名前らしい。

「主人公より神様優先するとはどういうことだ！おかわり！」

「悟神社とかが良かったのか？コートが祀られてそうで私は嫌だな
ー」

「私もおかわりね。もちろん大盛りで」

現在俺と印納さんはシロップ無しのかき氷を食べている。そして雨双がカキ氷の作る役だ。

俺は普通に遊びに来たのだが、運悪く印納さんが神社にいた。そして紅葉を見ながらのかき氷に誘われたのだ。意外にも紅葉を見ながら食べるかき氷はよかった。シロップ無しでも美味かった。

だが、印納さんがかき氷を速く食べるのが得意だと言いついたのだ。もちろん俺は主人公なので俺よりは遅いだろうと当然の意見を出した。すると印納さんがどっちが速く百杯食べるか勝負だと言いついたんだ！

「印納さん、百杯はもはや大食いの領域だと思いますけど」

「大丈夫よ。元は水だから。おかわり」

「はいはい。まったく、タダで二百杯かき氷を作る私が一番損じゃないか」

それでも引き受ける雨双はいい奴なのだろう。だが雨双がそれを引き受けなければ勝負が起こらなかったのも事実だ。…元々の原因は俺だけだ。

「これで百杯目！いい紅葉とかき氷だったわ」

俺なんか三十杯目くらいなのに印納さんはもう食べ終わる。速すぎる！そして紅葉見ながら食べれたことが驚きだ！

「悟の敗因は一つ。紅葉を見ながらかき氷を食べなかったことよ。じゃ、ごちそうさまでしたー」

そついつて印納さんは神社の中に入っていく。数分後、俺は神社の冷蔵庫のアイスを外を見ながら食べてる印納さんを発見するのだった。

「ちょっと寒いけど満腹ー」

よく考えたらタダで食べ放題なんだからお得だよな。今度から神社にかき氷を食べに来よう。

「あれ、悟？…なんだか幸せそうな顔してるねえ」

神社の中を歩いているとテーブルを拭いているアルテを発見。かき氷でもこぼしたのか？

ちなみにこの神社、外見は神社だが中は普通の家と同じような構造だ。トイレなどは最新式を使っている。ちなみに風呂は小さな銭湯みたいな感じだった。

「そういうお前も楽しそうだな」

「そうかな？まあ特星の侵略手段を思いついたからね」

そつえば前に特星を乗っ取るって言うってたような。特星を乗っ取るには強敵が多い気がするんだがどうするつもりだ？ちよつと作戦が気になる。

「でも本当に乗っ取れるのか？強い奴が多いぞ。特に魅異」

「魅異はここを乗っ取るくらいなら手出ししないよ。誰も本気で困らないからね」

まあ御衣っていう凄い妹が来ても各自判断とか言ってたからな。

とりあえずアルテには特星の強い奴に対する策はあるということか。

「ところでアルテはどうしてここに？」

「雑魚ベーに誘われたんだよ。神社ができたら一緒に住もうって。それでタダで住むのは嫌だからいろいろ手伝ってるんだよ」

特星を乗っ取るわりには妙にきつちりしてるな。逆にそんな性格だと特星メンバーを支配することなんてできないと思う。大雑把な性格のほうが特星らしい。

「うーん」

「あれ、どうした？」

気づくとアルテが何かを考え込んでいる。しかし考えつつも手はちゃんとテーブルを拭いている。

「昔聞いた話と違ってね。というか現代で前に聞いた計画とも違う」

なんだなんだ？昔に雑魚ベーに誘われたことでもあったのか？

「わかりやすく頼む」

「：私は特星に来る前に雑魚ベーと別の世界で会ったことがあってねえ。そのときに雑魚ベーは神社に小学生二人と住んでいると言っていたんだよ」

へー。アルテが特星に来る前か。確かにその頃だと神社は完成していないから話と違うな。

「時間軸がおかしいということだな？」

「いやいや。時間移動もしたかもしれないからそれはわからないよ」

なら矛盾点なんてものは一切ないじゃないか。

「でもあの時は神社を一人で何ヶ月もかけて作ったって自慢していたんだよねえ」

そついう肝心なことは先に言おう。そうしないと間違えた答えを言うじゃないか。

まあ確かに矛盾してるな。だってあれは記紀弥が流れ星に願って完成したんだ。というか神社って一人で作れるものなのか？

「そして神社完成の前日に私は神社の建っている場所で雑魚ベーター話をしたんだけど、この場所に一年以内に神社を建てるって話してたんだよ。でも次の日に完成パーティーだった。明らかにおかしいよね」

つまり本来ならば雑魚ベーターが神社を建てるはずなのに歴史が変化したってことか？うーん、事件のわりには害がないな。神社の完成ということとは変化してないわけだし。

「ならこういうのはどうだ？雑魚ベーターが一晩で一人で神社を建てた。しかしあまりに重労働で数ヶ月仕事した気分になり、それが記憶として残ったというパターンだ」

ただしこのパターンが通るなら、記憶を操る人物が居るとかの方が信用できそうだな。雑魚ベーターの記憶を操ったとか。

特星に来る前の話ならアルテの記憶を操るのは無理だな。特星に来た後のアルテは結構強いから多分その辺のやつなら能力使う前にやられるな。

「時間のことはそれで何とかなるけどもう一つ。神社で二人の少女と暮らしているの部分はどうする？」

「え、雑魚ベーって雨双とアミユリーと住んでるだろ？」

他に一緒に住むような物好きなんているのか？

「私がここにいるよ。もちろん神社完成時からずっと」

「あー」

さっきタダで住むのが嫌だって言ってたな！確かにアルテを含めれば三人の小学生が住んでいるな。あれ、でも待てよ？

「その昔の雑魚ベーはアルテのことを知ってたのか？」

「いや、お互い初めての出会いだよ」

本来はアルテが居なかったから二人の未来になったわけで。その話のその矛盾はアルテが居るから発生するわけだ。

「お前が原因かー！」

「あ、なるほどねえ」

まあ今の状況に満足してるから別に良いけど。それにしても未来って変わるんだな。

「あ、でも魅異は現代で会ったら久しぶりって言ってたよ！」

「魅異は例外」

無駄な推理に時間を使ってしまった。だが俺にかかればこの程度の問題は簡単に解決だ！…さて次は神社のどこを回ろう？

「でも流れ星とアルテは関係ないよな」

アルテが事件を起こしたからボケ役が事件を起こした？

「俺の事件はなんとなくだぞ。流れ星は印納に頼んだけどな」

ううん。やっぱりアルテは関係ないのか？ボケ役の気まぐれが原因で未来が変わったとか？…逆に話で聞いた未来と共通する部分を考えるか。

「過程はどうであれ、神社が完成して雑魚ベーたちが移り住んだことだな」

「神社に秘密でもあるのか？」

なら神社を見学するついでに怪しい場所がないか探るか。

「それにしてもさっきからどこ歩いてるんだ？歩く音が響いてるぞ」

「んー？なんか浮遊要塞って場所らしい」

少し前に一セル落として追いかけていたら、草むらの近くに地下への階段を発見したのだ。中に入ると浮遊要塞と大きな張り紙が張っ

てあつた。

「物凄く怪しいと思うんだが」

怪しいか？わざわざ浮遊要塞つて張り紙があるわけだし、雑魚ベー
辺りの作つたものだと思うんだが。少なくとも賢い奴が作つて
るってことはない気がする。まず作る場所が間違いだ。

「地下に作つたんじゃあ飛ぶ物も飛ばないな。飛ばない要塞は売
てしまおう」

「こらこら。売るのは勝手だけどこれは飛ぶ要塞だよ」

部屋の一つから一人の男が出てくる。その男はコートを着ている。
なんだか他人とは思えない雰囲気を出している男だ。年は校長と同
い年くらいだろうか？

んー？この男は怪しいな。物凄く怪しい。

「この程度の温度でコートなんか着るとは不審者っぽいな」

「ふん。君だつて着ているじゃないか。それにこれは我が家の風習
みたいなものだよ」

「それは気が合わないな。俺の家の風習も同じようなものなんだ」
なんだろう。この男とは昔に会ったことがあるかもしれない。そし
てなんとなく気に食わないな。雰囲気とかが特に気に食わない。正
直どうでもいいけど。

実はこの男が父親であることを覚えているのだが。でも昔に会ったときと雰囲気が変わっていない。だから恐らく偽者がよっぽどの変人かのどちらかだろう。

「おや。悟だったのか。気づかなかったよ」

「鈍いなあ。コート着て要塞に居るのに。…ところで誰だ？」

父親の可能性があっても名前は知らないで聞いておく。もしこいつが偽者だとしても、本物の父親が名乗った名はこいつが名乗った名と同じということにしよう。

「ふふふつ。私の名前は雷之^{らいの} 皇神^{おうしん}！お前の真の父親であり特星製作者の一人！…のサポート役であり夫でもある！」

要するに俺の母親よりも格下の中間管理職ということだ。もしかしたら一番下っ端かもしれない。

「あれ。聞き覚えのある声だと思ったら皇神がいるのか？」

急にボケ役が話しかけてくる。というかボケ役は皇神の知り合いなのか？

「ああ。悟ンジャーが対決する悪役の一人だ。幹部クラスの男だったはず」

悟ンジャーでも中間管理職かよ！完全に本職とリンクしてるじゃないか！

「ん？黙り込んでどうしたのだ？」

「それと偽者部隊の皇神ジャーブラックという敵でもある。負け続けてる幹部が悟ンジャーの真似をして部隊を作る。そして悟ンジャーと戦うって話だ」

主人公の偽者が現れるってのはよくあるけどさ。皇神ジャーって名前はないなあ。だってそのまんま過ぎるだろ。そもそもレンジャーじゃない！

「ああ。レンジャーではないのがもう一人居るな」

ファッション番組のボケ役には言われたくない！

「…それにしても幹部に偽者役とか悲惨だなー」

口に出すつもりはなかったが、ついつい言ってしまう。

「ほう。この私の实力を見抜くとはさすがだ。これはもう戦うしかないだろう！」

まあもともと戦うことは予想済みだしさっさと倒すか。

「悟ンジャーとしても父親としても偽者な男に負ける気はない！」

「後者は本物なのだが。平和な雰囲気！」

皇神の技を回避して攻撃を仕掛けようと思っていたが何も起こらない。むしろなんだか戦う気分じゃなくなってきた。そうだ。どうして俺達が戦う必要があるんだ？

「攻撃を避けようなんて考えて損したな！」

「そうかい。それは損だったね。必殺、皇神ジャー三打撃！」

皇神が結構な速さで三発ほど殴る。

むむむ。一体どうしてこの男は俺を攻撃するのだろうか？かなり痛い
が子供が転んで怪我するのと同じようなものか。

「何をするんだ？暇なのか？」

「私は忙しいのだ！さっさと帰ってくれ！必殺、幹部タックル！」

今度は体当たりで壁まで吹っ飛ぶ。

おー、凄い迫力！そして死にそう。

「どうすればいいんだ？」

もしも俺が攻撃すれば他のやつらが真似する可能性がある。そうすれば特星中で能力を使った戦いが行われるかもしれない！

「いつも通りじゃないか」

え？そ、そういえばそんな気がするような。もしかしてあの男と戦
って大丈夫なのか？…そりやそうだ！

「食らいたまえ！幹部型潰し！」

こちらに走ってくる皇神。技の名前に跳んで俺を押しつぶすつも

りだろう。ならばこちらは潰される直前に反撃すればいい。

「ふははははは！」

皇神は両手を広げ笑いながら走ってくる。怖い！怖い！ギリギリまで引きつけないければカウンターっぽくない。というわけで我慢してやろう。

「とっつー！」

そして皇神が跳ぶ。ダサい！…そして俺に当たる直前に俺は銃を取り出し皇神につきつけて、距離がなくなりそうなところで叫ぶ。

「密着暴発砲！」

俺が言い終わると同時に銃の先端が皇神の顔に密着。そして暴発した銃により皇神は吹き飛ぶ。

「うわあぁっ！ぐほっ！」

やや上向きに使ったから皇神は天井に叩きつけられ落ちる。

この技は弾を撃つ技ではない。弾を銃の中で何かを暴発させて勢いと振動で敵を吹き飛ばす技である。そのため密着してないと意味がない。だが摩擦効果で熱さ分の追加ダメージがあるのだ！…銃によつては薄い鉄板に穴が空くかも。

「でも手が地味に痺れるぞ」

振動するから肩こりにはいいかもしれないが…。今日の装備も水鉄

砲だから水圧圧縮砲のほうがよかったかも。水の魔法弾の威力がある気がするし。

「ふん！手が痺れて弾が撃てないならこの勝負は私が頂こう！」

「水圧圧縮砲！」

余裕そうな皇神を水の魔法弾で吹き飛ばす。一応岩でも碎ける魔法弾なので多少は堪えるだろう。

「うぐぐ。手が痺れているのになぜ撃てたんだい？」

「スタミナ凄いな！…別に魔法弾は引き金引く必要はないんだ。引いても撃てるけどな」

恐らく特訓すれば銃無しでも撃てると思う。ただ俺の場合は命中精度が落ちるかもしれない。

そもそも水鉄砲で岩が碎けるわけがないだろ。これは市販されてた子供向けの水鉄砲だぞ！しかも七十セルとちょっとお得品！

「よく壊れなかったな。振動で」

勇者社の製品を甘く見るな！特星での生活のことを考えてか、使い捨ての物を除いたおもちゃ系製品の平均寿命が約二百年！俺の持つハエ叩きなどの伝説系のものは半永久的に使えるそうだ！

「あのハエ叩きって伝説系の物なのか…」

「私の負けのようだ。潔く負けを認めて逃げるとしよう」

元気に立ち上がったって走って外へ行く皇神。もう回復したのか、まだ体力に余裕があったのかはわからない。ただ元気な奴だとは思
う。

「皇神は体力があるタイプだな。まあ悪役なら回復早いほうが向いてるな。そういう意味では雑魚ベー辺りは悪役にピッタリだな」

「普通に悪役じゃないか？姫卸婆さんと二人で正義の小学生と戦ってそうだ。もちろん雑魚ベーが幹部でな。でもそれだと俺達の出番がなくなるな。」

しばらく歩いていると動力室らしき部屋を発見した。この部屋を破壊すれば浮遊要塞の発進を防げるだろう。何故防ぐのかは知らないが。

「この部屋を破壊すれば何者かのたくらみを邪魔できるからだろ？」

そうだった。でも結局は雑魚ベーたちがここでしかできない事がわからないんだよな。

「入り口の蓋が開いていたので急いで来てみましたが……。やはり見つかったようですねえ」

「見つかったちゃったな。ふたの閉め忘れが原因で」

俺達が入った後に入ってきたのは雑魚ベー。場所的に予想してたが、やはりこの浮遊要塞は雑魚ベーが作っていたらしい。

「閉め忘れてましたか！？戸締りには気を使うほうなんですが」

「まあもつとも開け忘れたのは別人だろうけどな」

さつき皇神が逃げていくときに閉め忘れたのだろう。俺が見つけたときに開いてたのも皇神か母親を名乗る変人かのどちらかだな。母親はまだ見つけてないけど。

「とにかく今日は浮遊要塞の発進日です！これを使って悟さんと戦うつもりなので外に出てくださいよおっ！」

「どっちにしても結果は主人公の勝ちだ！なら今勝つほうが手っ取り早い！ビー玉弾！」

ガラスの弾を大量に発射してして攻撃するが雑魚ベーは腕で顔を守る。…いつもなら回避行動をとりそうだが。

「く、普通銃で撃つ弾はビービー弾だと思いますがねえ！」

「小さい弾って嫌いなんだ」

なんというかダイナミックさに欠けるんだよな。ビー玉ならそこそこ重くて普通の窓なら割れる威力はある。しかもたまに大きめのビー玉が出るというおまけつきだ！

それにしても接近技ばかりなのは大変だなー！わざわざ敵の攻撃に突っ込む必要があるなんて！こっちは逃げながら撃つだけで勝て

るんだから余裕だ余裕！

「…悟さん。もしかして私に遠距離がないと考えてるんじゃないですかねえ？」

「え…」

ナイスタイミングで言われたことを考えていたものだから、ついつい攻撃を中断してしまう。

まさか雑魚ベーが遠距離攻撃を覚えたのだろうか？

「私は特星にきてから使っていない技があります。それがこのカムという技ですよっ！」

雑魚ベーが手の上にバスケットボール程度の球体を出現させる。その球体はオレンジ色でばやけていることがはっきりみえる。俺の視力でなければ単にばやけて見えるだろうが。

「それっ！」

「うわ！」

そしてその球体をこちらに飛ばしてきた！…だがその球体の速度は非常に遅く、子供の徒歩と同じくらいの速さだ。

「触れたら爆発とか？」

「いえ全然」

ただの色のついた気体のようだ。どんな気体で出来ているんだろうとちよつと触ってみる。

「つて、危ないですよっ！」

「へ？熱っ！」

カムの中は結構な温度だったようで驚いて飛びのく。…く、火傷するかと思った。特星だからしないけどそのくらい熱かった。

「大丈夫ですか？カムは気体の球体を発射する技です。そして人肌から熱湯くらいまでの間で調節でき、早さも少しなら調節可能です」

人肌から熱湯くらいか。冬であれば暖房代の節約になるということか。もっとも夏の需要はほとんどないだろうが。

「これで戦力は同じですよっ！必殺、ジャンピングキック！」

恒例の必殺技でこっちへ攻撃する雑魚ベー。それを走って回避する。

「よく避けれましたねえ。…あ！」

急に雑魚ベーが焦ったような声をあげる。よくみると雑魚ベーの足が動力装置みたいなものの隙間に挟まっている。…これはチャンス！

どうせ動力装置も壊すつもりだった。ならば雑魚ベー相手だし手っ取り早くこの技でいくか。

「しかしまだまだですよっ！カム！」

次はさつきよりも少し速いカムを出す雑魚ベ―。だがもう手遅れだ！

「エクサバースト！」

俺の使える最大の技で雑魚ベ―と装置を消滅させる。充電はまた空になった。だが何とかなるだろう。あくまでも勘だが。

「ああ…。私の作った浮遊要塞が」

いつの間にか復活している雑魚ベ―を発見。回復早いな。

「ま、必要経費だと思って諦める。真犯人は倒してやるから」

「何のことですかー？…もう帰りますよお」

さてさて雑魚ベ―が怪しくなかったことが証明された。あとは真犯人を倒すのみだ！

その後俺はほとんどの部屋を歩き回ったが誰も居なかった。そして疲れたので休憩室にやってきた。休憩室は体育館のような構造でステージがある。

「…ここだけ見ると要塞には見えないな」

壁は木造でできているので見た目は完全に体育館だな。

そんなことを考えていると急に電気が消えてしまつ。そしてステージにスポットライトらしきものがあてられる。

「なんだ！？」

「ようこそ私の舞台へ。私の世界へ。そして私の物語へ。…ふふふ、私の期待通りの物語を進む主人公、雷之 悟！お前が来るのを私は非常に楽しみに待っていた！」

な、なんだ！？この少女からは今までの奴とは違つラスボスの雰囲気が出てゐるぞ！まさか本気で勝負とかしてくるつもりか！？

「皇神！今の私はあまりラスボスみたいにはみえないぞ！もつとラスボスの雰囲気を開にするんだ！」

「無茶をいわないでくおくれ。これが限度というものだ。そもそも君にラスボスの雰囲気というのは、私の雰囲気を操る能力を使つてもかなり無理があるのだよ」

よく見ると逃げたはずの皇神が舞台幕の裏にいるのが見える。俺が雑魚ベ一の相手をしてる間に入つたのだろう。

「仕方ないなあ。…私の名は雷之^{らいの} 天利^{あま}！この特星の物語を司る者であり、お前の真の母親でもある！」

舞台裏がいてとわかつていたので今はあまり雰囲気が凄くない。とつかサポート役の皇神は大変だな。バトルして更に演出係。下っ端同然の働きじゃないか。

「それで目的は？というか俺になにか用でもあるのか？」

おそらく俺がここにいるのは天利のなんらかの能力が原因だろう。

「皇神。ここは感動的な雰囲気だ」

「あ、すまない。もうすぐニュースが始まるから帰らせていただくよ」

それだけ言い残すと凄い速さで休憩室を出ていく皇神。感動的な雰囲気どころか部屋中に気まずい雰囲気が流れる。

「……く！今夜のニュースは全て中止にしてやるっ！そして皇神には絶望的な物語を経験させてやる！」

なんだかよく判らないが天利は舞台幕に八つ当たりをしている。数秒で舞台幕がボロボロになる。高そうなのにもったいない。

「とにかく天利！お前が主犯だってことはわかってる！俺と勝負だ！」

「嫌だ。今の私は凄く機嫌が悪い。別の機会に相手してやるから出直して来い」

別の機会だと？今まで勝負を後回しにされたことはなかったがどうする？……いやいや、相手の調子が悪いなら楽々と倒すチャンスじゃないか！

「と、私がいつでも出直す気はないんだろう？」

「さすがは偽者の親の片割れだ。俺のことをよく判ってるじゃない

か」

「それを決めるのは私だ。今日の物語は終了だが一つ言っておくぞ。私たちは本気で人を困らせる気はないんだ。本気で事件解決しても良いがたまには楽しむべきだぞ。じゃ、また会おう！」

言いたいことを言っただけで天利はなにかを考える。すると天利の姿が消えてしまった。

「天利は勘違いしてるな」

急にボケ役が話しかけてくる。途中から居なかったようだがどこに行っていたのだろうか？

「雑魚ベーを悪の幹部に勧誘してたんだ」

元悟ンジャーが敵役を勧誘するのはどうかと思う。

「それで天利はなにを勘違いしてるんだ？」

「お前が事件解決を頑張ってると思ってたようだ。どうみてもやる気ないのに」

物凄く嫌だが毎回これでも頑張ってるぞ！やる気はないけど！

「…そういえば天利のことで気になったことがあるんだが」

「ん？」

さっき俺は次の敵が母親であると思っていた。そして予想通り天利

は俺の母親だったわけだ。だけどそれにしても物凄く不自然なことがあるのだ。

「ラスボスの雰囲気ですつこみ損ねたが、天利の姿がどうみても子供だった」

「…子供？」

そう。俺が対峙していた雷之。天利は子供だった。しかも雨双やアミューリーよりも小さかった。大体小学生の低学年くらいの姿だったと思う。

「俺が会った時は高校生か大学生くらいの姿だったはずだが。確かに後半は声が幼かったな。…まあ変な物語でも体験して子供になったんだろう」

昔の天利ってどんなやつだったんだ？今でもかなり無茶そうな性格に見えたが。

「悪のラスボスとして悟ンジャーに出てたな。…本当にラスボスのような奴だったぞ。物語はアドリブで作ればいいと言って、打ち合わせもせず本番を行うようなやつだ。天利の出番があると月に二桁はカメラが壊れるんだ」

ひええ、恐ろしい。もう今度の勝負はしないでおこうかな。特殊能力無しでも強そうなのに、それに加えて特殊能力なんか使わせたらどうなるのか予想もできない。

さて。宝くじの当選日まであと半分というときに気づいた親たちの事件。主犯である母親の天利との勝負は後回しになった。だが俺は

いつ現れるかわからない天利に勝てるのだろうか？

また、当日に無事に百億セルを入手できるのだろうか？…でも正直これはなんとしても入手したい。事件に巻き込まれるのは覚悟のうえで。

そのような問題を残したまま食べるかき氷は非常に美味しいぞ！…それにしてもなにかの事件を無視した気がするが気のせいだろうか？

十話 普段と変わらない異世界旅行

@悟視点@

雪が降ったり降らなかったりと天気が気になるこの季節。俺を祝福するかのように雪が降っている。そう、今日はついに百億セルを貰うことが出来る！

だがまずは異世界にいく方法を探す必要がある。正直そこまで考えていなかったのだ。

「どうして今まで気づかなかったんだ？」

俺はこの数ヶ月間の半分以上の間、神社で日々を過ごした気がする。神社や寺で食事をするとか自分で作る手間が省けて楽だからだ。だがもう少し当選日のことを考えていれば…。

「おーい！朝食の時間だ！」

雨双の呼ぶ声が聞こえる。さて、俺の神社ライフも今日で終了だ。

朝食を食べた俺は勇者社に来ていた。なぜなら他に当てがないこともないが面倒だからである。知り合いが多すぎるのも主人公としては問題だな。…ま、俺は人望が厚いから仕方ない。

「そうですか？いつも戦つてばかりに見えますが」

当然のことを考えていると几骨さんが現れる。事件のありそうな日に会うのは久々かもしれない。

「それは事件の日に見るからだ。普段の俺は非常に平和的だぞ」

ゲームや昼寝で忙しいからな。もしくは誰かのところへ遊びに行ったり。…平和的だがなにかが駄目な気がする。生活態度でも見直そうかな？

「それでよくお金が足りますね」

「いつも足りてないからなあ。足りない生活に慣れたようだ」

よく考えたら最近は本当に収入がない状態だ。これならまだ子供のときの収入の方が大きいぞ。もっともそのときは円だったが。

「ところで今すぐ旅行に行きたいんだが。予約できるか？」

「今すぐ行きたいのに予約も何もないと思いますが。というかお金がないのに余裕ですね。…少々待つてください」

几骨さんは携帯電話を取り出してどこかへ電話をする。

携帯電話か。そういえば俺も携帯電話を持っていたが見かけないな。…まあ用があつたら直接乗り込むほうが手っ取り早いわけだが。

「よかったですね、悟さん。今日は異世界旅行が無料の日になりました」

「じゃあそれで」

「ではこちらへどうぞ」

几骨さんに案内されてついていく。

いきなり無料とはいってもどおりの怪しさだな。これは厄介ごとに巻き込まれるのはほぼ確定か？

「本当に動くとは思わなかった」

几骨さんが案内した先は地下であった。地下に異世界へ行く乗り物があるというので俺は地下鉄などを想像していた。だが実際はちよつと違っていた。

「ダンボール列車か」

そう。俺が乗っているのは巨大で長いダンボールだったのだ。一応三箱の列車らしいが外見では一つのダンボールにしか見えない。…そう思っていたのだが逆側は一部ガラスだった。

そして今走っているのは宇宙空間である。

几骨の話では異世界に行くだけならワープ装置で十分とのこと。だが今回は旅行としていくので寄り道をするらしい。そして少し前に

地下からワープして宇宙に移動。現在に至るわけだ。

「こっちの面が一部ガラスなのは外を見せるためか？」

外を見ると特星と地球が見える。冬の朝なのでまだどちらの星もほぼ全域が薄暗い。

「そういえば他のダンボールはどうだ？」

このダンボールには他の乗客は居ない。だが他のダンボールには誰か居るかもしれない。居たら居たで旅行のセンスを疑うけどな。

「ドアは？これか！」

切れ込みの入った壁があつたので剥がしてみる。すると俺の居るダンボールと同じような部屋があつた。
しかし人は見当たらない。

「ならばその奥も開けるまで！そりゃあっ！」

奥に見えた切れ込みに向かって突っ込む。これは奥に誰も居ないと思つたからだ。だがこういうときに限って予想は外れる。

「へ？ぐっ！」

「うおお！つと！」

切れ込みのすぐ後ろに居たのは雨双だった。俺が突っ込んだ衝撃で雨双は少し後ろに吹き飛んで尻餅をつく。俺は倒れそうになるが近くに居た雑魚ベーに掴まって倒れるのを防ぐ。

「さ、悟さん!？」

「あれ、悟だつてば」

アミユリーは少し離れた場所からガラスの外を眺めていたようだ。吹き飛ばされた雨双に気づいたアミユリーは手を貸しに行く。

「まさかお前達が居たとは」

朝食を食べたときにはそんなことは話してなかったはず。まさか俺を邪魔者扱いして三人でこっそり旅行に行こうとしてたのか!？

「実はですねえ、一泊二日の異世界無料旅行券が福引きで当たったんですよおっ!無料なのが三人までだったので私達で旅行へ向かっていたというわけです!」

雑魚ベーがその無料の券とやらを見せてくる。確かに言っている通りのようだ。

それにしても寒いな。普通の寒さに加えて背筋に寒気がする。

「…人を吹き飛ばして悪いの一言もないのか」

「げ!雨双!」

そういえばさつき軽くぶつかったことを謝ってなかった!でもなんだかすでに手遅れな気がする!

「わ、悪い!少しは俺にも問題はあった!」

「六割はお前が悪い！奥義、アイススイート！」

謝ったのに無情にも放たれる巨大冷凍光線。攻撃範囲的に横には避けられないので後ろに逃げる。しかし努力空しく俺の体は巨大冷凍光線にのみこまれたのだった。

「死ぬかと思った」

高校に入った時の授業でこんなことを聞いたことがある。特星の不死は特星内でしか効果がない。不老は一度特星に入れば効果が続く。だから特星の外では怪我に気をつけろ、という話だ。

今のアイススイートは凍りどころが悪ければ死んでいたかもしれない。

「大丈夫ですよっ！魅異さんが列車内なら特星と同じ効果があると言っていましたからねえ！」

あ、そうだったのか。そういえば几骨さんもそんなことを言っていたような気がする。興味がない話は聞き流してたけど。

ちなみに雑魚ベーもアイススイートの被害を受けた。俺の傍に居たから仕方ないが。

「あ！ワープしたんだってば！」

アミユリーがそう叫ぶのでガラスから外をしてみる。すると辺りは黒い景色から白い景色に変わった。どうやら雲の中を移動しているようだ。

「そういえばお前達はここにいつ頃乗ったんだ？」

家で朝食を食べた俺は真っ先に勇者社に向かったはずだ。そして俺が乗ると同時にダンボールは出発した。雑魚ベーたちが俺より早くここに乗れたとは思えないのだが。

「私たちは魅異さんに直接送ってもらいました。悟さんは宝くじつてところですかねえ？まあ旅行代くらいは軽く取り戻せる当たりですからねえ！」

…旅行代が全員無料になったことは黙っておこう。せっかく無料の嬉しさを味わっているのにそれを壊すのはあまりに酷だろう。俺なら軽く落ち込む。

「ここが味噌王国かー」

「神門王国ですよっ！」

俺の軽い冗談につっこみをする雑魚ベー。なんか悔しい。

とにかく王国に到着した俺達。時間に余裕があるから俺は雑魚ベー

のチェックインとやらに付き添うことにしていた。

雑魚ベーたちの泊まる宿は城の近くにある。これなら神門城に向かうのは楽だ。

「終わりました。どうしますかねえ？」

雑魚ベーたちは部屋にも向かわず次の行動を決めている。そういえば一泊二日のわりに何も持っていないように見える。

「用事がないなら宝くじの引き換え場所を探してくれないか？」

神門城の中にあるということまではわかっている。だが城のどこにあるかはわからないため、探す必要があるのだ。

「私は別に構わないぞ。この宿のパフェを奢ってくれれば」

「私もパフェで良いんだってば」

良いだろう良いだろう！百億セルあればパフェなんてちょっとした出費程度でしかない！特星に帰った後に行く記念パーティーの出費よりは断然安い！

「私もパフェ二個で良いです。でもその服装で大丈夫ですかねえ？」

雑魚ベーが不安そうに考えながら喋り始める。さり気なくパフェを二つ要求しているが、その程度のことなどそこまで気にする必要はない。

「あの城は関係の深い貴族やかなり強い人しか入れないんです。実

権を握らされている姫がいるんですが、その人が物凄く強くてですねえ。この異世界を宇宙ごと消せると言われています」

お、恐ろしい姫様だな！というか俺達のいる世界とは本当に別世界なのか。俺は同じ宇宙上に存在する別の星かと思ってた。

「なるほど。機嫌を損ねない奴かその姫を止めれるやつしか会えないのか。なら私たちは強い人として入る必要があるな」

雨双の言うとおりだ。俺達の中に貴族といえるようなやつは一切居ない。変装して忍び込む方法すら不可能なメンバーだ。特に雑魚ベーが。

「うーん。ちょっと交渉してくるので待っててください」

雑魚ベーが交渉のために城に走っていく。一番交渉が駄目そうな奴が行ってしまった。少しの間待つてるか。

「成功ですよおっ！」

待とうと思っていたら雑魚ベーが手を振って走ってくる。意外にその城って誰でも入れたりするんじゃないか？

百億セルは物凄く意外にも簡単に手にはいった。とはいっても銀行振り込みなのだが、特星の口座にも振り込んでくれるらしい。というわけで俺は十万セルほど引き出しておく。パフェ代はこれで

大丈夫だ。

それにしてもこの世界の通貨もセルだとは思わなかった。特星と交流が深かったりするのか。もしくは日本のほかにもこの世界もモチーフにしたのか。

「ほー。報告を聞いてまさかとは思ったが本当に来ていたのか」

あとはパフェを奢って帰るだけだというのに、城の関係者らしき男がやってくる。…この言い方からしてこの中の誰かの知り合いか？

「久しぶりだなベータ。いや、貴族をやめたから雑魚ベータが正しいのか？」

どうやらこの男は雑魚ベータに変なあだ名をつけていたらしい。雑魚ベータが貴族だということも驚きだが、雑魚ベータに変なあだ名があったということも驚きだ。

「あなたは東武さん！というかなぜあなたがそのことを！？」

「待て。他のやつらにも俺の名前を言っておく。…俺の名は神離^{しんり}東武^{とうぶ}！今はここに住む子供姫の従者として働いている貴族だ！」

自信満々に自己紹介をする東武。俺の想像していた従者や貴族とはだいぶイメージが違うが、雑魚ベータですら貴族なのだからこんな奴でも貴族なのだろう。

「あれ、苗字変えたんですねえ」

「前のはこの俺に相応しくない！だから事故で特星に行ったときに

苗字を借りてやった！」

「事故ですか。大変そうですねえ」

特星に行っていたから雑魚ベーの噂も耳に入っただのか。しかし特星に行ったということはあいつも何らかの特殊能力を持ってるのか。

「悟。私たちは先にパフェを食べにいくぞ」

「そうだってば。せつかくの再開を邪魔するのはなにか悪いんだってば」

「そうだなー。俺もパフェ食いたいから先いくか」

雑魚ベーには悪いが俺達はパフェを食べなければならない。懐かしの再会を邪魔しないようにと俺達はパフェを食べに向かう。

「待て」

向かうつもりだったが東武に呼び止められる。もしかして雑魚ベーの知り合いだからタダで料理を奢ってくれるのか？もちろんパフェつきで。

「この城には強者が一部の貴族のみが入れる。要するに、貴族でなさそうな貴様達は強さを示さなければならないということだ！」

そういえばそんな設定だと雑魚ベーが言ってたな。宝くじ屋の子供は偉そうな服装だったんだが、貴族だからだったのか。…貴族が宝くじを売るのか？

「ちょっと待ってください！悟さんはともかくこの二人は本当に強いですよっ！」

「そして俺はこの二人と並べられないほどの主人公、雷之 悟だ！主人公である俺には元貴族も、職業だけの神も、魅異の一番弟子の妹ですら敵わない！」

そう！主人公が負けるのは負けバトルイベントのときだ！そしてこのイベントはボスクラスの相手でないとは発生しない！姫の下っ端であるこいつに負ける道理などないのだ！

「なら貴様達の実力とやらを見せてもらおうか。…その前にルールは貴様達に合わせてやろうか？」

「どういうことだっけー？」

「ああ。特星じゃないからか。確かにルールは私達に合わせてもらったほうがいいな」

アミユリーはわかっておらず、逆に雨双は勝手に話を進めようとする。俺もよくはわからないが、敵に合わせてもらう必要なんてないだろ！

「待て待て。この俺が居る限り負けはないも同然だぞ？ならむしろ四対一だし、俺達が手加減するくらいで十分じゃないか！」

「別に悟がいいなら私は構わないが。悟が一番死にそうだったし」

「へ、死ぬ？」

…げ！そうだ、ここは特星の外じゃないか！

夏休み前に授業であることをならった。不老の効果は一度特星に入れば持続らしいのだが、不死でいられるのは特星の中でのみらしい。理屈はわからんがそういうことらしい。

どうする？主人公は死んでも生き返る可能性は高い。だが復活までの間は主人公交代が必須となるだろう。…それとちよつと怖い。

「まあ俺は大丈夫だな！だけど雨双やアミューリーや雑魚ベーが心配だから特別に特星のルールで勝負してやろう！」

それに東武を間違えてオーバーキルする可能性もあるからなー。いやあ、敵にまで気を使う俺ってなかなか余裕あるなあ。

…防弾コートを五枚くらい重ねて着ておこつ。確か予備のコートを持ってきたはずだ。

「いいだろう。こつちへこい」

東武に言われてついていく。まあ城の中で暴れるわけにもいかないか。

「ここなら被害は出ない。覚悟はいいか？」

東武に連れて来られた場所は町外れの草原だった。草原が多いなん

て特星エリアみたいな場所だな。後で宝探してもしようかな？

「……って待て！結局不死の問題はどうなった！？」

場所を変えたからといって特星の外だから不死ではない。このまま勝負したら俺以外の誰かが死ぬ可能性がある。

「ふん。説明を聞いてなかったのか。アホだな貴様」

「悟さん、東武さんの能力は生と死を操る能力でしてねえ。ここに来る途中に私たちを不死にしてくれたんですよおっ！」

草原に来るまで宝くじのことを考えていて説明に気づかなかった。
……ってか能力強いな。

「不老不死でも貴様達全員を気絶させるくらい容易いことだ！」

「やれるものならやってみろ。奥義、アイススイート！」

「あ、俺も水圧圧縮砲！」

もう少し会話が続きそうな気がしたのだが、雨双が先手を取って攻撃したので俺もついでに攻撃する。もっとも俺の魔法弾は途中で凍って地面に落ちているのだが。

雨双のアイススイートにより草原の奥が冷気で見えなくなる。

「おい！これだと敵の攻撃が見えないぞ！」

「それは想定内だ。アイスセーフ」

見えなくても大丈夫といった様子でアミユリーの近くへ移動する雨双。そして前方に厚い氷の壁を出現させる。

「なかなか威力だが甘い！余分な火の玉！」

冷気で見えない部分から大量の火の玉が飛んでくる。雑魚ベーは必死に避け、俺はハエ叩きで何とか掻き消す。氷の壁に守られている二人は楽そうだ。

「私と悟さんが前衛をやるので二人は援護をお願いしますよおっ！」

「任されたんだってば！」

勝手にそんなことを決める雑魚ベー。でもそれって選択としてはどうなんだ？雨双は攻撃だけが強そうで、アミユリーは結構頭が悪い。…不安だ。

「包囲磁力球、そして収集磁力だつてば」

「ん？な、なんだ！？」

理屈はよく判らないが、東武の居る辺りの水蒸気となった冷気がこっちによってくる。そして見えないが、声がするので東武も引き寄せられているようだ。

名前に一定の範囲内のものを引き寄せてるのか？でも水蒸気は磁力で引き寄せられないような気がする。どういう仕組みだろう？

「壁の子供の仕業か！生命、飛行不死身鳥！」

水蒸気の方から熱が発生し、中から鳥の形の炎が飛び出してくる。その炎は生きてるかのように氷の壁を飛びこし、アミューリーへと向かう。

「ん？アイスニードル」

雨双は氷の針で炎の鳥を撃墜する。どうやら後ろの心配は要らないようだ。

「ならば！生命、流れ不死人！」

「おっと！雑魚ベーガード！」

東武は人型の水を流してくる。そして人型の水は殴りかかってくるが雑魚ベーを盾にして防ぐ。

「ぐは！」

「く、水でも結構な強さだな」

威力は水圧圧縮砲ほどではないが弾き飛ばされそうになる。

「ふふん、まだまだだ。転生、固定不死ペンギン！」

さっきの水人間の形が変形し、ペンギンの形になる。しかもその水は瞬時に凍り、ペンギン形の氷となった！

「今度は私の番ですよおっ！悟さんガード！」

げ！雑魚ベーガードがあるから安心していたら盾にされてしまった！しかも今回の攻撃は鋭い突きだから痛そうだ！

「危なっ！」

「痛い！…避けないでくださいよおっ！」

なんとか屈んでペンギンの突きを回避する。その代わりに俺を盾にしていた雑魚ベーはダメージを受ける。主人公を盾にしたから自業自得だ。

「生命、堂々たる不死の樹！」

東武はさらに巨大な動く木を作り出す。だがようやく霧が晴れてきた！これならこちらからも攻撃できる！

「氷で攻撃だ雨双！…あれ？二人はどうした？」

後ろを見るとサポート役の雨双とアミューリーが居ない。トイレか？

「二人ならペンギンの攻撃を避けたときに悟さんが落とした財布を持って、先にパフェを食べに行くと行って帰りました。ぎゃあっ！」

ペンギンが説明する雑魚ベーに攻撃している間にポケットを探す。だが俺の財布は本当になくなっている！

「…これは大ピンチだ」

あの財布には引き出した十万セル、そして百億セル近くが預けてある銀行のキャッシュカードが入っている。あの二人なら勝手に使わ

ないだろうが、もしもキャッシュカードが無くなったら宝くじがパ
ーになる！

「悟さん危ない！」

財布をなくした原因の氷ペンギンがこちらに攻撃を仕掛けてくる。

そう、このペンギンが悪いのだ。このペンギンが原因で俺の百億セ
ルがパーになるかもしれない。

「このつ、ペンギンもどきがあつ！…エクサバースト！」

怒りに任せてペンギンを放り投げ、落下しているところをエクサバ
ーストで撃ち抜く。エクサバーストはペンギンごと木を撃ち抜き、
木の上半分がそのまま東武の上に倒れ落ちる。

「あ、あの技は！ぐああつ！」

倒れ落ちた気に東武は潰される。だが不老不死の技で無事なよう
なので、そのまま放置して財布を追いかけることにする。

「雑魚ベー！早く財布を取り返しに行くぞ！」

「あ、私は東武さんを救出してからいきます！」

おお、雑魚ベーがあのだ二人より東武を優先するなんて意外だ。それ
とも俺の百億セルのことなんかどうでもいいと思っているのだろうか？

「んー？なんだあれ？」

俺は宿どころか町の場合すらわからず草原を歩き続けていた。すると一人の小学生程度の女の子とを見つけた。そしてその子の周りには材質の硬そうな制服を着た、中学生くらいの女子が十数人でその子を取り囲んでいる。

そして数人が女の子を取り押さえようと飛び掛る。

…どうする？助けることで主人公の地位を高めるか。もしくは助けて謝礼金でも貰うか。まあ助けることにはかわりはないな。

「空気圧圧縮砲！」

風の魔法弾で取り押さえている奴の一人を吹き飛ばす。吹き飛ばされた奴は体中に擦り傷を負い、軽く出血している。

あ、そうか。特星じゃないから怪我するんだった。…吹き飛ばした奴には少し申し訳ない。

「何者ですか！？」

「立場が美味しい者かな。だが名前の無さそうな奴に名乗る名前はない！」

「え？いえあの、私たちは名前ありますけど」

囲んでいる奴の一人は困惑しているようだ。だが俺にはわかる！これだけ大人数で行動している奴らというのは、リーダー格以外は名前のないモブキャラに過ぎないということを！

「さあその子をこっちに渡してもらおうか」

「人攫い！？同業者です、構えてください！」

武器を持った中学生くらいの奴が数名前に出てくる。

同業者ということはこいつらも人攫いなのだろうか？だとしたらなんて治安の悪い国なのだろう。…というかこんな子を攫うメリットはあるのか？

「ならばさっきのやつと同じ目にあわせてやるか」

「ひい！ごめんなさいー！」

「私たちは帰りますー！」

しかし銃を構えた途端に喋ったやつを残して他の女子中学生はさっき逃げていく。本当に俺がそんなことする人に見えたのだろうか？だって正義の味方オーラが全開じゃないか？

「だ、駄目ですねこれは。こうなったら私一人でやるしかありません！」

「逃げないのか」

どうやら残された奴は他より少しは格上のようなのだ。名前を聞いてお

こうかな？

「あ！用事を思い出したので帰ります！急用なのでそれでは！」

そういつて逃げていく最後の一人。俺と小学生くらいの女の子だけが残される。

「大丈夫だったか？」

とりあえず傷などがないか確かめる。物凄くボロボロならより危険な時に救ったように見えるし、無傷であれば俺が主人公として凄い実力があるように思える。今回は女の子が無傷なので主人公としての地位が上がる結果となるだろう。

「うん。…もしかして私を助けてくれたの？」

「ああ。攫われてるように見えたからな。…違ったか？」

「攫われかけてたよ。でも私を助ける人なんて珍しいねー」

それはそうだろう。こんな町外れの草原で攫われそうになってたんだから、助ける以前に見つけるほうが大変だと思うぞ。

「困ってたわけじゃないよ。そうだ、お礼に家に来る？」

…ここで謝礼を貰うのもいいが、ただの謝礼よりも百億セルの方が大事だろう。謝礼はまた別の日に貰うということで今日は先に帰ろう。

「悪いが急ぎなんだ。ところで神門王国はどこだ？」

「迷子なの？ここは一応王国内だよ。町なら私も行くから案内しようか？」

「そうか？なら頼む」

そうか。王国だから一応この辺全部が神門王国国内なのか。まあどっちにせよ町の場所が判るわけなので案内してもらおう。

「それじゃあ私は帰るから。今度暇なら遊びに着てね、コートの変な人！」

手を振って去っていく女の子。名前も家の場所も言わずに遊びにこいとは無茶を言う。だが小学生のことであれば雑魚ベーに聞けば大丈夫だ！…名前も聞いてなかった。

「あれ？少女の気配がしたのにいませんねえ」

噂はしていないが雑魚ベーが宿の中から出てくる。気配で人がわかるのだろうか？なんだか便利そうだ。決して取得したくはないが。

「さっき小学生くらいの女の子に案内してもらったぞ」

「あ、悟さん。居たんですか」

…そこそこ長い付き合いのはずだが俺の気配はわからないのか？い

や、主人公のオーラが気配を消しているのか。もしくは対女の子専用か。…両方だな。

「で、その女の子が誘拐されそうだったところを俺が助けたんだ」

「ええ!？」

ふふふ、悔しがっているな。雑魚ベーのことだから自分が助けて女の子との高感度を上げたいはずだ!

「悟さんが人助けなんて、いくら貰うつもりだったんですか？」

「ちよつと待て!…俺が見返りのためにその子を助けたと思ってるのか!」

「そりやまあ。そこそこ長い付き合いですからねえ。そのくらいはわかりますよおっ!」

まったくそんな風に俺を見てたとは酷いやつだ。俺はあくまで主人公としての役目を果たしただけで、そこには見返りなんて無粋なもの求めていないというのに。

「いいか雑魚ベー!俺のような主人公の素質のある者は常に子供達の笑顔の為に行動しなければならぬ!少なくともそういう心がけが大事なんだ!」

「おお!さすがは悟さんです!今まではただの変人だと思っ
ていましたが見直しました!」

まあ主人公というのは最初は評価されないものだ。だがそろそろ日

頃の行いが評価に繋がる頃なのだろう。そう、俺が主人公らしくなる時期がやってくる！きつと恋愛フラグを乱立するに違いない！

「あ、ところで俺の財布は？」

「二人が持っていますよおっ！…そうだ！二人の笑顔のためににかお土産でも買ってあげませんか？」

「無理。もったいない」

ただでさえパフェを奢っているというのにそれ以上奢るのは厳しい。俺自身が参加できるパーティなら大丈夫なのだが、相手だけが一方的に得をするというのはなんだか良い気分じゃない。

「え。あの、子供達の笑顔は？」

「え？さあ？なんのことだ？」

そういえばついさっきそんなことを言った気がする。ただ今の気分には合わないことだからあまり覚えていないが。

「…悟さんらしいですねえ。やっぱり悟さんは変人だと思います」

その後、俺達四人はお土産を買いに出かけた。雑魚ベーが二人にお土産を買ってあげていたので、俺もついでに雑魚ベーに土産を買ってもらった。

俺は泊まる予定の宿を買い取り、一人一部屋ずつ豪華な部屋を提供してあげた。

だが、俺達は旅行に関する重要な問題に気づかないまま眠りにつく

の
だ
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3210k/>

変な星でツッコミ生活！？

2011年9月7日12時02分発行